

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

【小説】

The priest Agunim invaded Hyrule and evilness spreaded around the sacred land. To make the devil Gannon rise from the dead, he performed necromatic celemony and offered the princes Zelda in sacrifice.

# ゼルダの伝説②

【神々のトライフォース】

Then Paul, a descandan of Hyrea, arrived with Sahara. He was the only braver who could overthrow Gannon by the Master Sword and save the Princess. People expected their triumph...

AUTHOR・KATSUYUKI OZAKI

尾崎克之



# Scanned by Melora for History of Hyrule

historyofhyrule.com  
melorasworld@gmail.com

Hey everyone! I'd personally be really happy to see you make scanlations or take portions of this and make fun things and posts with it. The only things I ask are:

1. Try to link back to **historyofhyrule.com**, somewhere, somehow, for credit. This is so people can find more info and other works, reach me if they have questions, or want to contribute other content. It's actually how I've found out about so many of these things and been able to get them to you in turn.

2: Please don't just re-upload the whole set somewhere else. This is in case it's re-released officially so I, and my site, don't come into conflict with any publishers or artists for making scans. (Or, if you do use the whole set, because you've made scanlations, just don't use them commercially and take the full set of my scanned images down if you ever hear about a re-release.) In the 20 years I've been doing this I have never once left scans up if something comes back into print again. I only do the scanning work I do because, as an enthusiast, I don't want something that is actually out of print and rare to be lost forever.

Thank you for understanding!  
-Melora

# LEGEND OF ZELDA

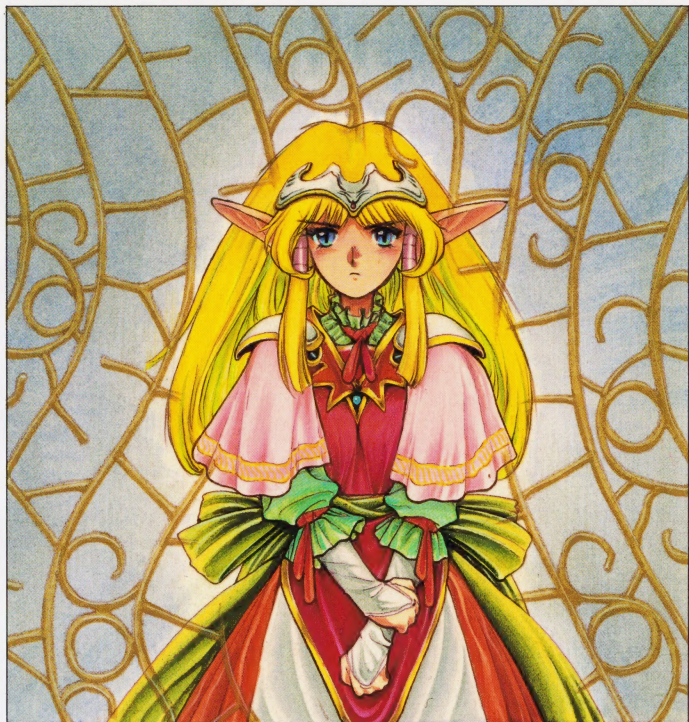
The priest Agunin invaded Hyrule and evilness spreaded around the sacred land.

To make the devil Gannon rise from the dead, he performed necromatic  
celemony and offered the princes Zelda in sacrifice.

Then Paul, a descendan of Hyrea, arrived with Sahara.

He was the only braver who could overthrow Gannon by the  
Master Sword and save the Princess. People expected their triumph....





「私をどうしようというのです」

城の地下牢には、濡れた重い空気が満ちている。少しでも動けば、空気は水に代わり、幾粒もの滴になって、ゼルダ姫の金色の髪をつたってしたたり落ちた。



「<sup>そ</sup>れ、望むもの有らば、我もまた、それを望む」  
トライフォースは自らでは善悪を判断しない。最初に触れた者こそを、その力を受け継ぐ者として選ぶのだ。邪悪の王ガノンはこうして誕生した。



### SAHARA [サハラ]

剣士の長サハスラーラの孫。ポールと共にゼルダ姫を救いに旅立つ。スピアと剣の名手。姫を思う気持ちは誰にも引けをとらない。



### PAUL [ポール]

ハイリア人の血を継ぐ者。騎士団の一系であるナイト族の子孫。ゼルダ姫を救うため、そして勇者となるべく、闇の世界へと戦いを挑む。



### AGUNIM [アグニム]

ハイラルの司祭。飢えと飢饉を止めた救世主とは仮の姿。最後のいけにえゼルダ姫を闇の世界へ送りこみ、魔王ガノンの復活を目論む。



### ZELDA [ゼルダ姫]

トライフォースの伝説にまつわる7人の賢者の長の血を受け継ぐ。悪の支配下におちたハイラル城の地下牢で捕われの身。

ゼルダの伝説

2

神々のトライフォース

尾崎克之

カバーイラスト／藤原カムイ  
口絵・本文挿画／枕草一郎  
装丁／広井一夫〔WIDE〕  
本文デザイン／松岡裕典〔NEXT〕  
編集・制作／レッカ社



第一章 勇者への旅立ち・

4

第二章 トライフオースの伝説・

47

第三章 勇気の紋章・

85

第四章 闇の世界へ・

135

第五章 闘いの終焉・

179

あとがき・

224

ポール ■ 古代ハイリアの騎士団の血を継ぐ。勇者となるべく闇の世界へ。

サハラ ■ サハスラーラの孫。ポールと共に旅立つ。

アトラス ■ 秘密結社「剣士の翼」の一員。ポールを一流の剣士に育てあげた。

サハスラーラ ■ ハイラル城下に住む最強の剣士にして長老。「剣士の翼」の長。

アグニム ■ ハイラルの司祭。ゼルダ姫を幽閉し、儀式とりを行う。

魔王ガノン ■ トライフォースを手に入れた邪悪の王。闇の世界に封印されている。

ゼルダ姫 ■ ポールと同じ伝説を母にもつ。地下牢で捕らわれの身。

登場人物 ■ 紹介

第一章

---

勇者への旅立ち

「見えた！」

涼しく、気持ちのよい風が吹いていた。空は高い。太陽は真南の天井にいる。大いなる自然の恵みこそは目についても、この豊かな世界の空の下、いったい誰がこれから起こる破滅の物語を予感するだろう。

地方領土、中央に住む者たちはあからさまな優越感を頬に浮かべてそれをアウトドメイン（はずれ者の居住国）と呼んだが、そのアウトドメインからハイラルの城下へは一本の街道をもって通じ、他のルートは閉ざされている。

街道はよく整備されている。大粒の石を敷き詰めたその隙間を、雑草の生えぬよう種子のかけらの一粒さえも丹念に取り除かれた粘土でならしかため、砂ほこりのひとつもたない体裁である。五頭だての馬車が一台、街道を上っていた。荷の幌の大きい連結をひとつひっばって走る貿易船だ。

日の光に頭をやられるのを防ぐためにターバンを幾重にも巻いたスキタヤ族の御者は、船の振動の、それまでひどかったのが目に見えて落ち着いてきたことから、城下への到着は間もないことを先刻承知していた。御者は、たずなを巻いた指をわずかにしめこみ、馬の足の急ぐのをゆるめた。

「見えたよ、父上。お城！」

ハイラルは聖域である。外敵から過剰に守られ、卑俗なふるまいは過敏に禁忌されていた。

一本のみの街道もその証<sup>あか</sup>しである。人はようとして動かず、物も動かず、市場は発達することなく、伝説<sup>が</sup>人々を養<sup>う</sup>すべてだった。

トライフォースと呼ばれる神の力にまつわる伝説を根に、ゆらぐことのない強<sup>きよちう</sup>固<sup>こ</sup>な世界がここに枝葉<sup>えだは</sup>を伸ばして実をつけたが、しかしその殻<sup>から</sup>は、ときにたやすく邪悪<sup>じあく</sup>の器<sup>うつわ</sup>に変わりうることを人は知るべきだったろう。古代より伝わるトライフォースとは何か。それを正確に言える者は、ハイラルの城に住む王族ならびに、きわめて位の高い僧の一部に限られていた。

伝説に生きる、ということとはつまり、ハイラルの城に住む者を愛し、敬<sup>やぶやぶ</sup>つて生きる、ということである。トライフォースの真実を知ることのない城下の人間にとっては、城に住む者に従<sup>したが</sup>うそれが、唯一<sup>ゆいいつぜつたい</sup>絶対<sup>たい</sup>の正義<sup>せいぎ</sup>なのだった。

ハイラル城の尖塔<sup>せんとう</sup>が、緑あつい森をつきぬけて遙<sup>はる</sup>かに見えた。街道は、旅の最後の森を抜けようとして、枝葉<sup>えだは</sup>の覆<sup>おお</sup>う樹林<sup>せんりん</sup>のトンネルへと入る。

「息子よ。窓をしめてここにお座り。葉<sup>は</sup>でまぶたを切<sup>き</sup>つてもつまらぬ」

貿易船<sup>ぼうえいせん</sup>としては、大きい方である。御者台<sup>ごしやだい</sup>はひとり用で狭いが、その分、キャビンの連結は広く造<sup>つく</sup>つてある。野宿<sup>のじゆく</sup>の必要<sup>ひつやう</sup>なときでも、野外<sup>げい</sup>にテントを張<sup>は</sup>ることなく、キャビンで夜をやり過<sup>すご</sup>すことのできる、長距離旅行用の船だ。

松材<sup>しょうざい</sup>のいいところをふんだんに使い、キャビンは上等な居間<sup>いま</sup>といったところである。間仕切り<sup>まじきり</sup>の

壁さえもある贅沢なつくりで、その奥は寢室。天井の低さを考えなければ、地着きの屋敷の一室とさほどかわらない。

壁に家族像の絵画のかかっているのを見れば、由緒のある商族の乗る船だということがわかる。その絵画の下、藁がたっぷりしこまれて道中のわずらわしさを吸い込む長椅子に、詰襟の、黒い、軍服仕立ての礼服を着た商人が座り、髭をねじっている。横に寄り添うようにいる、木綿ではあるけれど仕立てのよい白いドレス姿は、その奥方だ。

キャビンの窓を開け、首を出して外を眺めていた少年が、長椅子に戻り、白いドレスのその膝の上に座った。父親の軍服の、そのまま丈を詰めたような豪壮な服を着ているが、それがかえって愛らしく、胸元に咲かせた大きなリボンは、まだそういう甘えぶりを見せていい年頃であることを教えていた。

「ハイラルを発ったのは、まだおまえの目の見えぬころであつた」

軍服の商人は、窓から戻つた息子の頭に手をやった。母親は長かつた旅の、何事もなくやつと終る安堵で、夫をやさしく見つめた。

奥方の安堵が移つたのだらう。軍服の商人は、これで旅も終わりと見極め、長椅子の背もたれに身体をあずけ、誰にとともなくひとりごとを始めた。

「俺は商族に生まれ、おまえもまた商族に生まれた。我ら商族は、時代を予感することこそが務

めだ。先代は、孫の顔を見ることなく、おまえの生まれる前日に死んだが、おれを間際の寝台に呼び、こう言った。よく覚えていろ。鉱油のランプに蛾が飛び込む、蒸し暑い晩だった。

……乱世が始まる。アウトドメインをまわり、乱世の備えをするがいい。ハイラルにとどまっては、今後売るものは、おまえの身体以外にはなくなるであろう。人が伝説に生きられるのは三世紀が限度。このたびのその汀が、おまえの世代だ。乱世に栄えるも、我らが商族の皮肉な宿命。しかしそれは歴史の意志だ。強く進め……。

出発の時、蓄財のありたけを積み込んだ後ろの幌に、今、おまえの孫の代まで家系を途絶えさせぬほどの商いの品を積み帰った。人を殺す道具も少なくない。厳しい時代だが、我らにとっては豊饒の時代でもある」

軍服の商人は、ふたたび背をのばし、息子の頭に手をやった。

「息子よ。おまえはまだ幼いが、これから父のやることをしっかりと見ているがよい。父の非情を憎むこともあるだろう。憎め。だが、それは俺が正しいと知ってやることなのだ」

言葉の意味を知ってか知らずか、息子は少々つりあがった細くきれいな目を、一層気強く見せて、父親を見つめた。奥方は、自分が選んだ夫、そして自分が生んだ息子、ふたりの男を頼もしく見た。

「しかし……」

父親から先に視線を落とした。何事だろう。母親の胸に、小さな雲が渦巻いた。やはり旅はこのまま終わらないのか。

「おれは、商いの品の他、もうひとつ、不吉な予言を仕入れてハイラルに戻った」

軍服の商人は、胸に手を差し入れ、手の平にやっと隠れるほどの大きさの金属製の筒を取り出した。文を託すための筒である。

商人は、一族の紋章の刻印された指輪を左の薬指からはずし、筒の中央、ちようど指輪の大きさにうがたれた穴に紋章をあわせ、印をつけた。王族への、それも重要な用足しの書簡でなければそ  
うはしない作法である。

夫の、その振舞いを見ていた奥方の胸に不安がつつた。

「先代の言っていた乱世とは、ここにしたためた予言をもって始まるものか。乱世とは、後に平らかになることが約束されて乱れる時代。しかし、この予言はそうは言わぬ。

予言は言う。明日から待っているのは、幌の荷も、ここにいる俺も、そして息子よ。おまえのいることも、すべてを空しくする破滅の穴ぼこだと」

軍服の商人は、つと立ち上がった。

「まず、王に謁見する」

奥方は、夫の広い背中を見た。絶望で、両の下まぶたに、涙が粒を結んだ。奥方は、膝の上の息



子を堅く抱きしめた。

商人は長椅子を離れ、御者台ぎよしやだいに通じる小窓こまどに手をかけた。木の枠わくの、こすれてたてる乾いた音がして小窓は開き、キャビンに風が舞い込んだ。

御者の、ターバンを巻いた頭が見えた。

「屋敷へ戻るのは後だ。馬の足をゆるめず、まっすぐ城へ向かえ」

ターバンの頭が振り向いた。その、しわ深く、日に焼けた細い顔は歪ゆがみ笑った。

御者の腕が素早く動いた。

軍服の商人の広い背中が、ぐらりと揺れた。二、三步、後ずさった商人の両手が、前方の何も無い宙に頼りを求めて泳いだ。奥方は、かたく両目を閉じ、なお一層力いっそうをこめて息子を抱きしめた。

商人はそのまま後ずさり、一度したたかに背中を壁にぶつけ、おびえて動けぬ奥方の隣となりに空いた長椅子に腰をはずませ、力つきて床にへたりこんだ。額の真中にあいたと見えた小さな穴から、見る見る内に血の赤色が顔をのぞかせ、やがて糸を投げるように、間をおいて血は噴き出し、商人の顔を洗い、髭ひげでわかれて軍服を濡らした。

奥方は、もはや決して夫を見なかった。ただ目を堅く閉じ、堅く息子を抱きしめた。

「奥よ。知っていたのか」

軍服の商人は血を吐いた。

船は一度大きく揺れ、そして止まった。すぐにキャビンの両袖を外から叩く音が始まった。訪問者の音ではない。防腐用の塗料が歳月で磨かれて頃合の銚色になった松材の扉の中央が、寝息をたてる猫の腹のようにふくれ、そして裂け、中にかくれた生木の白色が叫び声をあげてほとばしった。

鉄斧の半月形の刃が内側に飛び込み、扉がついには二つに割れたのは、キャビンの両袖ともにほとんど同時。ハイラル人ではない、外族の野盗が四、五人、長靴のかかとの、かたい音を床にとどろかせて押し入る。奥方を取り囲んだところで、御者であったターバンのスキタヤ族が、屈強な男どもの身体をかきわけて進み出た。

「約束は守ろう。息子を離すがよい。どうせ森に迷い魔のえじきとなろうが、捨てきれぬ望みをみやげに、夫のもとへゆけ」

奥方は、それまで堅く息子を抱きしめていた手を緩めた。幼い頬を両手につつんでまっすぐこちらをむかせ、何事かを言い聞かせた。

泣きじゃくる息子はやがてひとり野盗に母親からひきはがされ、キャビンの外に連れ出され、背中を押されて街道の、脇に茂る藪の中に倒れこむ。

息絶えた夫のかたわらで、奥方はいとしい名前をひとこと呼び、そして胸の前で両の手の指を組んだ。

「さあ、あの世へ釈明に向かうがいい。許しを乞えば、おまえの夫はひとかどだ。手柄であると誉めこそすれ、もはや裏切りとは責めるまい。王への忠言など、つまらぬ謀り気さえ起こさねば、命までも落とさずに済んだものを。不憫に思うぞ」

野盗の剣は、奥方の首めがけて振り降りた。

昨今、決してめずらしい事件ではなかった。森には、その先、街道の両わきに、幾輪もの貿易船の襲われた残骸が散らばり残っていた。

軍服の商人は、間違っていた。乱世はこれから始まるのではない。すでにそのまっただ中にハイルはおり、破滅の穴はこへまっしぐらに落ちていく、ハイルはその真つ最中にいた。

藪の中で商人の息子は泣き続けていた。父と母は遠く旅に出なければならぬ、いつかはきつと帰ってくる。そう言い聞かされたが、藪の中で息子は、何がこの身に起こったのかわからない、そのわからなさゆえに泣き続けていた。

命つきる間際の不思議な力が父親にそうさせたのだらう。息子の左の薬指には、一族の紋章の刻まれた指輪が光っていた。そして、王への書簡を託した金属の筒もまた、父親は薄れる意識にしみつき、息子の服の吊りベルトにようやくはさみ残したのである。

\*

目の前に花が咲いていた。

ポールは、水桶をかたわらの草むらに置き、小川の岸边にぽつんとひとつ、流れにあやうく濡れ落ちそうに咲いているその花を、さつきから飽かず眺めていた。

紫色で、山羊の首につける鈴を逆さに地面からはやしたような、そんな形をした小さな花である。水を汲みにきた森の中の、緑の絨毯に筋をつけて水を流したような小川の岸边の、ただ濃い緑色のところにたったひとつだけ咲いているから、いやでも遠くから目についた。近寄って見ると、花はポールに向かって首をかしげたような気がした。

僕を待っていたんだ、とポールは思った。そう思ったのには理由がある。今ここに咲いている紫色の花には、ポールはすいぶん見覚えがあったからだ。

毎晩見るある夢の中で、その花は咲いていた。ただし、夢の中でその花は一輪だけでなく、ポールが見る夢の幅いっぱいには咲き盛り、ゆるやかな風に揺れていた。

ポールは毎晩同じ夢を見た。とはいえ、ポールはそれを不思議に思っていたわけではない。同じ夢しか見ないのならば、夢に種類があることなど思いつかぬ。ポールにとっては夢は、寝台に入ってから始まる、もうひとつの確かな世界だった。

ポールはまだ家の用事だけを言いつけられる少年の年頃にあつたが、記憶のさかのぼれる限り、すでに世界はふたつあることを知っていた。太陽が照らし、星が照らす世界と、ポールが意識を沈ませてから始まる、寝台の中の自分の、その中の世界である。

そしてポールは、そのふたつの世界が地続きであることを、かなりの割合で確信していた。いつかはきっと自由に行き来できるようになるだろう。そのとき自分は本当の自分を発見するだろう、とポールは考えた。なにかしら今の自分にはせものである、という気が、ポールはいつもしていたのだった。

夢の中で、その花はポールに、あるひとりの少女の手によって差し出されるのだった。白いドレスが風を含んでやわらかくふくれあがつて、丸く少女を包んでいた。金色の髪が、その白いドレスを花に見立てれば、芯に輝くひとむらの雄しべのように、たおやかに風にゆれた。

少女はただ微笑んでいた。年は自分と同じくらいにポールは思った。ただ微笑んで、少女は夢の中で、ポールと一緒に成長していた。

ポールは、たったひとりの叔父、血がながっているのかどうかは確かにはわからなかったが、屈強な剣士であるその叔父と森の中に、俗界から逃れるようにして暮らしていた。ハイラルの城下にはカカリコという名の村がひとつあって、祭りも、また、城から用あるごとに下りてくる政治家たちの演説もここで行われる、それは賑やかで、華やかな村だったが、剣士の叔父とともに森で暮

らずポールにしても、完全に仙人せんじんのようにして生活しているわけではなく、時にはカカリコの村で、普段ふだんの修行しゆぎの厳きびしさを忘れるひとときを過ごすこともあった。

村でポールはたびたび、着飾きかざり、唇くちびるに紅べにをさした少女たちを見た。子猫のように、その少女たちは美しく、愛らしかったが、しかし、夢の中の少女は、それら村の少女たちの誰とも違っていた。

夢の中の少女は金色の髪に、白銀の冠かんむりを戴いたっていて、それもまた村の少女とは大いに異なる点だったが、それ以上にポールは夢の中の少女をひたすらまぶしく思ったのだった。気高けだかさや神々こうじゆうしさといった言葉をまだ知らないポールだったが、そのまぶしさは、叔父が夜、森の小屋でおおぶりの剣に油をたたいて手入れをする、その剣に夜空の星が宿って輝く、深い光に似ていた。剣士である叔父は、幼い頃からポールを厳きんしく鍛きたえたが、その苦しさも、夢を見て、少女のまぶしさに出会えば、翌朝には消えていた。

小川のほとりに咲いた紫色の花は、ポールを夢中にさせた。花びらを見つめているうちに、夢の中の少女の顔が、花びらの細かな凹凸おうとつが結ぶ影に浮かび上がって来るような気がした。また、うまくいけば、夢の中だけでしか会うことのできなかつた少女に、今、ここで、目を覚ましているときに会えるような気さえた。

森をわたる風の音にまぎれていた足音が少しずつ、風から別れ、やがてはつきりと耳に届く。足

音だと思つたのはただの気配なのかもしれないが、しかし、自分に用が確かにあつて何者かが近づいてきているのはその通りなのだ。振り返ればそこには、金色のゆたかな髪の少女が立っている。自分の肩ごしに手を伸ばして、紫色の花を摘む。振り返れば、そこには少女が立っている。きつと立っている。

ポールの頭の中は、夢想だけが取り仕切り、背後から忍び寄つた本物の影を見極める回路はあとかたもなく断ち切られていた。頭の中の夢想が飛び散り、剣士としての回路がやつとつながり、しかし、つながつた時にはすでに遅く、自分が負けるその事実の何よりも明らかな確かさを知つたのは、頬ほおに、ひときわ冷たい剣のきつ先がヒタリとあたつたその後だった。

「ダガーを抜く数秒は与えてやる。しかし、それはおまえにとつて、耐えられぬほどの屈辱くつじよくだと知るがいい」

その冷たい剣の主が言った。少しでも動けば、剣の、よく鍛えられたきつ先は、絹をさくように、ポールの頬の皮をさくだろう。ポールは顔をまっすぐ小川の方に向けて糸くずすほど動かさぬまま、左手で腰のベルトをさぐり、ホルダーの留め金とをはずして、護身用ごしんようの丈たけの短い剣であるダガーを抜いた。

幼いときから肌身はなさず持つているダガーである。握りにはポールの汗がしみこみ、また、大きくなる手にあわせてその握り跡あとも成長して、ポールの左の手にしっくりとなじんだ。

「どうする、ポール。逆手に持ち替え、俺の足を狙う暇はない。ダガーがきらめくならば、たちどころに俺の剣はおまえの首をえぐるだろう」

ポールはダガーを握りしめ、考えていた。考えて、いい方法は思い浮かばなかった。

ポールは、目の前に相変わらず咲いている紫色のその花の花びらの数を数えた。動かなければならない時に動けぬとき、まず心を落ち着かせるべし、とポールは教えられた。

小川に、水は流れていた。ゆらめく水面に、自分の姿が映っていた。まっすぐ後ろから、銀色の剣が差し出され、するどい切っ先が、頬にぴたりと当たっている。

剣はまっすぐ後ろから差し出されている。切っ先は、まっすぐに。そうだ。この逆境ぎやつきやうから逃れ出るべき方向を指し示している。

相手がダガーの動きに気をとられる、その瞬間をポールは探った。

「今だ」

ポールは全身の筋肉に力を送り込み、水平に飛び、小川をすれすれに飛び越え、向こう岸に着地するまでもどかしく、ダガーを胸の前に掲げて相手に向い立った。

「上出来だ。ポール」

小川をはさんで向こう岸に、ポールの三倍ほどはある身体を大きく揺すって、ひとりの剣士が立っていた。アトラス。ポールの叔父である。



アトラスは剣をホルダーに納め、対岸たいがんにポールを残したまま、岸の草に座った。

「ダガーを抜け、と俺は言った。おまえはダガーを手にした。人は武器にこだわるものだ。武器を手に入れば、その武器をどう扱おうか、そこに気をとられるものだ。ダガーにこだわった防衛ぼうぎよを見せたら、俺はいましめの傷をひとつ、おまえの頬にくれてやるつもりだった。武器に使われてはならぬと、俺は日頃からおまえに話している。忘れてはいないな。それだけは誉めてやる」

小川の幅はさしてない。ポールがひとまたぎできるほどの幅である。ポールは、叔父の気まぐれな試験にひとつ合格したようなのを素直に喜んで顔を赤くし、対岸にいるまま、ダガーをしまつて自分もまた腰を下ろした。

「しかし、こんなのは試験のための試験に過ぎぬ。背後から来たのがこの俺でなければ、おまえはとうの昔に死んでいたぞ。俺は剣士を幾人いくにんも知っている。弟子もおまえの他に幾人かいる。しかし、かつて、先のおまえほどの隙すきのある後ろ姿に出会ったことはない」

ポールの頬が鳴った。小川をわたってアトラスの平手ひらてが飛んだのだ。

「ばかもの！」

アトラスが叫んだ。ポールの頬は、熟した桃のように赤く染まり、血の流れる細い血管のありかを示した。

「何に気をうばわれていた」

アトラスの目が厳しい。

「花に」

ポールは正直に言った。押し黙るな。必ず声に出して答えよ、とポールは教えられていた。

「花？」

「そのちいさな花に」

足を折ってすわったアトラスの膝のところに、紫色の花が一輪咲いている。

「きれいな花だ」

アトラスが言う。

「叔父さんも、そう思うかい」

ポールの頬が緩んだ。厳しいだけの叔父ではない。

「ああ。そう思う」

アトラスは自分の身体の影で花に、日暮れかけて残り少ない日差しをあたらぬのを知って立ち上がった。ポールは小屋へ帰る合図だと思い、小川を飛んでアトラスのいる岸に立った。

「ポール。聞け。大事なことだ」

アトラスはポールの肩に手を置いた。

「おまえは、この花を守るために命を落とす、その覚悟はあるか」



そんな覚悟は考えたこともない、とポールは正直に答えた。

「ならば、花に気をとられてはならぬ。わかるか」

わからない。

「それは花を馬鹿にすることだ。おまえはまだ美しさの本当を知らぬ。この俺とて、その本当を知っている自信はない。しかし、剣士とは、それを知る者のことを言うのだ」

ポールにはその言葉の真意しんいを知るよしもない。また、その言葉はアトラスが自分に言い聞かせている教訓のようでもあった。

「帰ろう。日が沈む」

アトラスが言ったのをひきつけて、ポールは水のなみなみと入った水桶みずおけを抱えて立ち上がる。つとよろけた拍子に伺い見うかが見た向こうの藪の中に、小さな動物のような影が苦しげに動いていた。

「何だろう」

「人のようだ。桶おけを置いてついてこい」

アトラスを先に、ポールは走った。叔父が剣を抜くのを見て、ポールもまた、ダガーを抜いた。

「子供か」

ポールの、半分ほど年のかかぬ、幼い少年だった。アトラスがかきわけた藪やぶの、刺とげのはえた草の茎くきを小さな手で握り、人間に会ったそのことだけで気がゆるんだのだろう。幼い少年は、そのま

ま気を失った。

「恐ろしい目にあつたようだ。握った刺の鋭さにも気がつかぬほど」

気を失っている少年の、小さな手に血がにじみ始めた。アトラスは、それをほどこいてやろうとして、少年の指に、年には不似合いな、指輪がはまっているのを見た。一族の紋章だと思われる彫りの入ったその指輪は少年には大きく、指にあまって動いた。

「これは」

アトラスの顔色が変わった。

「知っているの？」

ポールもまた、のぞきこむ。

「サルサラの息子に違いない。なんてことだ。サルサラの船がやられたのだ」

\*

「王を岩牢に幽閉しました」

組石の特別大きいのを組み合わせて葺いた床が美しいモザイク模様を見せている。千人からの兵隊が一堂に集合できるほどに、城の広間は広い。

広間の中央に緋色の絨毯の道が続き、突き当りに、大小二つの黄金の王座があつた。背もたれは

長く、見上げるほどに高い天井へ届こうとしている。

黄金の王座は、ハイラルの王と王妃が座して、アウトドメインの諸侯たちや城下の豪族たちと謁見するための座であったが、いまここに座っているのは、正しく王ではなかった。

「ほう。ずいぶん早く事の済んだものだな。ご苦労。王もここまで来て、かなり気の弱くなったものと見えるわ」

後ろに控えて革製の甲鎧をまとった二等兵卒が三十名、王座へと続く三段の台座の、最高等の兵士のみ上ることのできる二段目に、鋼の甲鎧をまとった将校がひとり。その将校の王幽閉の報告を受け、王座でほくそえんだ人物は、冠を戴かぬ、ただ一介の司祭に過ぎぬように思えた。

事実、その人物は儀式のための聖帽を頭にのせ、手には水晶玉のついたロッドを持っていた。身につけている緑色の長いローブは、かなり位の高い聖職者のための服だったが、それにしても、王座に座ることのできるほどの権限はないはずだった。

「アグニム殿。私はご注文進申し上げたい」

将校が言う。アグニムと呼ばれた王座の中の人物は、とりあえず聞いてやる、といった尊大な風を見せ、将校を見おろしている。

「ここハイラルに、王のいない時代はかつてなかった。とはいえ、今の王が、正しく王の一系を引く者だと言う気はさらさらない。私の生まれぬ時代の事はわからぬ。それぞれに厳しい時代だ。民

のわからぬ悲劇・喜劇の数々がこの城で行われてきたことは想像にかたくない。しかし、これだけは確かです。城に王のおらぬ時代はかつてなかった」

「何が言いたい」

アグニムは床に尾をつかせていたロッドを膝の上にあげ、水晶玉を手の平に磨いた。

「城下の人間は敏感です。王を戴くハイラルの伝説に生きている。王の不在はやがてすぐに知れ渡ります。城下が乱れる。食物の値段も跳ね上がる。アグニム殿がや々と静められた飢えと飢饉の悪夢がふたたびよみがえります」

アグニムは将校に、座れと言った。鋼の甲鎧の将校は、石葺きの床に直に腰を下ろし、あぐらをかく。それはハイラルの、正式な談判のスタイルである。将校は話を続けた。

「我々軍部はアグニム殿についていた。王もたつたいま、その真実を知ったところです。うすうす感づいていたことが明らかになり、王も覚悟を決められた風だ。今なら話は風のように通る。王家と縁組なさり、正式に王座につかれることを、ご注文進申し上げたい。私の言いたいことはそれだけです」

アグニムは王座の中でかすかに笑った。将校の顔に影がよぎった。

「きさまも、キツネよの」

アグニムが言った。将校は、その言葉の真意をつかみあぐねて、ただ黙っている。

「俺が王になれば、自然、きさまの位は上がる。カーネルまたはアウトドメインの一地方領主にま  
でなるかもしれぬ。位が上がる、とはどういうことか。百戦錬磨のきさまのことだ。報酬の増加  
などには毛ほどの価値も認めてはいまい。位が上がれば、動かせる兵隊のコマが増える。俺だつた  
ら、そこに価値を認める。そして、きさまの狙いもそこだろう。今の数倍の兵隊を動かして、俺が  
つくこの王座を奪おうというのか。それとも、今では岩牢の滴をなめて生きる運命の、王の復権を  
図ろうというのか。どちらとも分からぬ。また、どちらであらうと、かまわぬ。だが、これだけは  
言っておく」

アグニムは、ロッドを立てて、勢い床をついた。石床に古木のあたつてたてる、乾き、澄んだ音  
が、広間に渡って兵隊達の耳をついた。

「俺は王として生きるつもりなど、さらさらない」

アグニムはひとときわ声大きく言った。将校が顔をあげた。厳しい目付きに変わっていた。

「約束が違ふ」

アグニムはさらに笑った。将校は声を荒らげた。

「アグニム殿ははっきりと言われたではないか。かつてといつても、年も越さぬつい先頃のこと  
だ。天候はようとして回復せず、作物は実らず、飢えと飢饉のはびこつたこのハイラルの地にあな  
たは忽然と現れた。悪夢の根は太陽の気まぐれだ。誰も手を打つことはできなかつた。王をはじめ



誰もが天をあおいで祈るしかなかつたそのときに、荒れ果てた大地を、あなたは不思議な力をもつて蘇らせた。緑は茂り、実りは以前よりも太つたよつな気さへした。

王はあなたを召しかかえ、王座に最も近い台座に座ることさへ許した。私がいま居るこの台座の、一段上の台座にだ。

アグニム殿、あなたははつきりと言われたではないか。私に耳打ちし、飢えと飢饉の原因は太陽の不穏な運行。それは、ここハイラルに、あるまじき王の座していることがすべての発端。今は超力で天をおさえてはいるが、またいつ、太陽の運行が乱れるやもしれぬ。王をすげかえることこそ、ハイラルを救う唯一の道なのだ、と。私はそれを信じて、兵隊を動かしたのです」

「それが、どうして約束になる」

「アグニム殿。王のいないハイラルは、飢饉よりも恐ろしい。まだ城下の民には知られていないが、この状態は謀反以外の何物でもない。ここまで事は来てしまったのです。王位に座り、ハイラルの静けさを今のまま保つに尽力することこそ、アグニム殿の使命に相違ない」

「静けさを保つ、か」

アグニムはなおも笑つた。

「きさまは何か勘違いしているよつだな」

鋼の甲鎧の将校のその背中に、大きな不安がよぎつた。背後に近づいてきたひとり的人物の強い

気配がその理由だと知ってふりかえった。

王家に代々使えてきた、侍従じじゆうの長である。王家の日々の暮しを世話するために幾百年と続いた家系の、現在の長ちやうだ。生まれた時にすぐにはめられ、死して焼かれるまで決してはずすことのできない左手首の腕輪は、王家への絶対忠実、裏切ることの万が一にもないことの証あかしであるはずだった。

「姫を地下牢ちかろうに幽閉しました」

「なに！ ゼルダ姫を！」

黒い絹のガウンを引きずる侍従長のその言葉を聞いて、まず、大いに驚き、広間とじろに轟く大きな声をあげたのは、鋼はがねの甲鎧かちゆうの将校であつた。

「ゼルダ姫に手を出すとは何事だ。王は政治の長。難局なんきよくに、首の変わることもある。しかし、姫はハイラルそのものだ。伝説そのものだ。アグニム殿、あなたは何を考えておられるのか！」

アグニムは笑ったままである。笑ったまま、ロッドの水晶玉を左右に動かした。

それは、合図であつた。鋼の将校の頭を飛び越し、その背後に控ひかえている、将校に忠実を誓つたはずである二等兵卒の連隊への合図であつた。

まず、鋼の将校の肩をひとりの二等兵卒が抑おさえた。すかさず、もうひとりが将校の両の腕をとり、後ろ手にかためた。鋼の将校はうめいた。

「情けないが、わけがわからぬ。一体世界はどうなつてしまつたというのだ」

アグニムは笑つたままである。

「ご苦労だつた。きさまにはもう用はない。やれ」

アグニムは、あごをしゃくつた。王に謁見する場所である広間に、武器は持ち込まぬことがこの城のひとつの掟であつた。しかし、いま、それは簡単に破られた。ひとりの二等兵卒が、切つ先鋭いダガーで、鋼の甲鎧の将校の首の、静脈を切り裂いた。

血潮が宙を、小さな竜のように舞い、石葺きの床をしたたかに濡らした。鋼の将校は、自分の首をかつた二等兵卒の、その革の甲の下の顔を確認に見た。

見覚えのない顔だつた。見覚えのないどころか、かつて一度も眼にしたことのない民族の顔だつた。瞳は、ただ黒く表情はなく、鼻柱に寄つた深いしわは爬虫類のそれであつた。

かつて子供のよう「可愛がり、厳しく鍛え、ハイラルを守るために整えた愛すべき部下たちは、鋼の将校の氣づかぬうちに、そのすべてが、異次元の野獣軍とすりかえられていたのだ。

「おまえはハイラルを救つたためにやつてきたのではなかつたのか」

鋼の将校は、絶望し、悲しんだ。血の、あついかたまりが喉に思ふ様のぼりつめる苦しみの中で、石葺きの床に額をすりつけ、アグニムに呪いの言葉をはきつづけた。

「俺はハイラルを飲み込むためにやつてきたのだ」

アグニムはそう言い、ただ笑い続けた。

\*

「熱が高い。冷やし草が幾枚か、俺の兵囊に残っているはずだ。ポール、とってきてくれ」

森の巨木のその下の藪の中に倒れていた幼い少年を、アトラスは自分の小屋に連れ帰った。

剣士が暮らす、質素な小屋である。寝台が二つ。大きな方がアトラスの寝場所であり、それよりもひとまわり小さなポールの寝台に、幼い少年は身体を横たえている。小屋にあるものはあと、食事をするための卓がひとつと椅子がふたつ。壁に板を渡しただけの棚があり、スープ皿と穀物をつぐポールが二組の他には食器はない。

小屋の半分ほどは、剣士が剣士として生きるためのさまざま道具が置かれて、手狭である。鋼の新しいのを仕入れて最近鍛え始めた剣の、炎で焼けた黒ずみの部分が残った、握りの装着していない裸の刃が二ふり、壁に木釘を打って納められていた。剣に手を加えるための作業台は、ただ、丸太の大きいのを輪切りにした簡単なものである。硬い木に、よく乾いた蔓を巻いてすべり留めとした、剣の握りの部分がいくつも作業台の上に散らばっている。剣士はまた、剣を、好みに合わせ、使いやすくし、完全に自分の手になじむひとつりとして仕上げる技術を持った職人でもあった。名だたる剣士は例外なく、その勇気だけでなく、匠としての手腕も誉め讃えられたのである。

アトラスの言った兵囊ひょうのうは、その作業台の、劍の部品に混じって、木を削けずる小刀や切っ先を研ぐセラミック棒などが山積やまづみみになったところに、肩紐かたひもだけ見せて埋もれていた。ポールは叔父の、その作業中の山をくずさぬように注意しながら兵囊を探りだし、中を改めた。冷やし草が確かに三枚、中でふたたび布で仕切られた小さなポケット状の部分に入っていた。

そして、ポールは、兵囊のほとんどをしめて、ガラス製の薬瓶くすりびんが三つ納められているのを見て、不思議に思った。中身が詰まっているのである。それも、これは蘇生そせいのための薬だ。

蘇生薬はとてつもなく高価な薬であり、剣士がこれを買求めるのは、一生に一度あるかないかである。それも、きわめて大きな世の重じゅうだいじ大時に、命の覚悟はもちろん、たとい命の残ったとしてもふたたび故郷へは戻らない覚悟の長い戦いの旅へ出る時、すべての財産にかえて求める薬である。

ポールは叔父を見た。ポールがまだ知らない、何か大きな覚悟を叔父は胸に秘めているのだろう。しかし、寝台の上の若い少年の胸に耳を当て、脈を計り、看病かんひょうにあたっている叔父に、普段と変わらぬ様子は、ポールには見受けられなかった。

ポールが冷やし草を手渡し、アトラスが少年の額にそれを載のせる。ひやりとしたその感觸かんしよくが快かつたのか、少年はぼつとひとひとつ、濃い息を吐いた。

「悪い血を抜かねばならん。消毒のための火を起こしてくれ」

ポールはふたたび寝台から離れ、かまどへ言って石を打ち、火を起こした。

「針を研ぐのは俺がやろう。ポール。ここへ来て病人を見てくれ。二十数えて、額の冷やし草を裏返すんだ」

アトラスは、腰のベルトから寫血のための針を抜き、寝台から離れた。劍士のベルトにあるものは、戦うための刃物ばかりではない。自分の身体の悪い部分をなおすための器具もまたそこにあった。劍士は同時に、すぐれた医者でもある。

アトラスは作業台で、セラミック棒を使って針を研いでいる。ポールは寝台のかたわらに立ち、苦しげに息をしている少年を見つめている。

ポールは叔父に言づかった分の数字を数え、少年の額を覆う冷やし草を裏返すために、手にとつた。額を冷やすものがなくなった辛さからか、少年は、身をよじり、寝返りを打った。それは、体力が少しずつもどってきた証拠でもある。

おや、とポールは思った。少年が寝返りを打ったとき、少年の身体から、何かが落ち、床に転がったのである。

ポールはそれを拾い上げた。屈強と呼ぶにはまだ早いポールの手のひらに隠れてしまつほどの大きさの、それは金属製の筒だった。長さの五分の一ほどの部分に切れ目があり、どうやらそこはネジ仕掛けの蓋になっていて、簡単に開きそうである。筒の中央には、親指の爪ほどのくぼみがあ

り、中に粘土ねんどのようなものが詰まっ  
ていて、模様がついている。

「叔父さん。これは何だろう」

ポールはそれを、作業台の叔父へ差し  
だした。アトラスはそれを受け取り、  
横にして見、縦にして見、やがて中央のくぼみに眼をとめた。

「書簡用の筒だな。どこにあった」

「あの子が持ってた」

アトラスは研ぎかけの針を置き、筒  
を持って、少年の眠る寢台へ歩いた。  
脈をとるようにして少年の手をとり、  
指にゆるくはめられた指輪に彫られた  
紋様と、書簡の筒のくぼみに印された  
紋様もんようを比べ確かめた。

「サルサラ家の紋章だ。よほどの重  
要な知らせが中にあるのだろう。俺が  
ここで開けるわけにはいかない。おそ  
らくこれは、王への注進書ちゆうしんじよだ」

「王へ？」

「そうだ。この筒の作法は、王への書  
簡の作法だ」

アトラスは、真剣な面もちで筒を見  
つけている。

「新しい貿易の承諾嘆願書しやうだくたんかんしよかなにかではないのかしら」

ポールは、サルサラ家が商人の一族  
であることを知っていた。剣士に必要  
な革かわの防具ぼうぐや剣などの

武具、時には火薬製品などをハイラルに仕入れて商いする専門の商族が、サルサラ家だったのである。

「いや。違うな。そうではない」

アトラスはきつぱりと言いきった。

「紋章が、斜めに捺印なつぽんされている。これは、謀反むほんあるべしの注進書である証拠だ。おまえは、商族としてのサルサラ家しか知るまい。しかし、その一系の本道は、忍びにある」

「忍び？」

「謀報機関ちようほうきかんだ。王家のために働く裏の司法一族だ。城下のみならずアウトドメインのはるか遠くの地方領土までからありとあらゆる情報を集め、不穩ふおん、平穩へいおんを計って王へ通達つうたつするのが役目だ」

サルサラの一族は、情報もまた商いしていたのである。ハイラルの政治を支えていたのはサルサラの一族だといっても過言かごんではなかったのだ。

「きつと、アグニムについての情報だね」

アトラスはポールの口を分厚い手のひらで抑えた。そして、小屋を見渡し、夕暮れ時からにわかにならわいてきた雨雲に星も月も隠れた深黒しんくろくの夜に向かって口を開けている窓に封をした。

「滅多めつたな事は口にするな。司祭アグニムに謀反の疑惑を抱くのは、この城下では今、我らが、劍士の翼つばさだけだ。城下の人間たちは、飢えと飢饉ききんを止めたアグニムを救世主とは思いいこそすれ、王に



たてつく謀反人などとはこれっぽっちも思つてはおらぬ。そして、さらに悪いのは、もしアグニムが本性を現し、ここハイラルの支配者として君臨しても、城下の民はそれを喜んで受け入れるだろうということだ。椀一杯の麦と引き換えに伝説を捨てることなど何でもない。民とはそういうものだ。責めることはできぬ。民に罪はない。……このサルサラの書簡、おそらくはアグニムの本当の計略を、白日のもとにさらけ出す爆弾をかかえているに違いない」

「どうするの?」

ポールが尋ねる。

「いま、考えている」

アトラスは卓の上に置いた水瓶を持ち上げ、ごくりと大きな音をたててひとくち飲んだ。

「城へ持つていく?」

ポールはアトラスの次の言葉が待ちきれずに言った。

「僕が持つていくよ。僕にやらせて。きつと、うまくやるよ」

ポールの顔が輝いている。しかし、すぐにアトラスの次の言葉で、ポールの胸のたかぶりはしぼんだ。

「だめだ。ポール、頭を働かせろ。この子は襲われたその現場から命からがら逃げだしてきたのだ。幼い子供の足で間に合うほどの距離だ。サルサラの船が襲われたのはここハイラルの城下のほ

ど近くに間違いない。アグニムはサルサラのほんとうの稼業をおそらく知っていた。すべてアグニムの差金なのだ。ハイラルの城の中で、我らが思うより、はるかに悪事が進行していることの証しかもしれない。おそらくは王は、すでにハイラルの王座にいないだろう」

アトラスは書簡の筒を懐にしまつと、その太い腕に、少年を抱きかかえた。少年は一瞬うめいたが、すぐにアトラスの腕の中におとなしく丸くなった。

「俺の勘でしかないが、一刻の猶予もならぬ事態がそこに迫っているような気がする。これから、この少年を長老サハスラーラのところへ運び、回復を待つ。この書簡は、我らが剣士の長、サハスラーラがまず開けるべきだ」

アトラスはポールに言いつけ、剣の切っ先を確かめさせ、カンテラに火を入れさせ、ベルトのカンテラ留めにくりつけさせた。

「おまえは寝るんだ」

ともにサハスラーラの小屋へ行くものだと思っていたポールは面くらつた。サハスラーラは、ここハイラルの城下に住む最強の剣士にして長老。ハイラル王への永遠の忠誠を誓う清澄なる秘密結社「剣士の翼」の長でもある。アトラスは、その結社の忠実なる一員であり、ポールは、父でもなく母でもなく、このアトラスの手で育てられた。

「何かあればすぐに発て。それまでは寝ておけ。力を蓄えておくんだ。それが剣士の振舞いだ」

小屋の扉とびらを開け放つと、獣けものの吠える声が出た。それは、折おりから吹き始めた強い風の、森を揺らしてたつ音だった。アトラスは、嵐あらしさへ呼びはじめた夜の深黒の中、するりとその姿を滑すべりこませて出発した。

腰にさしたカンテラの灯ひがまつすぐに闇の中を進み、ポールの視界の中で、ぷつりと消えた。

\*

アトラスはポールに、寝ろと命令した。しかし、高ぶる胸を抑おさえきることができず、ポールが今までサルサラの少年が寝ていた寝台の中、ようやく寝つくことができたのは、明け方近くになってからのことだった。

明け方近く、とはいえ、外は正しく嵐の様子。いつもなら薄日うすびの差し込む時刻であるのに、なおも深黒しんこくの闇は続き、風の暴あはれる轟音ごうおんがポールのすぐ耳元で渦巻うずまいていた。

ポールは夢を見た。いつもの夢である。いつもの夢であることは、あの紫色の小さな花がポールの頭の中の世界一杯に咲いていることでわかった。

ポールはしばらくその、紫色の花の咲き盛る草原で遊んだ。寝ころんでみたり、花の香りを聞いてみたり、草の中にひそんでいそうな甲虫こうちゆうの、夢の中の形はどんなかと想像したり、ポールのその年頃の少年らしいやり方で遊んだ。

ポールは待っていたのだ。今日に限って、あの少女が姿を見せる時間が遅れていたのである。いつもなら、眠りに落ちればすぐに、白いドレスと金色の髪の毛、まぶしい少女は顔を見せてポールに微笑みかけるはずなのだ。

こんなことは今までにはなかった。ずいぶん長い時間、待っているような気がした。夢の中だから、正確な時間は計れぬ。眠りに落ちたその時、夢を見はじめたすぐに眺めたはずの青く高かった草原の空が、心なしか黒ずんでくるような心地がした。

確かに、黒い、糸のような雲が幾本も空に現れ、やがて空いっぱいをうめつくしてしまふ、その準備を始めていた。それはまるで、ポールがいま寝ている小屋の外の嵐の嫌らしさが、そのままポールの夢の中に入り込んでくる、そんな具合이었다。夢と外の世界はやっぱり地続きなんだ、とポールは思った。

今日は来ないのかもしれない、とポールは思った。けれど、その考え方はおかしかった。ポールが見る夢は、まずあの少女がいて、そしてこの花の咲く草原は、少女がつくった世界にちがいはなかったからだ。

夢の世界の空が、どうしようもなく曇ってきた。黒い渦がいくつも空に浮かび、眼に見えない竜巻が花をちぎって、上空へ巻き上げた。

来ないのではない。少女はきつと消えてしまったのだ。そう思うポールの不安と悲しみをそのま

ま映し出したように、夢の世界は荒れ狂った。

……ポール……

声が出た。夢の中で、聞き覚えのある声だった。

あの少女の声だ、とポールは思った。夢の中で少女は時に、ポールに歌を唄って聞かせることもあったのだ。

しかし、声の調子がいつもとは違っていた。それに、今日に限って姿を見せないのはどういうわけだろう。暗く、辛そうで、陰鬱な声だけが、ポールの耳に届いた。

……助けて、ポール……

助けて、と少女は確かに言った。いったいどうしたのだろう。病気にでもなったのだろうか。怪我でもして、動けないでいるのかもしれない。ポールは夢の中をくまなく眺め渡した。しかし、どこにも姿は見えなかった。それに、少女の声は、夢の中ではなく、なにかしら、その外から聞こえてくるような気さえするのだ。

……私の名はゼルダ……

少女は自分の名をつげた。不思議なことだった。ポールはいままで少女の名さえ知らなかったことに、初めて気がついたのだ。

そして、その名前はポールを徹底的に驚かせた。ゼルダ。それはハイラルの城に住む、姫の名前

だったのである。

「ゼルダ姫。あなただったのですか。毎晩僕の夢に現れるあの少女は、ゼルダ姫。あなただったのですか」

ポールは夢の中で、見えぬ姿に両手を伸ばし、すぐる思いで尋ねた。

名前だけは知っている。ハイラルの伝説のその重要な部分は、王ではなく、ゼルダ姫の存在にかかっている、いつも叔父のアトラスに聞かされていた。

ハイラルの城は聖域である。めったなことでは入城は許されない。また、城の王族も、めったなことでは城下に姿を現さぬ。ポールはゼルダ姫の姿を一度たりとも見たことはなかったのだ。

ゼルダ姫はポールの質問には答えなかった。ポールの言葉が聞こえぬのかもしれない。

……城の地下牢に閉じ込められています。恐ろしいことが始まります……

なぜだ。なぜ姫ともあろうう人が地下牢に閉じ込められているのだ。ポールはなおも、夢の中を眺めまわした。姿は見えない。僕に、どうしろ、と言うのだ、とポールは思った。それと同時に、ゼルダ姫の苦しみをなんとかして取り除いてさしあげなければならぬ、と強く思った。

夢の中の暗黒の空に、一瞬、少女の顔が浮かんだような気がした。光の加減で見えかくれる蜘蛛の糸で輪郭をとっていてもするように、少女の顔は、見え始めたと思えばすぐに闇に溶け、ふたたび頬のあたりから見えはじめる。苦しげに、口を開け、それは確かにポールに向かって叫んでい

るに違いなかった。

……助けて、ポール！……

いままでどうってかわって、それは大きな叫び声だった。ポールはにわかに眼を覚まし、寝台の上に、飛び上がるように起き上がった。窓が四角いその枠通りに白く光った。それは、雷の閃光だった。同時にすさまじい雷鳴が轟いた。雷鳴がおさまると、小屋の屋根をたたく大雨の、ガラスの食器を壊し回るような凄<sup>すご</sup>い音が続<sup>つ</sup>く。

人の気配がした。ポールは枕の下にいつも隠しておくことにきめているダガーに思わず手を伸ばした。

雷<sup>かみなり</sup>の閃光<sup>せんこう</sup>に、人の影が浮かび上がった。それは叔父のアトラスであつた。

「起こしてしまつたか。よい。まだ、寝ていろ」

ポールの知らぬ間に小屋に戻つていたアトラスは、慎重<sup>しんちゆう</sup>に身支度<sup>みじたく</sup>を整えていた。剣をかかげ、切っ先を確かめ、セラミック棒で二、三度軽く研ぎ、腰におさめた。壁にかかっている革製の防具一式をとって作業台の上に広げ、鎧<sup>よろい</sup>を身につけ、ひじあて、すねあてを巻き、甲をかぶって、あごの下に革紐<sup>かわひも</sup>を結んだ。

「出かける。明るくなる前に帰る」。

アトラスが言った。ポールはしかし、それは嘘<sup>うそ</sup>だと知つた。明るくなる前に帰るなど、嘘<sup>うそ</sup>だ。

なぜなら、ポールはアトラスが、身支度みじたくの最後に兵囊ひょうのうをたすきがけにして、さらに革紐くわじゆでしっかりと固定したのを見たからだ。兵囊には蘇生薬を満たした薬瓶げんびんが三本入っている。ポールはそれをさつきその眼で確かめたばかりなのだ。

めったなことで剣士は蘇生薬など身につけない。死ぬ覚悟なのだ、とポールは思った。叔父はもう、この小屋へは戻らない。

ポールは、いま自分が見た夢と叔父のアトラスの出発と、大きな関係があることを直感した。叔父は城へ行くつもりなのだ。おそらくはゼルダ姫を救うために。サルサラの書簡しよかんにしたためてあった内容がアトラスを動かしたのか。それとも、叔父もまた、ゼルダ姫の声を聞いたのか。それはわからない。とにかくアトラスはゼルダ姫のために、この嵐の中を城へ向かうのだ。

「おまえは決して家を出るな」

扉を開ける。嵐の小さいやつが小屋の中を吹き渡る。扉が閉まる。嵐が静まる。アトラスは出発した。

……助けて、ポール……

声があった。ポールは驚いた。夢の中ではない。ポールはいま、夢など見ていない。大雨の音も本物だ。閃光も雷鳴も、本物だ。たった今、叔父が嵐の中を出ていったのは間違いない現実である。



……私はゼルダ。城の地下牢に閉じ込められています……

声は確かに聞こえている。嵐の音にまぎれて、確かに聞こえている。

……恐ろしいことが始まります。助けて、ポール！……

繰り返し繰り返し。ゼルダ。城の地下牢。恐ろしいこと。

「ゼルダ姫は、僕を待っているのだ」

ポールは確信したのだった。ゼルダ姫は、この僕が救わなければならぬ。この僕をおいてより、ゼルダ姫を救う者はいないのだ。

毛布をはぎ、寝台から起き上がり、ポールは閃光と闇の交互に繰り返す中、身支度を整える。

麻の丈夫な織りを、魔を取り除く聖なる色、緑色で染色した戦闘衣を身につけた。壁の木釘に吊り下がった、叔父から受け継いだ革の戦闘ベルトをとり、腰に巻いてしめると、身体に力がたまり込む感じがした。アトラスが持つて出た他に、出来かけの他、長剣はこの小屋にはない。少し心もとなくもあつたが、ポールはダガーをベルトにさした。小さいけれども、ポールの手によく馴染む、使い慣れたダガーが、ここぞという時、自分をしっかりと守ってくれるような気がした。

小屋の片隅に、日頃手入れをかかさずいつも磨かれ輝いているブーツを履いた。水牛の、丈夫でしかも柔らかい革でできたブーツは、叔父に剣技の稽古をつけてもらう時以外は履かないものだ。ポールは普段、蔓織りのサンダルを履いているのである。ブーツは膝まであり、ポールのすねを守

る。

ポールは最後に、戦闘衣と同じ織りで作られた、同じく緑色の帽子を被った。三角にとがったその帽子は、厚く丈夫にポールの頭を守ると同時に、ポールの、少年のあどけなさの残った顔にとてもよく似合った。

雷の閃光の中、出発の準備の整ったポールの姿が浮かび上がる。自分の力を必要としている人がいる。いま、この時、僕を待っている。背をきりりと伸ばしたポールは、昨日までの自分からひとつ頭を抜け出して、数段大人になったような気がした。

扉を開けて、ポールは風の中を飛び出した。強い風がポールの胸をたたき、太い雨がポールの眼をふさぐ。

すさまじい音が鳴り響き、今宵一番の雷が、ポールの暮らす森の、最も背高い杉の木に落ちた。その、優れて大きな閃光に、ポールの横顔が闇に浮かんだ。

緑色の三角の帽子に、雨にしたたかに濡れた黄金色の髪。そこに、すらりと尖ったのびた大きな耳がひとときわ印象的なポールの横顔。笹の木の葉のように尖ったその耳は、叔父アトラスの丸いそれとは大きく違っていた。

そしてまた、そのような独特な耳を持つものは、秘密結社「剣士の翼」の中にはもちろん、ハイラルの城下にはポールの他、ひとりとしていなかったのである。





第二章

---

トライフォースの伝説

「私をどうしようというのです」

城の地下牢には、濡れた重い空気が満ちている。少しでも動けば、空気は水に代わり、幾粒もの滴しずくになって、ゼルダ姫の金色の髪をつたってしたたり落ちた。

「落ち着きなさい、姫様。いつものゼルダ姫らしく、気品に満ちて微笑み、運命をお受けなさい」  
アグニムは背後に数十人の兵隊を従え、地下牢の石葺きの廊下に立ち、鉄格子の奥のゼルダ姫を満足そうに眺めていた。その眼はゼルダ姫の爪先から頭の先をなめるように動き、野望の激しさが、そのまなじりを激しくつり上げさせ、アグニムの顔は、悪魔とはこのような者のことをいうのかと改めて人に思わせるほど醜く歪んでいた。

「長椅子も、姫様のお部屋にあったものをそのままにお運びしました。貝を埋め込んだ細工の美しいテーブルもそのまま。お気に入りの書物も、それ、その岩壁に棚を設けて積んであります。運命までのひととき、ご退屈に飽きることはないようにとの、私アグニムの心くばりです。そう長い間ではありませぬ。おとなしく、ここでお暮らしなさい」

ゼルダ姫は長椅子に座ろうとも、地下牢に運ばれたそれら親しんだ家具たちに眼をやろうともせず、厳しい表情でアグニムをただ見つめた。

そして、ゼルダ姫はふと気がついたのだ。姫である自分を幽閉するくらいならば、おそらくは城はすでに、すべてアグニムの支配下に落ちている。

……父上……

ゼルダ姫の頭に巨大な不安がよぎった。その不安はまっすぐゼルダ姫の大きな悲しみへとつながっていた。

……父上は。父上は無事だろうか。アグニムは、まさか父上の命を……

ゼルダ姫の不安は、素直にその顔にまろび出た。アグニムはその表情の変化をすばやく拾った。

「ご安心なさい。王は素直に私の命令に従った。命までとろうとは思わぬ。また、今この時にわたしが手を汚すまでもないのです」

「どういう意味です」

ゼルダ姫は、この時にあってこそ、気を強く、そして高くもつのが城に住む者の役目であると決心した。その決心は、花のようなゼルダ姫の面ざしを知る者にとっては、耐えきれぬほど痛々しいものであったにちがいない。やさしい姫が、アグニムごときに意地をはってあいた相対さねばならぬことなど、あつてはならぬことなのだ。

「あなたの父上はご老体です。ほっておいても死ぬだろうということだ」

アグニムは声高く笑った。ゼルダ姫の胸に熱いものが上った。

「無礼な。流れ者であったあなたを、情け深くハイラルに迎え入れたのは誰なのです。思いやりをもつて接し、ハイラルの司祭しさいという位まで与え、城に住む特別の計らいをしたのは誰だと思ってい

るのです。すべては父上の、人を愛するやさしい心から出たこと！」

「それは違っね、ゼルダ姫」

アグニムの言葉使いが変わった。アグニムは、廊下にあった見張り番用の簡単な、木製の椅子をひきよせて座り、長いローブの中で足を組んだ。

「すべては私の実力だ。あなたの父上ができなかった事を俺はやった。太陽の運行を魔術でいじり、飢えと飢饉からハイラルを救った。あなたの父上は私の力を恐れただけだ。城下に住む者どもから、俺は救世主とあがめられ始めた。あなたの父上は計算したんだよ。このままでは私に城を乗っ取られるだろうってね。だから、私を特別高い位につけたのさ。

いいかい、ゼルダ姫。私は我慢してたんだ。城を乗っ取るなぞは、もっと早くにできたことだ。たかだか半年ほどだが、王家の歴史は生きのびた。かえって感謝してもらいたいほどだが、それはまあ、いい」

ゼルダ姫は唇をかんだ。聡明なる姫のことである。いまアグニムの言ったことなどは、とつくの昔に気づいていたことだ。アグニムには、予想もつかない、城を乗っ取るなどささいなことではないような大きな野望があるに違いない、とゼルダ姫は考えていたのである。

そしてそれはまた、王自身の恐れでもあった。語るにもはばかれるような、それは王家にとってきわめて大きな恐れであった。王家に暗雲が渦巻いた。アグニムを城に迎え入れたことは、王家の



歴史はじまって以来の失策しつさくだったと、誰もが考えていた。しかし、仕方なかったことなのである。ハイラルを襲やつた厄災やくさいは、後のゆくすえを考えて対処たいじょすることのできぬほどに強大で、事は何にも代かえて緊急きんきゆうを要することだったのだ。そこをついたのは、アグニムの天才のなせる技だったのである。

「何が望みなのです」

ゼルダ姫は言った。

「望み？ 望みはすでにかなえられつつある」

アグニムは、顔を歪ゆがませて笑った。

「城を手に入れて、それで仕舞しまいということはないはず」

「もちろん。私はそんなに器うつわの小さい男ではない」

アグニムは椅子から立ち上がった。

「私のいちばんの望みは、あなたですよ。ゼルダ姫」

アグニムは鉄格子に一步近寄り、その背の半分ほどしかない、可憐かれんなゼルダ姫を見おろした。ゼルダ姫は、まるでへビに見込まれたネズミのように、その場を動けなくなった。

……わたし。アグニムのいちばんの望みはこのわたし……

「まさか！」

ゼルダ姫は、あることにはっと気づき、思わず悲鳴を上げた。

「おわかりか。七人の内、すでに六人は手はずがついた。今夜、四人目を闇に送り込み、五人目、六人目をとらえに出発した兵隊は、まもなく帰城する。ゼルダ姫。あなたは最後に送り込むべきいけにえだ。儀式の完了を意味するいけにえだ」

「なんとということ……」

ゼルダ姫は、最も恐れていたことが現実になっていく、その瞬間を見るような気がして力なく身体を揺らし、アグニムの用意したその長椅子にはじめて腰を沈めた。

「城などではない。私は宇宙そのものを入れるのさ。……ゼルダ姫よ、時が来るまで、気品高く微笑んでここで暮らせ。最後まで姫らしく！」

アグニムは、言い放ち、背後の兵隊たちに合図を送る。兵隊達は特別に凶々しい表情をした見張りのひとりを残し、アグニムの下がる道を開け、アグニムを先頭に、城の階上へと続く階段を靴音高く上って行った。

アグニムの去ったあと、ゼルダ姫は長椅子に腰を落とし、はじめて涙を流した。その涙は、自分の命が奪われるその恐ろしさゆえではなく、自分の命などとは比べるべくもない大きなもの、世界そのものが奪われる、その計り知れない恐怖に対する涙であった。

「助けて、ポール」

ゼルダ姫は、胸の底からこみあげる悲しみの中、そうつぶやいた。

\*

……助けて、ポール……

ふたたび、声が出た。ポールは森の、川のように姿を変えた道を苦勞して抜け、いま、ついに城の前に立った。

雷鳴轟く嵐の中、閃光に浮かび上がるハイラルの城の尖塔は、すさまじく黒々と天をついて伸び、いま城の中で行われつつある悪行の大きさをポールに、いやというほど予感させた。

城をめぐる濠は幅広く、城門に向かって石づくりの橋がのびている。大雨はいたるところから濠に流れ込み、いつもは澄んでいるその水は、闇のせいもあってか、どす黒い。集まった雨が橋のややアーチ状に傾斜しているところを流れ、滝のようである。

ポールは慎重に橋を渡った。城門はポールの前に、その大きく重い扉を閉じている。隙間のひとつとしてなく、入り込む場所はない。見張りの兵隊はいないようだった。この嵐にひるんで城内にひきあげたのだとしたらふがいない兵隊どもだと笑っただけで済むのだが、そうでなかったとしたら、城内の悪行がすでに完了していることを示す、最悪の予兆だ。

……私は城の地下牢に閉じ込められています。助けて、ポール……

声はさらに大きくポールの耳に届く。急がねばならない、とポールはさらに強く決心をかため、城に入る道はないかと、泥水どろみずに膝ひざをつき、城壁じょうへきの組石くみいしを叩たたき、登のぼりはしないかと、雨にすべる壁に挑いどんだ。

ポールは登りかけた城壁から、足をすべらせて転ころげ落ち、ぬかるんだ土の中に腰から落ちた。そして、偶然に見つけたのだった。

大きな身体でふみつけられた、深く確かな足跡。剣士が履はくブーツの跡だ。この激しい雨にも流ながれていないのを見ればたった今つけられたばかりの新しいものとわかる。

ポールには、そのブーツの跡に見覚えがあった。自分が日々磨みがいていたものだから、見間違えるはずはない。それは、叔父、アトラスのブーツの跡だった。

やはりアトラスは城に来たのだ。そして、王家を市井しせいから警護けいごする秘密結社、剣士の翼つばさの一員であるならば、誰にも気づかれず城から外へ抜けることができる、すなわち外から城へ入り込むことのできる秘密の抜け穴を、アトラスは知っているに違ちがいかなかった。

ポールは、ブーツの足跡を追った。城壁と濠ほをはさむわずかな間を、城壁にそって足跡は続いていた。壁は直角に曲がり、やや広い場所に出る。いままで背の低い草の生えていたのが、ここではポールの腰の高さくらいまである藪やぶのかたまりが、点々としている。ポールは最初、闇に浮かぶその藪のかたまりを、獣けものか何匹も背を丸めて眠ねっているのだと思った。

足跡は、とあるひとつの藪のかたまりのところ、忽然と消えていた。まるで、この地点からアトラスが空中に消えてしまったかのようだった。

ポールは注意深く、その藪のかたまりを調べた。藪の根のところに、石が組んである。人工的な細工だ。薄く明りが漏れているのもわかった。

ポールは藪のかたまりをゆすってみた。動く。力をこめてゆする。藪のかたまりが、音をたてて転げ、地中へ続く階段がそこに現れた。

太い雨が、遠慮なく階段に流れ込んでいた。一段目、二段目。かすかにブーツの跡が残っている。アトラスは確かにこの階段を行ったのである。城と外をつなぐ抜け穴だ。ポールは躊躇することなく、身を踊り込ませた。

雨に濡れる石の階段を滑らぬよう注意しながら降りきると、長い土の回廊に出た。両わきに水路が掘ってあり、流れ込む雨はうまくここを伝い、いたずらに回廊を濡らさない。

常に非常用の備えをしているのだろう。ランプが回廊の壁にいくつかあって灯がともっていたが、その数は節約され、回廊のすべてを照らしだしているわけではなかった。暗闇に、光のかたまりが、長い間隔をおいて浮かんでいるだけである。

すえたような嫌な臭いがした。血の臭いではないか、とポールは思った。回廊を進むにつれて、一層その臭いは強くなり、ポールは思わず右手で口と鼻をおさえたほどだ。

光の列がとぎれる、それは、回廊の曲がり角にきたからだ。ランプの灯がそのあたりを照らしだしている。何かが地面をはってきた、と思ったのは、それは、曲がり角の向こうから流れてくる血の川であった。

……う……

ポールは、男のうめき声を聞いた。

「叔父さん！」

間違えることのない、それはアトラスの苦しみの気配だった。ポールは足を速め、そして、回廊を曲がった。

「なんだ、これは！」

ポールの目の前に、地獄が広がった。赤い血の海に、まず目についたのは、一匹の、回廊いっぴいを埋めつくすほどの巨大な化け物の死体だった。イモムシの、はてしなく巨大化した生物のよう  
に思えたが、目はないようだった。口と思われる部分に、ポールの背丈ほどもある長く太い牙が二本伸びているが、それは今や力なく地面に身をあずけていた。

赤黒くぬめぬめとした身体に、その化け物は無数の傷を負っていた。切りさかれ、不思議なこと  
に人と同じ赤い血がまだほとぼしっており、いくつかの傷からは、赤い血の出尽くした後を追う黄色い体液が流れだしていた。化け物は断末魔のけいれんをまだ、かすかにその身に残し、そのたび

に血の海はびちゃびちゃと嫌な音を立てた。

そして、化け物の倒れたのをよけて回廊の壁ぎわに、アトラスが背を壁にあずけて座っていた。アトラスのまわりにもまた、赤い血がたまっていたが、それは化け物のものではなく、正しくアトラスの流した血であった。

「ポールか。おまえ、姫様の声が聞こえるのか」

アトラスは、血を吐きながら言った。ポールは駆け寄り、叔父の、くずれ落ちそうになる身体を抱いた。

アトラスの身体は冷たい。蘇生薬そせいやくの入っていたはずの兵囊ひょうのうはつぶれていた。アトラスは化け物を倒すために薬をすべて使いきったのだ。だめだ、とポールは覚悟した。

「説明の暇はない。俺の剣と盾たてを持って」

アトラスは力をふりしぼって、自分の使い馴ならした防具と武具をポールに渡す。ポールはしっかりとそれを受け取った。師匠から剣を受け継つぐ時。それは剣士にとって、すなわち師匠の死を意味するのだ。ポールは涙をこらえた。

「教え残した技を伝えよう。剣を持ち、俺の前に立て」  
ポールは従った。

「上段に構え、腰を切るんだ」

劍はポールの身体を中心にして円を描いて振られた。

「それでよい。もっと腰に力をため、一気に回転するのだ。後はその劍が働いてくれる」

ポールは再び試みた。劍は光を発して、きれいに円弧えんごを描いた。

「行け。ゼルダ姫が待っている。この地下の回廊に、手ごわい化け物はこの一匹だけだ。俺が倒しておいてやった。おまえのために」

アトラスは微笑み、そして、首を折った。

「叔父さん！」

しかし、アトラスは答えなかった。雷に打たれてさけた枝のように、アトラスの両腕は、逞たくましい上半身からふらりと下がって血の海に甲かぶとをついている。ポールはその手をとったが、握り返すことなどあるはずもなく、ポールの手のひらから、はらりと落ちた。

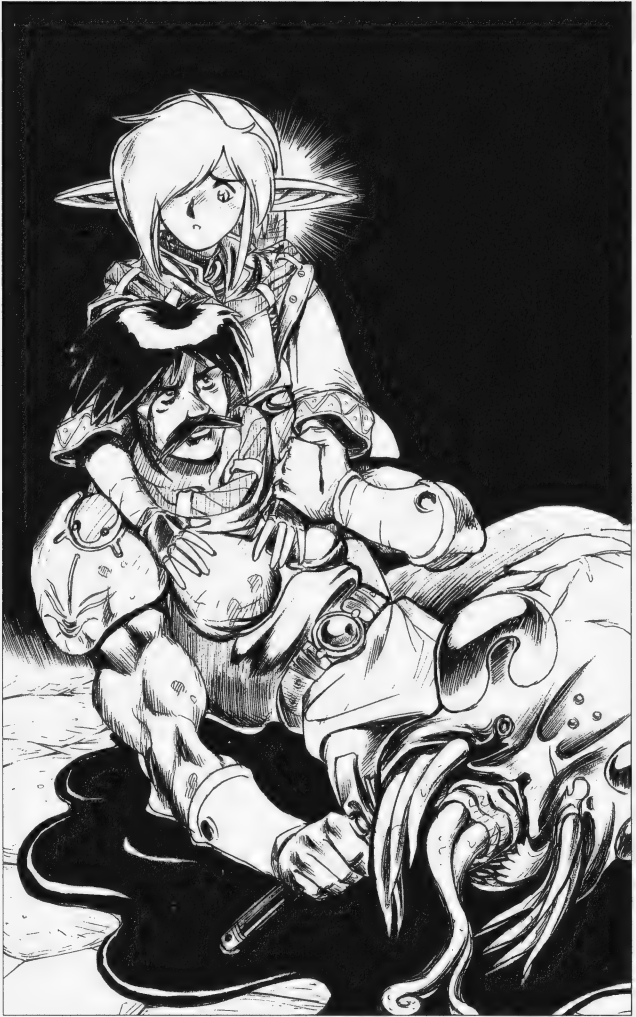
ポールは泣くまいと思っていた。人の前で泣いてはならぬ、とアトラスはポールに教えた。しかし、その前で泣いてはならぬ人は、たった今いなくなったのだ。

ポールは大きく泣いた。

\*

抜け穴は、城の中庭に続いていた。ポールが頭を出したのは、中庭の片隅かたすみに忘れ去られた古い井





戸の穴であった。

嵐は続いていった。雷の閃光せんこうが一瞬すべてを昼間のように明らかにし、そして次の瞬間にはすべてを闇に戻した。

城門から城の玄関へと続く石葺いしむききの回廊を、ロングスピアを持った兵隊が四人、巡じゆん回かいしているのが、閃光の一瞬でわかった。無駄な戦いは避けねばならない。今は夜明け間近でもあつて警備も薄いが、侵入を悟られれば、勢い兵隊の数も増えるし、追跡も厳きびしくなる。そうなれば地下牢まで、たどりつくことさえ、至難しなんの業わざとなる。

ポールは身体の、その小ささを大いに利用してうまく玄関から城の内部へすべりこむことができた。閃光の合間をぬって植え込みを渡って玄関に近づき、最後に玄関の扉とびらの裏に隠れ、交替の兵隊が出入りするその時を狙って雨音に気配を消し、ひとりの兵隊の広い甲鎧かちよろうの背中を隠れ蓑かきに、ままと広間の角の暗闇に姿を隠すことができたのである。

玄関を入れてすぐの広間には、かがり火が焚たかれていたが、広間すべてを光でいっぱいにするには、この何百倍もの数のかがり火が必要だろう。広間の壁際かべぎわは、そのほとんどが闇であり、また、高い天井をささえる無数の石柱も、ポールが姿を隠すには十分なほどの影を柱の数だけつくついていた。

広間がざわつき、数人の兵隊が、たいまつを持って奥へ走った。その兵隊が行くにつれ、たいま

つの光で広間の奥がどうなっているかが明らかになる。壁に木製の扉とびらがあり、その扉が、たいまつ  
の光が近寄るのを待っていたかのように開いた。

「アグニム！」

思わずついて出た声を、ポールはあわてて両手で押え込んだ。兵隊の何人かがふりむいたように  
思ったが、風の音だとも思ったか、確かめに来る気配もない。

扉が開いてその奥から現れたアグニムに、たいまつをもった兵隊がつきそう。アグニムの後ろか  
らは、兵隊の黒い影がいくつも湧わいて出てくる。

「まだおさまらぬか。ひどい嵐だ」

アグニムの声が聞こえた。

「伝令兵でんれいへいが先着しました。この嵐で道が流れているようです。残りの娘の到着がしばし遅れるとの  
こと」

たいまつをもっている兵隊の中のひとりの声のようである。

「やむをえまい。時はまだある。地下のゼルダ姫の見張りを増やせ。気の強い娘だ、自害じがいの恐れも  
ある。自ら命を絶たれては、元も子もないからな」

ゼルダ姫。やはり、ゼルダ姫は地下に捕とらわれている。ポールの聞いた声は、本当にゼルダ姫の  
声であったのだ。そして、毎晩夢に見たあの娘は、ゼルダ姫だったのだ。しかし、どうしてこの僕

を、とポールは思った。

アグニムの命令に短い返答がいくつかあり、兵隊が数人、扉の向こうに姿を消した。あの扉だ。あの扉の向こうにゼルダ姫がいる。

「上で休む。事起ればすぐに呼べ」

アグニムはたいまつ**の**兵隊たちを従えて歩き、広間の奥、中央に伸びた階段を上っていく。赤い絨毯が敷かれ、かつてこの階段は、王家の者以外、決して上り下りすることはなかった。アグニムは、ひととき大きな扉のその向こうに姿を消した。

「たいへんなことになったな」

あたりをはばかりるような声がすぐ近くで聞こえた。先の兵隊が散らばり、ある者は城の警備へ、ある者は兵舎に戻る、その途中である。

「謀反はあって不思議なことではないが、なにやらアグニム殿は残酷に過ぎる気がしてならぬ。ゼルダ姫が哀れだ」

元は王家の警護にあたった兵隊たちである。アグニムの、兵の統率はまだ浅いのかもしれぬ。おそらくはそのせいもあるだろう。警備は以外に薄く、地下へ続いていると思われる件の扉の前は、誰も守りにあたっていない。

ポールは壁ぎわの暗闇を伝って近づき、何の障害もなく、扉の向こうに身体をすべりこませた。

狭い通路には間隔かんかくをおいてろうそくの火が浮かび、らせん状に石段が落ちている。ポールが慎重に石段をおりきると、そこは地下牢の階。壁に身を隠してうかがえば、巨大な鉄格子が階いっばいにゆくてを阻こばんでいる。あの鉄格子の奥に地下牢は並んでいて、ゼルダ姫はそのひとつに捕とらわれているはずだ。

鉄格子の前に見張りの兵士がいる。鉄格子の鍵はその兵士が持っているだろう。武器を確かめる。剣が一丁だ。

声をたてられてはまずい。奥に何人か他の見張りがいるはずだ。ポールはダガーを抜いた。握りが、ポールの手にするりとなじむ。

地下は空気が通いにくい上に、たいまつたいまつの火が、さらに空気を薄くする。見張りの兵士が甲を脱ぎ、布きれを取り出して、顔をぬぐいはじめた。今だ。ポールはダガーを投げた。

一日に一匹だけ、森の許しを得て食料のための兎うさぎを獲とる。それはポールの役目だった。毎日ダガーを投げ、ポールは決して失敗をしなかった。

見張りの兵士は首にダガーを受け、無言の内に倒れた。ダガーは見事に声帯せいたいをふさいでいた。

ポールはあたりをうかがいながら倒れた兵士に近づき、腰の鍵束かぎたばを慎重にはずした。使い慣れたダガーだったが、ポールは兵士の首にそのまま残した。抜けば、断末魔だんまごの声こゑが漏もれるだろう。いま気づかれてはまずい。

ポールは鍵束の中の一番大きな鍵にあたりをつけて鉄格子の鍵穴に差し込んだ。うまくいった。きしむ鉄格子をゆっくりと慎重に開け、中へ入る。事が終われば逃げなければならぬ。ポールは鉄格子を開けたままにした。

見張りの兵士が四人いた。壁に背を向け、ひとつの地下牢から眼をはなさない。牢の中はここからは見えなかった。そして、ポールは、自分の正面、地下牢の廊下の一番奥にあるものを、最初、石を掘ってつくった巨大な魔人像まじむぞうだと思った。ポールの上半身ほどもある大きな鉄球てつきゅうのついた鎖くさりを手にかけている。

「きさまは誰だ」

その魔人像が口を開いた。四人の兵士はその声でこちらを向き、はじめて侵入者しんにゅうしゃに気づいた。たちどころに兵士たちが、ポールの前に立ちはだかる。

「どうやってここまで来たんだ、小僧。剣までもつていやがる」

ポールは、叔父から受け継いだ剣を右手に握り、盾たてをかかけ、戦闘の体勢をとった。

「いっばしだな。小娘ひとりのお守りにいい加減、退屈たいくつしていたところだ。血祭りにかけてやる」

ゼルダ姫を小娘と呼ぶところなど、元城もとしろづきではなく、どうやら外からやってきたらしい兵士がひとり、前に進みでた。剣を上段に構え、何のためらいもなく踏み込ふみこんでくる。切ることしか頭がない、いかにも甘い仕切りだ。

野で名を上げたアトラスに鍛えられたポールにとっては、たやすい相手であった。兵士の剣が振り下ろされる暇もなく、ポールの剣は、兵士の首を飛ばしていた。

「おのれ！」

残りの兵士がポールに挑みかかる。しかし、兵士たちはまだ、ポールの実力を正確に計りきれてはいなかったのだ。兵士たちは攻撃にはやり、それはポールに、アトラス直伝の身のこなしを見事に再現する、その助けにかならなかった。

次々に兵士たちは倒された。ポールは、アトラスが教えた剣技の真の強さを、自分の身をもって初めて知った。アトラスの厳しい稽古は、まだ少年であるポールを、いつのまにか一流の剣士に育て上げていたのである。

そのアトラスももういない。ポールはアトラスを思った。しかし、不思議なことに、それはもう悲しみではなかった。アトラスはもはやポールにとって、かつてともに暮らした叔父ではない。ポールは自分が剣士であることをいま実感したのだ。剣士としての道を教える大きな魂として、アトラスはポールの中に生き返ったのである。

「やりおるな、小僧」

魔人像だと思った巨大な影がゆらりと動いた。鎖が鳴った。鉄球が床をひっかき、重い音を立てた。

ボールの眼の前がいきなり真っ暗になった。とっさに身をかがめた。背後に、短い雷鳴に似たさまざまな音が轟いた。振り返る。魔人の鉄球が、厚い岩壁をボールの身体ひとつ分ほどえぐり、吹き飛ばしていた。

ボールは攻撃に備えて身をかわし、魔人から離れた。鎖の長さを計り、鉄球の攻撃が届かぬところで身構える。これではしかし、やられぬ代わりに倒せもしない。巨大な鉄球は、魔人にとっては紙を丸めた玉同然だ。自由自在に扱い、頭上で振り回し、ボールめがけて飛ばし、そして再び、振り回す。

鉄球にふれただけで、骨はくだけるだろう。鉄球の届かぬ場所、そして攻撃のできる場所。それはたったひとつしかなかった。すなわち魔人のふところである。

ボールは魔人を挑発し、魔人が鉄球を放ったその瞬間に走った。鉄球は壁を砕いてから床をたたき、それをふたたび回収するのに、魔人は少々手間取った。そして、そのわずかな時間にボールはすでに、魔人のあごの下にいたのである。

ボールは腰に力をためた。必要なのは一撃必殺の技である。巨大な魔人の身体に、剣を何度も振り上げている余裕はない。

近距離では鉄球攻撃は破壊力を持たない。魔人がそれに気づき、鉄球を放り出し、剣に手をかけ、抜く。それは巨大な身体に似合わない素早い動きだったが、その隙は、ボールの身体に力がた



まり、気合いのみなきるのに十分すぎる時間であった。

ポールが動いた。おそらくはポールの頭のつむじを中心にして、ポールの身体は回転した。剣は、光を宿して円を描いた。その光の円は、魔人の分厚い身体に、その身にまとった甲鎧さえもものともせずに食い込んでいた。

信じられぬという顔で、魔人はポールをしばし見つめた。魔人は血をふき、地響きをたてて倒れこんだ。

アトラスが最後に教えた剣の技はまた、魔人が甲鎧の下に隠し持っていた地下牢ろうの鍵かぎを床の上にたたき落としていた。ポールはその鍵を拾った。

鍵は牢の扉の鍵穴にしっかりと合った。ポールは地下牢に捕えられたその人をはじめて見た。

「ゼルダ姫……」

金色のたおやかな髪。髪に白銀の小振りの王冠が、まるで花園に眠る小鳥のようになうずくまっている。ゆたかな白いドレスに、ポールの戦闘衣せんとういと同じ緑色をした短いコートをおっている。そこにいたのは夢に繰り返し見たのと寸分違わぬ少女であった。

「感じていました。あなたが来るのを、ここにいて、幻灯げんとうを眼の前に見るよう感じていました。ポール。ありがとう」

\*

「封印を！ アグニムは封印を狙っていると申されるのですか」

「その通りです、神父様。四人の娘はすでに闇の世界へ送った。あとの二人はまもなく城につく。わたしが最後のいけにえだと、アグニムは、はっきりと言ったのです」

「姫様はやはり知っておられたのですか。姫様の血に隠された秘密を……」

「はい。夢の中で知りました。同じ血の秘密を持つ六人の娘たちと、私はたびたび夢で話をしたのです。そして、ポールも同じ夢に」

城下のはずれ、朽ちかけた教会の奥の間である。アグニムが入城する前、儀式の一切を取り仕切っていた神父は、いま城下の人間にさえ忘れられかけた教会に隠れ住んでいた。アグニムが司祭の位について後、神父は城を追われるどころか、聖職の座さえ剥奪されたのである。

しかし信仰あつい神父は、決してハイラル王家への忠誠を投げ出したりはしなかった。秘密結社「結社の翼」の信仰を束ねる教父として生き、ハイラルにとどまる道を選んだのだ。

朽ちかけた教会の奥の間は、神父の日々の暮しの場である。囲炉裏がきられ、細いけれど強い火が芯赤く燃え続けている。嵐の中を城を抜け出し、雨に身体のコまで冷えきったゼルダ姫はその身を毛布にくるみ、熱い薬草茶を与えられて、囲炉裏の、最も火に近い場所をあてがわれて座ってい

た。

ポールは部屋の最も奥に座った神父を正面に見て座り、納屋なやから探してきてもらった陶器とうきのかけらで、剣の切っ先を研いでいた。

ゼルダ姫を城から連れ出すために、ずいぶん兵隊を斬った。中には確かに異世界からアグニムが呼び出したに違いない化け物もいた。剣は、それらの敵どものさまざまな色の血に染まっていた。

城から一歩外に出れば、後は簡単であった。ゼルダ姫は、神父の隠れ家であるこの教会への秘密の地下通路を知っていたのである。地下通路は、そこに入ってすぐに入口を破壊した。居場所はずぐには突き止められはしまい。次の手を打つ算段さんだんが整うまで、しばらくの時間はここで稼げるはずだ。

「アトラスはよい剣士であった。ポール。私はおまえと同じほどにたくさんのアトラスの思い出を持ってているよ」

神父は、自ら薬草茶を入れ、小さな壺つぼに注ぎ、剣を研いでいるポールの前に置いた。囲炉裏の火で、湯気が燃えるように赤く立つ。

「アトラスはおまえを育てた。しかし、おまえとアトラスには血のつながりはない。それは知っているな」

ふたたび座に戻り、神父が言った。ポールは手をやすめ、深くうなずいた。それはとうの昔にア

トラスから、直接聞いていた事実でもある。

「事のはじめから話さねばなるまいな。ゼルダ姫の夢に、どうしておまえが出てきたのか。なぜ、おまえの夢に、ゼルダ姫が姿を現されたか。そして、いまどうしてここに、おまえはいるのか」

神父は壺から薬草茶をひとくち飲み、眼をつぶり、とつとつと語り始めた。

「ポール。おまえはトライフォースというものを知っているだろうか。何だということは知らなくとも、その名を一度は聞いたことがある。すべてはこのトライフォースによって始まる。

ここハイラルは、古代、ハイリア人の住む神話の地であった。ハイリア人が子孫に残した書物の中に「力の神」「知恵の神」「勇氣の神」の三人の神々による天地創造の物語が残されている。神々は世界に降り立ち、それぞれの力をもって世界に秩序と生命を与えたもつた。

「力の神」は火で山々を赤く染めてならし、大地をつくりたもつた。「知恵の神」は表に科学、裏に魔法を創り、自然に秩序を与えたもつた。そして「勇氣の神」はその、優しく逞しい心をもつて、地をはう者、空をゆく者、あらゆる生き物を創りたもつた。すべての創造を終え、世界を去るとき、神々は世界をおさめるにふさわしき者のために、自らの力を象徴する黄金の聖三角体を残されたのだ。

トライは三を意味する言葉。トライフォースは「力を支配する者」「知恵を司る者」「勇氣を鍛える者」の三つの紋章を持ち、それらのフォースを受け継ぐ者の出現を待つて、世界のどこかにある

聖地で輝き続けている。

……天地創造の物語はそう語っている。ハイリア人は神の声を聞くことができた。書物に残された物語はすべてそうして書かれたものだ。

「天下る何処かに黄金の力有り。触れそめし者の望み神に届かん」

聞いたことがあるだろう、ポール。ハイラルの古い言い伝えだ。しかし、その真の意味を知る者は今はもう少ない。黄金の力の解釈は時の流れに色あせ、いわく、金銀財宝、先文明の破壊兵器と、時々には様は変わり続けている。

黄金の力とは、すなわちトライフォースに他ならない。この言い伝えをめぐって幾世紀も前に、ハイラルを根底から揺り動かす事件が起きたのだ。それはどんな拍子だったのか、今とはなつてはわからぬが、尋常ならざる情熱をもって、その言い伝えが人の心をとらえた。

人々は、望み神に届くという黄金の力を求め、我れさきにと、トライフォースの眠る聖地を捜し求めた。さまざまなデマが飛び交った。砂漠の遺跡こそは聖地、高山民族の墓こそは聖地、大滝の裏、雲の上。森は焼き払われ、川はせきとめられ、あこがれはどす黒い欲望に変わり、聖地に関する情報のために血が流れた。わずか数語のハイリア語の刻まれた細石のために、国がひとつ滅びさせられたという。人心は乱れた。不穏な日々が続いた。

ある日のことだ。あるまいことか、とある盗賊団によつて聖地への扉が開かれたのだ。まったく

の偶然だった。

扉は別次元へと通じていた。山をあさり、大地をあさっても見つかるはずはなかった。聖地はこの世界にはなかったのだ。

夢の中でなら見たことがあるかもしれないぬ想像を超えた世界の、そのたそれがれの中、トライフォースは黄金色に輝いて宙に浮かんでいたという。盗賊どもは、仲間をおしのけ、眼の色を変えてかけよった。その様は手にとるようにはわかる。すべての者は、これを手に入れるそのためだけに生きてきたのだ。仲間割れのもの凄さは筆舌につくしがたいものがあつたらう。恐ろしいことだ。

陰惨な争いの末、さすがというべきだろう、勝ち残ったのは盗賊の首領だった。名はガノンドロフ、通り名を魔盗賊ガノンといった。仲間の血で汚れきったその手でトライフォースに触れたとき、紋章の精霊はこうささやいたという。

「汝、望むもの有らば、我もまた、それを望む」

トライフォースは自らでは善悪を判断しない。最初に触れた者こそを、その力を受け継ぐ者として選ぶのだ。邪悪の王ガノンはこうして誕生した。

望むもの。ガノンにとってそれが何だったのかはわからない。しかし、陰惨な時代にあつても平和を守り続けてきたハイラルに、ついにガノンの恐ろしい欲望は押し寄せてきた。黒雲が低く、つねに空をおおい、伝染病、飢饉、嵐、雷、地震、すべての厄災がハイラルを襲った。

時のハイラル王は打つ手を失い、城に、城下に住む七人の賢者と騎士団を呼んだ。厄災の原因をつきとめ、それを封印するよう命じたのだ。

ハイリア人の子孫である七人の賢者と騎士団は、神の声を追い求めた。そして、トライフォースが魔にかどわかされたことを知った。神のお告げはさらに続いた。トライフォースを聖地におさめたと同時にハイリア人に創らせた退魔の剣、マスターソードの存在。しかし、マスターソードは真の勇者のみが使うことができるということ。

七人の賢者はマスターソードと、それを使いこなす勇者を求めて探索を重ねた。しかし、魔王ガノンの邪気はハイラルの王宮にいよいよ迫った。七人の賢者と騎士団は、マスターソードと勇者の探索は一度おき、ガノンの軍隊と力をふりしぼって戦った。連日、血の乾くことのなかった壮絶な戦いであつたと記録に残っている。

ガノンの猛攻にその身を盾にして王宮を守った騎士団の勇気をかり、七人の賢者はついに封印に成功した。ガノンを闇の世界に閉じ込め、平和を守ったのだ。これが有名な「封印戦争」の顛末である。知っているだろう、ポール。

封印戦争は幾世紀も前の遠い歴史だ。ハイラルは今日まで、民の知恵と深い信心をもって平穏にやってきた。封印のこともまた、伝説として残るのみになった。

調子のおかしくなつたのはいつごろからだつたらう。厄災のその様子は、ガノンが襲つたあの時

代のものに似ているかもしれない。アグニムが、どこからか現れ厄災はとりはらわれたが、だがしかし、アグニムこそは、とんだくわせ者だったのだ。

ここに来てそれはいよいよ明らかになった。「ポール。アグニムはガノンの封印を解くべく、こハイラルにやってきた悪魔なのだ」

ポールは胸を熱くして神父の物語を聞いている。何かがこの僕につながっている。その予感ほさらに大きくポールの頭の中にふくれあがった。

「私は神父だ。古文書のすべてをあさり、トライフォースの伝説と、封印戦争の本質を研究した。神と通話でき、魔法をもにしたハイリア人、七人の賢者、騎士団、封印、魔王ガノン。」

そして、私は知った。魔王ガノンの封印は今も決して完全なものではないことを。七人の賢者の血をひく娘のその七人をいけにえに、闇の世界へ送り込むことができれば、魔王ガノンは復活する。古文書の記録はそれを明確に物語っている。アグニムの狙いは正しくそこにあったのだ。

ここにおわすゼルダ姫は、七人の賢者の、その長であった賢者の血を継ぐ者。ゼルダ姫が夢で知った事実を、この私は学問で知った。そして、ポール」

いよいよ、はじまる。ポールは緊張した。

「まず、私の耳を見ろ。小さく丸い普通の耳だ。おまえの耳はどつだ。気が付いているだろう。高く、翼のようでもあり、私達とはまるで違っている。……ゼルダ姫、失礼をお許しただけです



か」

神父はゼルダ姫にうやうやしく一礼した。ゼルダ姫は素直に神父に向かって、首をかたむける。

神父は、ゼルダ姫の清らかな金色きんいろの髪をくしけずり、そして、後ろに流し、片方の耳を囲炉裏の火のもと、明らかにした。

ゼルダ姫の耳は、高く、翼のようにとがっている。ポールのそれと、著いちじるしく似ているのである。

「ポール。ゼルダ姫とおまえは、同じ伝説を母にして生まれた、ハイリア人の子孫。そしておまえは、かの封印戦争で功をあげた騎士団の血を継ぐナイト族いっけいの一系なのだ。

ハイリア人は、今や数少ない。しかし、トライフォースにまつわって事の起きたとき、それに相あい対たいすることのできるのはハイリア人だけなのだ」

ポールは叔父おじのことを思った。アトラスはそれを知っていたのか。だから厳きびしく剣士の道を歩ませたのか。

「ポール。おまえはまだ、その小さい身体に、おそらくは神が託たくした大きな力に気づいてはいないだろう。

村の長老にして『剣士の翼』の長、サハスラーラのもとへ行け。サハスラーラもまた、おまえを待っている。剣士の翼は、サハスラーラの令のもと、伝説のマスターソードのありかを発見したの

だ。わかるか、これがどういう意味か。

あとに必要なのは、マスターソードを使いこなす勇者だけである。そして、ポール。その勇者とは、おまえのことなのだ。おまえが勇者となる他に、世界は勇者を用意していない。私とサハスラーはいち早くそれを知り、かつておまえをアトラスに預けた。

ゆくのだ、ポール。勇者となってマスターソードをその手にしろ。アグニムの野望をくたくことができるのは、おまえの他にないのだ」

ポールは立ち上がった。幼い時から見続けてきた夢の真実を知り、そして、自分を知り、ポールは、これからやるべきことの一切を知ったのである。

\*

「抜け穴にラネモーラの死体が！ アトラスです！」

ラネモーラは普通、砂漠に生息するモンスターである。アグニムはそれを抜け穴に放ち、城から逃げだそうとする者たちのゆくてを塞いだ。ラネモーラは暗い地下穴で飼われる内に眼を失ったのである。

「アトラス。剣士の翼か……」

夜明けとともに、嵐はやんだ。風になぎたおされた樹々の様子がすさまじい城の中庭に、アグニ

ムは兵隊たちとともにいた。

「アトラスのむくろから、剣と盾が消えている。誰か他の者が一緒であつたようです」

中庭では騒がしく、兵隊たちが動き回っていた。ゼルダ姫が姿を消したのである。地下牢の前には、兵士が四人と、そして頑強と残虐がんきょうざんぎやくで名をはせた鉄球魔兵士が、鮮やかな剣さばきのもとで、倒されていたのだ。夜警の兵士たちの幾十人かも、同様にやられていた。アグニムのもとに報告がいったのは、ゼルダ姫が城から姿を消して後のことである。

「ひとり、息を吹きかえました。小僧だったと言っています。緑色の服だったと」

アグニムは唇くちびるをかみ、次に手をあげ、控ひかえている参謀さんぼうの兵士を呼んだ。

「アトラスには息子はあつたか」

「息子はいません。弟子と暮らしていました」

「名前は」

「ポールです」

「ポール。……城下に手配しろ。そいつにまちがない」

参謀は、兵隊たちに合図し、中庭に集合させた。アグニムは見事なさばきでいくつかの師団に分け、たちまちのうちに、指令を与える。

城門が開き、師団はただちに城を出発した。ある師団は、城下最大の村・カカリコへ向かう。あ

る師団は、北へ迂回し、城の背後に控える山へと向かう。昨夜の嵐が嘘のように晴れ上がり、太陽の強い日差しが、師団の甲鎧をまぶしく輝かせ、おのおのの手に握られたロングスピアは彗星のごとく切っ先に光を宿し、それらはまるで、銀色の大河のように見えて城門から吐き出されていく。

これだけの大量の師団が娘ひとりと少年ひとりを追うただけに派遣されたと聞けば、誰しもうもアグニムは気が狂っていると思うに違いない。しかしアグニムは、太陽の運行をいじることができるとの魔術師であり、その超能力は想像を超える。ポールが何者であるか、アグニムはとうに気づいていたのだ。

ハイリア人の血を継ぐ者。騎士団の一系であるナイト族の子孫。アグニムは、これだけの師団を派遣したとしてもまだ足りぬだろうということを知っていた。

カカリコへ入るのは危険がすぎる。ポールは先ほど、街道へ抜けるためのわき道に、一枚の触れ書きを見たばかりだ。そこには、ポールの似顔絵が、百人のうち百人がそれが誰か言い当てることのできるほどの正確さで描かれていた。そばに罪状の文。右の者、王家・反逆の罪にて手配。かくまう者は同罪にて死が待つ。ポールは、アグニムの支配に落ちたハイラルで、ゼルダ姫を誘拐した謀反人の烙印を押された。

しかし、長老・サハスラーラに会うためには、たとい、すでにサハスラーラが村を離れていると

しても、カカリコの村へ行く必要があった。十中八、九、サハスラーラは村にはいないだろう。アグニムの急進的（きゆうしんまき）なクーターで状況は一変し、サハスラーラは緊急の対応をせまられた。神父さえ、その居所（いどころ）を正確には言えなかつたのである。手がかりは村にしかなかった。行かねばならぬ。

長老・サハスラーラの屋敷は、村の中央あたりにある。サハスラーラもまたポールを待っているのだとすれば、何かメッセージをどこかに託しているはずだった。そのメッセージは、屋敷を守るために残されたまかないの人間に、ポールが自分の用を告げれば伝えられるものかもしれないし、また、屋敷のどこかに暗号になって巧妙に隠されているものかもしれない。

村に、人ひとり歩いてはいないのが、ポールを緊張させた。市場も閉まり、村の広場のまん中で方向をはかっている風見鶏（かぜみどり）だけが、からからと単調な音をたてていた。雨戸まで閉められた家々の軒に身を隠しながらポールは村をゆき、そして、やはり、すべては遅かつたことを知った。

サハスラーラの屋敷は、すでにアグニムの軍隊に包囲されていたのである。サハスラーラはこれから捕ら（と）えられようとしているか、または、すでに捕らえられた後であるにちがいない。どちらにしろ、サハスラーラを救出する策（は）を練（ね）らなければならなくなった、とポールは思った。どうすればよいだろう。一旦（いつたん）、ゼルダ姫（き）をかくまう神父の教会へ戻るべきだろうか。それとも、このまま包囲軍の中へ身を投じて戦うか。

ポールはその迷いが、背後から近づきつつあった巡回兵（じゆんからへい）に気づくのを遅らせた。

「小僧、何をしている。戒嚴令だ。外に出てはならぬ」

ポールの心臓が縮み上がった。こうなったら、喧嘩する他はないだろう。ポールはふりむきざま、声をかけてきた兵士に体当りをくらわせて、勢い、サハスラーラの屋敷に向かって走りだした。

「ポールだ！」

巡回兵が声を上げ、高い音の笛を吹いた。一斉に、あちこちから、ざわめきの声があがった。

ポールは、サハスラーラの屋敷に近づくにつれ、いま行つた自分の振舞いがどれだけ無謀なことであつたかを知つた。物陰から見たときの、屋敷を包圍する軍隊の数の、さらに十倍ほどの数の兵士たちが、村の道々を埋めつくしていたのだ。

幾人かはポールの剣にかかった。しかし、無数の兵士たちは、まるで牛の大群のように、ポールひとりめがけて押し寄せてきた。土砂崩れにたちうちできないのと同じことである。ポールはたちまち、兵隊たちの下敷きになり、手に縄をかけられた。

後ろ手にかためられたポールは、サハスラーラの屋敷の中庭に連れてこられた。日除けの幕が立ち、椅子がすえられ、銀の甲鎧をまとつた将校が座っている。

「ほう。意外な大物がかつたな。城へさっそく連行しろ。他の者は、引き続きサハスラーラのゆくえを追え」

サハスラーはまだ捕らえられていない。それだけははっきりわかった。将校の命をうけて、十人ほどの連隊がポールにつく。剣と盾をとりあげられ、それがないために、ポールは何の変哲へんてつもないうたずらざかりの少年のようになって、ロープでつながれ、前に五人、後ろに五人の、連隊のちようどまん中に入れ込まれて歩き出す。

前をゆく兵士のスピアが、規則正しく左右に揺れているのをポールは見た。通りの土道を掘って進む軍靴ぐんかの音が、ざくざくと規則正しくポールの耳に届く。時に話し声が混じったが、それはポールには聞き覚えのない言葉だった。ハイラルの兵隊ではない。

たかだか十人の兵隊である。逃げ出すのはそれほど難むずかしいことではない。しかし、それにつけても、剣と盾を取り戻す算段さんだんをしなければならぬ。手をかためたロープは、アトラスから習った抜き技でどうとでもなりそうな気がした。

村を抜け、城へ続く街道に入った。左右の森の木の葉が風にゆれて、涼しい音をたてていた。

「ゼルダ姫は無事か」

かすかな声がポールの耳に届いた。後ろからだ。ポールは振り返った。他のものと寸分たがわぬ甲鎧をまとった、何の変哲もない兵士である。ポールの剣と盾を背おったその兵士の表情は、甲をかぶっているために、ようとしてわからない。しかし、声は確かにその兵士のもののように思えた。

「三つ数えろ。ロープを断つ」

確かに、その兵士の甲の中からの声である。ポールはふたたび前を向き、その声に運のすべてを賭けることに決めた。一、二、三。手が軽くなった。そして、すぐにその軽くなった手に、劍の重みがかかった。

ポールはその手にもどった劍で、まず、すぐ眼の前の兵士を斬った。不意をつかれて腕に一撃をうけ、兵士が倒れ込む。前を進んでいた兵士が何事かとふりかえり、よんどころのない事態に落ち込んだのを知った。

すべてが済んだのは、一瞬である。ポールは身も軽く、猫のように立ち回って、前の五人の兵士をたちどころに倒した。後ろをかためていた兵士たちは、仲間であったはずのひとりの兵士のスピアに、見事に貫かれていた。ポールと、ポールを助けた兵士の足元に、九人の兵士が、陸にうちあげられた魚のように転がった。

ポールは戦鬪の体勢を解かなかった。助けてくれたかのように見えても、相手の素性はまだわからないのだ。

兵士は甲をとった。目元すずしい少年の顔がそこにあった。ポールよりは、一つか二つ年上であるだけである。しかし、はるかに大人びて見えた。

「おまえに会うために、兵隊に紛れ込んだ。サハスラーラの謀りだ。俺はサハスラーラの孫。名は





サハラ」

サハラと名乗った少年は、革かわの戦闘グローブをはずし、ポールに手を差しだした。ポールもまた、手を伸ばす。

「僕はポール。見事なスピアの腕だ」

「剣はさらに。しかし、おまえもなかなかだ。アトラスから聞いていたが、感心した」

ポールは助けてくれた札を言い、微笑ほほえみかけたが、サハラの目元はくずれることなく、厳きびしいまなじりそのまま、ポールを見つめ返した。

「案内する。サハスラーは東の神殿を見おろす山の中腹ちゅうふく、洞窟どうくつにいる」

サハラはポールに背を向け、歩き始めた。速い。鍛えぬいている足どりであった。

第三章

---

勇氣の紋章

カカリコの村の長老・サハスラーラは雪をとどめたような白髭しろひげの、眼光鋭い剣士である。若かりしころより、アウトドメインからやってくる野獣じみた賊ぞくどもからカカリコの村を守る在野ざいやの剣士として名をはせた。そして、思うところあつて秘密結社「剣士の翼」を創始したのは、まだ十代の少年の頃であつた。

ハイラルの王家に絶対の忠誠を誓い、伝説とともに生きることを至上しじょうの喜びとする清澄せいちようなる一団「剣士の翼」の歴史は、すなわちサハスラーラの人生であつた。今日の城の状況、王をとらえ、姫を侮辱ぶじやくする、アグニムの恐れを知らない振舞ふまいを見てとれば、サハスラーラには、驚くべき先見せんけんの明があつたといわざるをえない。剣士の翼は、今日この時のために、神の意志によつて結社されたのかもしれない。

洞窟どうくつは、結社にとつての有事ゆうじの際に効き目を現す、要塞ようさいであつた。食糧、武器といったものはもちろん、高価な油さえも、大量に備蓄びちくされているのだらう。洞窟の奥、サハスラーラが指令の座に座る集会の間には、カンテラの光が十分にゆきとどき、そこにいる者みな顔を昼間のように照らしていた。

その顔はまちまちである。普段はカカリコの村で他の村人と何ちがうことなく暮らす。獵師の髭の面、石工職人の禿はげあがつた頭、学問に少々青ざめた教師の顔、農夫のうふのよく日に焼けた顔。男ばかりでなく女たちも若いものから年老いたものまでいた。

その中の老婆のひとりの胸に抱かれている幼い少年に、ポールは見覚えがあつた。アトラスとポールが助けた商族・サルサラの息子である。

「幼きことがかえつて幸い。何事の起こつたかを知らず、サルサラの息子の胸には、復讐ふくしゅうの念ねんの宿やどらずに済すんだ。儀式も終え、息子は結社の一員として生きる」

しわがれた重い声で、サハスラーラはゆっくりと話す。一語一語をしつかりと確かめ、サハスラーラは一切、決して間違つたことはいわぬ決心をしている。

「アトラスは見事であつた。風切り羽の称号を捧ささげ、ここに祈いのらう」

長老・サハスラーラの前に、すべては平らかである。位も身分もない。一樣に、長老の座る指令の座をかこんで立ち、直ちよつぱい系の孫まごであるはずのサハラもまた、ポールとともに、その一団の中にいて特別には見えない。

「ポール。苦勞であつた。一步前に出て、みなに顔を見せよ」

ためらっているポールの肩を押したのはサハラであつた。サハラはポールに向かつて強い眼をしてうなずき、言われた通り前まへに出るよう、うながしたのである。

「ゼルダ姫はご無事か」

サハスラーラは指令の座くらの中にいて、まんじりとも動かない。ゆたかな白い髭ひげがかすかに動くので、サハスラーラがしゃべっているとようやくやくわかるのだ。

ポールはサハスラーラの偉大さを日頃から聞かされていたので、頭を下げて膝まずきたい気分になったが、しかしここでは立つたままであるのが流儀であるらしい。

「はい。怪我ひとつ、されてはおりません。いま、神父様に保護されておいでです」

ポールは答えた。集会の間の人々から、安堵のためいきが一斉にもれた。

「アトラスはわしの命令で、城へ向かった。おまえは、どうしてアトラスを追ったのだ。ここにゐる者みなに、その訳を聞かせてはもらえぬか」

サハスラーラは言った。ポールは戸惑った。神父から事の一切を聞いて、ポールは自分の夢の真実を知った。しかしそれは他から聞けば、文字通り、夢のような話なのだ。だが、みなに信じてもらえる、信じてもらえないは、今はもうたいした問題ではないのである。サハスラーラの指示を仰ぐこと。ポールにとっていま最も重要なことはそれなのだ。

「夢で。夢の中でゼルダ姫が僕をお呼びになりました」

ポールは答えた。

「夢で、とな」

サハスラーラが、調子よろしく合の手を入れる。微笑んだようにも見えた。サハスラーラは、自分ではすべてを知っているのに、ここに集う者みなにポールが何者であるかを知らせるそのために、ポールに話をさせているのである。

「はい。毎晩、ゼルダ姫は僕の夢に出ておいででした」

ポールは、耳をそばだてて聞いている人々を見渡した。たったひとり、なぜかサハラはうつむいており、その背中はふるえているようであった。

「いつもはほがらかな姫が、ゆうべに限って姿を見せぬのです。城の地下に閉じ込められている。助けて。姫は確かにそう言われ、僕の名前を呼ばれました」

「貴いことじや」

サハスラーが長い息を吐く。洞窟の中は、他の者みな感動のためいきに満たされた。

「みなもの者。これでおわかりか。ポールこそは、ナイト族の一系、封印戦争に名を残す騎士団の子孫。マスターソードを抜くものはポールの他においてなく、ゼルダ姫を守りアグニムを倒す者もポールの他においてない」

洞窟の中はざわめいた。そして、一瞬、静寂した。そして次に、

——ポール！——

と、大きなひと声が一斉にあがったのである。それは、勇者を誉め讃える時の作法、そして呼んだその者の偉大な力を全員が、心から認めた証しであった。

ただ、たったひとり、その作法に加わらぬ者がいた。サハスラーの孫、捕らえられたポールを救出し洞窟まで案内した、サハラである。

サハラは口元をきりりとひきしめ、人々をかきわけ、長老とポールを囲んでいる人の群れから離れていった。サハスラーラはそんなサハラに、確かに一瞥いちべつをくれたけれども、特別サハラを引き戻そうとはしない。

「ポール。聞くがよい」

サハスラーラは離れるサハラをそのままにおき、ふたたび口を開いた。みなのごわめきの波が静まる。

「我ら剣士の翼がマスターソードの在処ありかを発見して久しい。ハイリアの血を引く勇者だけがその手にできるといふ退魔たいまの剣である。アグニムの野望はその剣にて、たやすくついでるであろう。

かつてマスターソードを発見した後、我らは勇者を追った。果てしない数の候補がいた。そして、ここに二つの紋章がある。すなわち、知恵の紋章と力の紋章である」

サハスラーラは、そのふところから、革紐かわむもに通された、二つのペンダントを取り出した。すすけ古びた石のペンダントである。

「デスマウンテンの頂いたたまきにそびえるヘラの塔に知恵の紋章があった。はるか南、砂漠の神殿に力の紋章があった。候補の剣士たちは戦い抜いて紋章を手にした。しかし、勇者として生き延びる者はひとりとしていなかったのだ。それは運命であり、宿命である。

ポール。おまえは高い耳をもち、ゼル夕姫の夢を見た。しかし、それはまだ、おまえの運命の満



たされるべき器ができたに過ぎない。中身を注ぐのはこれからなのだ」

サハスラーラは、二つの紋章をポールに渡した。それはずっしりと重く、ポールの手に応えた。「紋章はあとひとつ。この洞窟から見おろせる東の神殿に、それはある。最も重く、最も大きな意味をもつ、勇気の紋章がそれである。おまえが勇気の紋章を手にいれ、知恵、力の紋章と合わせて二つの紋章をその手にしたとき、ポール。そのときこそ、おまえは、勇者となる。マスターソードをその手にすることができなのだ。勇気の紋章を手には、ふたたびここへ戻れ」

東の神殿。それは、一説によれば異空間へとつながっている、異次元の化け物の住む神殿である、と言われた。神殿の神とは、化け物のことである、と。また、ハイリアの遺跡のひとつであり、中には莫大な財宝が隠されている、とも言われた。そして、山岳の地形を生かして造られた、おそらくは、先文明の戦時の要塞であったろう、とも言われた。しかし、この神殿に足を踏み入れ、生きて帰ったものは、かつてなかった。

ポールはいたずらに、アトラスに、東の神殿へ腕試しに行ってみたい、と言ったことがある。アトラスは烈火のごとく怒った。そんなことは、おのれの命の何たるかを知らぬ馬鹿者のやる事だ。剣士の振舞いではない、と言い、ポールを殴りもしたのだ。

それほどに恐ろしい場所である、東の神殿。だからこそ、勇気の紋章。ポールはしかし、もはや何を迷い、また選ぶ必要はなかったのである。ポールはすでに自分の宿命を知り、剣士としてた

だ、ひたすらに生きる道を発見したのだ。

ポールはサハスラーラから受け取ったペンダントを首にかけた。サハスラーラに一札をくれ、ポールは人々をかきわけ、剣士の背中をさらに逞しくして、洞窟をまっすぐに出ていったのである。

ポールが外に向かって歩いた洞窟の途中、暗がりのわかりにくいところに、ひとつの扉があった。木製で湿気にうたれ、まわりの岩と変わらぬ色をしている。その中は、その小さい扉からは想像もできぬほど、奥にゆくにつれ広まった、稽古場であった。

歯車と水力の仕掛けで動く、金属製の戦闘擬態。それは、甲鎧の抜け殻のように見えたが、その戦闘擬態が洞窟の天井から無数にぶらさがり、秘密結社の剣士たちは、みなここで修行を積み、師匠に稽古をつけてもらうのである。

一体の擬態が最速の状態動き、ひとりの剣士が、顔に血気をみなぎらせ、剣を繰り出し、相対していた。擬態は剣だけでなく、スピアも、また、弓をはじめとする飛び道具さえ放つて来る。たくみに避けながら擬態の急所を狙う、小柄な剣士。それは、集会の途中に輪を抜け出したサハラであった。

「ポールが勇者であるならば、この俺が勇者でないはずはない。ゼルダ姫を思ふ心は、俺はおそらく、ポール以上なのだ」

サハスラーラの孫、サハラは、そう考えていたのである。

\*

山が、複雑怪奇ふくざつかいきに組み合わさっていた。東の神殿は、ふもとから見て、そこにあるのが明らかに、青空を抜いてそびえていた。たどり着くことは、いともたやすく思えた。

しかし、入口へと通じているのはこの山道かと思つた道は、断崖絶壁だんかいぜつぺきに消え去つた。これみよがしに岩肌いわはだに削られた階段けすをひたすら上れば、孤立してどこへも通じぬ頂に、空しい風が吹き渡つた。

そこに見えているのにたどりつけない。東の神殿は、まやかしの道を無数に持つていた。攻めて来る外敵がいしきを足止めし、かつてを知つた城の兵士が神殿にこもり、山上から攻め落とす。戦国の時代が、ハイラルにかつてあつたのだろう。東の神殿は、まさに戦国に鍛えられた築城ちくじょうの風儀ふうぎをもつて建設けんせつされているのである。

いくら道を選んでも神殿の入口にたどりつけないポールは、いらだちを覚えた。そしてまた同時に、底知れぬ、今までに味わつたことのない恐怖を覚えたのである。

ただ、まやかしの道があるだけで、化け物、魔物の一匹もポールを襲つてこないのである。侵入者の命にかかわるような、そんな畏おそえ、ここにはない。それはいったいなぜだろう。

それは、この神殿が、侵入しようとする者は決してこの道を抜けることはできないというまきり單純で完璧な確信をもって建設されている、その証<sup>あか</sup>しであった。抜けられぬということは、出られぬ、ということである。気がつけば、水気のまるでなく、雑草のひとつも生えていない、硬<sup>かた</sup>い岩の山である。侵入者は、ほうっておいても、倒れる。飢えて渴<sup>かわ</sup>き、おそらくは、気が狂って倒れる。東の神殿の、そこへ至る道は完璧な迷路であり、絶対の防御<sup>ぼうご</sup>にして最も能率のよい攻撃の方法なのではないか。それはまた神殿に、簡単に手にすることを許さない大きな秘密が隠されていることの証しでもあった。

戻る。それもまた、ポールを恐怖させるものであった。それだけ緻密<sup>ちみつ</sup>に設計されている城であるならば、人の心理の計算にもたけて設計されているはずである。気弱く戻ろうとするとき、そこには、前進しようとするときよりもはるかに残酷<sup>ざんく</sup>な結果が、この迷路には隠されているような気がポールはしたのである。

しかし、一旦<sup>いつたん</sup>戻る、という誘惑にポールは勝ちがたくいた。戻って、まず最初の地点<sup>じゆん</sup>から熟考<sup>じゆうこう</sup>して進めば、この迷路もなんとかかなりそうな気がするのである。

ポールは迷った。このまま進んでも、果てがないように思い、考えあぐねて歩くその岩陰に、ポールは見つけたのである。

古いむくろであった。麻で織られた衣服はとつくの昔に風化し、日に干されて石のようになった

白骨にわずかにまとわりついているだけである。刃物を受けた様子もない。骨折の様子もなく、戦った跡はない。むくろの脇に、山に吹く風と細かい岩粒に磨滅し、朽ちた剣がひとふり、地に半ば埋まっていた。それは餓死した剣士の死体であった。

戻ろう。ポールが決心したそのときである。

「その必要はない」

サハラの声であった。ポールの背後の岩陰から姿を現したのである。

「さすがだな。確かにおまえは、選ばれた者かもしれぬ。道は間違つてはいない」

サハラは見違えていた。はじめてポールが会ったとき、サハラは、アグニムの軍隊の鋼鉄製の分厚い甲鎧をつけていた。サハラはいま、アトラスが身につけていたのと同じ、革の甲鎧の姿でそこに立っている。革紐であちこちを締めこんだその姿は、胸板あつく、小柄ながら背はすらりと伸び、長い足は、白鳥の首のように美しかった。一つ目の魔獣アイゴールのまぶたの革をなめしてつくった軽快な盾を二丁、左の肘のところに留め、腰にはいた剣はポールのそれよりも、はるかに細身であった。

「知っているのか、道を」

「あの岩陰を抜ければ、最後の階段さ。まっすぐに神殿への入口へ続く」

ポールはサハラの指さす方を見た。そして、はるかに見えている神殿の尖塔と見比べた。ポール

にはまだまだ先があるように思えてならない。道は眼の前で二つに別れ、サハラと言う方向とは別の道のほうが、はるかに合点がてんのいく道のように思えるのだ。

「俺は幾度もこの山に入った。食糧と水を背負い、巻紙まきがみと炭と磁石じしやくをもち、幾度も歩き回ったんだ。その白骨の剣士が最後の目印だ。この山は、空気が歪ゆがんでいるのだ」

ポールは不思議に思った。この迷路の地図を描ききることなど、一朝一夕いちつよういつせきでできることではない。また、サハスラーラは、サハラが地図を完成させていることなど知らなかったにちがいない。

知っていれば、躊躇ちゆうちよなくサハラを案内にたてたはずである。サハラは、サハスラーラにまったく秘密のうちに、東の神殿について調べ上げていたのだ。

サハラは東の神殿、おそらくはそこに眠る勇気の紋章に、尋常じんじょうではない関心を抱いている。だからこそ、僕を追ってきたのだ。ポールは、勇者として本当にふさわしい者とはいったいどのような者のことをいうのか、とふと考えたのである。僕はほんとうに勇者としてふさわしいのか。

「また助けられた」

「後をつけただけだ。本当は、おまえがのたれ死ぬのを見たかったのだ」

サハラはそう言って笑った。しかし、それはサハラにとって、まことに素直な心情だったのかもしれないのである。

「さあ、いこう。もう少しだ。案内する」

サハラはポールの前に立って歩いた。剣士のむくろの転がる岩陰を抜けると、そこには確かに、岩肌を削ってつくられた階段が頂をさして伸びていた。

ポールはその階段を追って眼をはしらせる。それまで、はるか遠くに見えていたはずの東の神殿が急に近くなって、間違いなく、階段の果てにそびえているのである。

長い階段であった。時にお互い前になり後ろになり、ポールとサハラは上っていった。

「知恵の紋章は誰がもたらしたものは知らぬ。俺がまだ生まれる前より、サハスラーラの手元にあった」

サハラはひとりごとを言うように、長い階段を上る息の切れ目に、ポールに語ってきかせる。

ポールは、アトラスと森の中で、たったふたり暮らしてきた。アトラスは、ポールを人里に出すのを極端に嫌がったのである。それはまた、神父とサハスラーラの意志でもあった。

ポールは、そのおかげで、友というものを知らずにきた。ポールにとってサハラは、はじめてそういう関係になれる男であるような気がした。

「俺の親父は、サハスラーラの第一子だった。力の紋章をもたらしたのは、俺の親父だよ。尾羽の称号を戴いて、今はあの世にいる」

だから、紋章に熱心であるのか。父の遺志を継ぐためか、とポールは思った。

「サハスラーラは自分の一系から勇者を出したかったのだ。また、だからこそ、剣士の翼を創始し

たと言っている。親父にとっても勇者になることが夢だった。俺が生まれてすぐに、親父は紋章の探索軍たさくせんに参加したそつだ。しかし、それはかなわぬ夢なのだ。俺たちの一系は、決して勇者にはなれない」

なぜ、みなそういう風に言うのだろう。サハスラーも神父も。そして、サハラも。勇者になれる者となれぬ者。勇者とはいったい何なのだ。

「耳を見せてくれ」

サハラが立ち止まった。ポールの顔を横からじつと見ている。嫌な気がした。今までそんな風に思ったことはなかった。ポールはなぜか、自分の耳がサハラのように小さく丸くないことを、とても恥ずかしく思ったのである。

「翼のような耳だ。ゼルダ姫も、同じ耳をしていたな。可愛い人だ」

サハラはゼルダ姫を、可愛い人と言った。神父もサハスラーも、そしてアトラスも、ゼルダ姫をそういう風には言わなかった。貴いとうと、気高いけだか、美しいうるわとは言ったが、村の娘をさして言うように、可愛い人などは、決して口にしなかった。

ポールは、サハラのような言い方をすがしく、そしてまた、とてもやさしさのこもった言い方だと思ったのである。そして自分もまたゼルダ姫を、サハラが考えているのと同じように考えているのだ、ということに気がついた。



階段は切れ、魔獣の頭を型どった大きな門柱が現れた。そのふたつの門柱の奥に、年月に洗われ、風に洗われ、塗りがはげて波うつている石製の巨大な扉がある。

「さあ。いよいよだ。神殿の中は俺もはじめてだ」

サハラが言った。

「きさまにはアトラス直伝の剣の技がある。足して、今は、俺の腕もある。どんな化け物が潜んでいるか、楽しみでこそあれ、恐るるには足らぬ」

ポールは石のその扉の前に立った。巨大であり、扉のひとつが、大人が両腕を広げたその二倍ほどもある。

「開くだろうか」

サハラが言った。

「はずみ車か何か、仕掛けがあるに違いないが、この傷みようだ。もう動きはしなと思う」

ポールは言い、石の扉を子細に調べた。剣の束でたたき、手のひらでなで、扉の厚みを調べた。

「ここがことに薄く風化しているようだ。少し下がっていてくれ」

腰に下げた兵囊をポールは漁った。中から取り出した、ちよつどポールの拳ぐらいの黒い玉は、爆薬である。結社の洞窟を出るとき、サハスラーに頼んで用意してもらったものだ。ポールは兵囊に、爆薬の他にもいくつかの兵具を選んで入れて来ていた。ポールがいま背おっている弓も、

剣士の翼の弓使いから与えられたものである。腰に、劍の鞘さやとともに下げられた革の筒つつの中には、魔獸の牙きばを磨みがいて仕上げた強靱きょうじんな矢が十数本、おさめられていた。

ポールは、石の扉の、わずかにくぼんだ場所を選んで爆薬を粘土で固定した。火打ち石を取り出して、火種に火を灯ともす。火種を手に持つてくると勢いよく回転させて火の温度を上げ、導火線どうかせんに着火する。派手はでな火花をあげて、導火線が踊った。

数秒をおいてすさまじい爆裂音ばくれつおんがあり、次に扉のかけらが降る、ばらばらという音が続いた。扉の中央、人がひとりやっと通れるほどの穴が開いた。外から覗のぞく神殿の中は、真つ暗であつた。

「ゆこう」

腰をかがませ、腹ばいになってポールがその穴をくぐり、サハラもまた、その後続いた。

\*

暗く、冷たい場所である。床はなめらかであり、おそらくはアウトドメインの遠方から運んだ石材で葺ふいてあるように思えた。ポールは、腰にはいた劍が小脇に抱えた盾にぶつかって涼しい音をたて、その音は、深く長く響いた。天井は高い。

ポールはカンテラをともし、サハラもまたカンテラをともした。頼りなげな小さな光だが、十分にあたりの様子はわかった。それほど広くはない広間がまずあつた。

広間は通路を兼ねている。魔除まよけのための獣神像じゅうしんざうが、大きく口をあけて壁づたいに並んでいる。静かである。かつてこの神殿を守ってきた化け物どもはすでに息絶え、動くものは今やその靈魂れいこんだけではないのだろうか、とポールは思った。しかし、それが間違っていることがわかったのは、すぐ後のことである。

通路は左右に伸び、突き当たって扉を迎える。

「開かぬ。鍵のない限り、びくともしまい」

左の扉へと向かったサハラが言った。ふれただけでわかる、重い鉄の扉である。爆薬も歯がたたないだろう。

ポールは通路をつたって右へ向かった。そして、ポールが相手した右の扉は、何事もなく開いたのである。神殿の中の構造は傷んでいないようだった。扉の蝶番ちやうつがいの、なめらかに動く感触に、ポールは緊張した。やはり、この神殿はまだ生き続けているのである。

「サハラ。こっちへ回ってくれ。ゆけそうだ」

サハラがかけより、ポールの背後にびたりとついた。

「どうする。中に何があるか、何がいるか、見当もつかぬぞ」

「火を投げてみる」

ポールはそう言い、爆薬の一つから導火線のみをちぎり、腰に下げた火種を使って火をつ

けた。そして、わずかに開いた扉の隙間すきまから、火花のほとばしるそれを投げ入れた。

突然、中がざわめいた。いくつものざわめきの中に、ひととき大きな足音が早足で、扉に近づいて来るのがわかった。

ポールはあわてて扉を閉めようとしたが、遅かった。間一髪かんいつぱつの間に、扉の隙間すきまに巨大な手が食い込んだのである。赤褐色せきかつしよくの、腸詰ちようづつめのような指であった。荷造りに使ひう紐ひものように太い毛が無数にはえ、爪つめは黒く、ずるりと伸びていた。

音をたてて勢いよく、扉は内側から開かれた。ポールとサハラのカンテラの、その漠ぼくとした光の中に、巨大な手の持ち主の顔が浮かんだ。

「アイゴールの赤！」

サハラは叫び、ポールの手をつかんで走った。せまい通路を退却し、相手の出方を見る。

巨大で岩石のような頭である。そのほとんどがたったひとつの目玉であり、厚いまぶたが、音をたてて動いている。その下に、石臼いしうすのような牙きばのまろびでた、目玉の大きさと比べればやや小さい口。それでも、ポールの身体をかみくだくには十分すぎるほどの口である。筋肉の盛り上がった胸、腕、足は太く短く、巨大な頭を頑丈に支えている。

「大物だ。赤ははじめて見る」

アイゴールには赤と青がある。青は、魚で言えば雑魚ざしこの部類に入るモンスターである。めつたに

日の下には姿を現さないが、時に森や山をうろつくことがある。雑魚の部類ではあっても、恐ろしさの度合は、赤とさほど変わらない。季節に必ず何人か、城下では青の犠牲者が出た。ただ、青のまぶたは、防具のよい素材になるので、そんなときは、村をあげて青狩りが行われた。

「逃げるか」

サハラが言つ。

「どこへ」

「あの扉の奥だ。どこかへ通じる口があるかもしれない」

アイゴールの赤は、吠<sup>ほ</sup>えたりなどしない。口に牙をすりあわせる音と、まぶたの動く音。そして、石の床をふむ重い音をさせながら、通路を進み、じりじりとポールとサハラに詰めよって行く。アイゴールの赤は、ふたりをいたぶり、楽しんでいるようにも見えた。

「首に何か光った」

ポールが言つた。

「見えたか、サハラ。鍵束<sup>かぎたば</sup>だ。こいつ、門番だ」

赤が首から下げている鍵はひとつだけではない。あの鍵束が手に入れば、神殿の中のほとんどを行き来できるようになるだろう、とポールは思った。それでなくても、紋章<sup>もんしょう</sup>は、広い神殿の中、秘密に秘密を重ねて隠されている可能性があるのだ。

「やるぞ」

ポールが短く、言った。

「承知した」

サハラは答へ、細身の剣を抜く。アイゴールの赤が、肩を回した。骨のなる音が大きく、不気味に通路に響いた。赤もまた、戦闘の体勢に入ったのである。

「ポール。青と同じく、急所はおそらく、ひとつ眼だ」

赤が、太い腕を繰り出してくる。掴んで、口の牙で食らい殺そうという算段だ。サハラもまた、剣を繰り出す。太い指をわずかに裂き、毛がちぎれ、血がほとばしり、その度に赤は腕をひっこめるが、ほとんど焼石に水である。巨大な赤の身体に比較して、サハラの剣が与えられる傷は、サハラがその手にバラのとげを刺したほどのことではない。

ポールは、サハラの言う通り、眼を狙っていた。たつたひとつの、それも、おおげさに大きい目玉である。そこに傷を与えるのはたやすいことのように思った。しかし、それは違った。

ポールは剣を腰だめにして、幾度も赤の目玉めがけて飛んだ。しかし、まぶたの閉じられている時は、その、剣の切っ先もたない硬質なまぶたにはじきかえされた。また、まぶたの閉じられていないとき、それは、赤が、ポールの行動をはっきりとその眼にしているということなのだ。片腕は、からかうようにサハラに伸ばしている。空いたもう一方の腕で、ポールは幾度となく通路の壁

にたたきつけられたのである。

「弓を使うのだ。俺が赤をひきつける。この暗さだ。矢の速さに、赤はきつと追いつけまい」

サハラはポールの前に、一步出た。

「俺に考えがある。きさまは弓の準備をしろ。俺が合図をしたとき、撃つのだ。早すぎても遅すぎてもだめだ」

ポールは剣を腰におさめ、背中から弓をおろした。革の筒をさぐり、格別に太く長い矢を選<sup>よ</sup>て、弓につがえた。

「いくぞ」

サハラが飛び出した。無茶だ。ポールは短く叫んだ。サハラは、わざわざ、赤の腕に飛び込んでいったのである。

サハラは瞬間、飛び上がり、赤の腕に剣を垂直に突き刺した。赤はサハラの身体を五本の指でしっかり握り捕らえた。

——ぐっ——

サハラがうめいた。すさまじい力であった。万力<sup>まんりき</sup>でしめあげるような、アイゴールの赤の手中、自分の肉に、自分の骨がつきささっていくのである。

赤は、サハラを噛<sup>か</sup>み砕<sup>くだ</sup>こうとして、口へ運ぶ。石臼のような牙が大きく左右にすりあわせられ、ぎ

りぎりとした嫌な音をたてている。サハラがやられるのは時間の問題だ。ポールは、たまたらず、矢をつがえた弓を上段に構えた。

「まだだ！」

実に、骨のちぎれる苦しみの中であって、サハラはポールのはやる心に気づき、止めたのである。

いよいよ、赤は、サハラを口元へと運んだ。

アイゴールの赤の口はりぎりりと開かれ、これから噛み砕き、味わって飲み込もうとするものが、今、どんな苦しみに落ちていくかを楽しもうと、赤はサハラをじっくりと見つめたのである。

「いまだ！ 俺の眉間を狙え！」

サハラはふりかえり、ポールに向かって叫んだ。ポールは赤の目玉を真正面から見ている。矢をつがえた弓をかまえ、照準を合わせると、サハラの頭に、見事に赤の瞳は影となつていたのである。ポールはサハラの影になつて見えない。弓をかまえたポールは赤の完全な死角にいるのである。そして、赤は急所である眼を見開いているのだ。

サハラの動きが一瞬でも遅れれば、矢はサハラの眉間に突き刺さる。赤がその一瞬に腕に力をこめたならば、サハラは矢を避ける機会を完全に失うのだ。

——サハラ！——





矢は放たれた。ポールは、サハラの名前を叫んでいた。それは、その者の力と勇氣を誉め讃えるときの、劍士の翼の流儀である。

間一髪だった。文字どおり、髪の毛ひとすじであった。矢は、空気をきりさいてまっすぐに飛び、素早く避けたサハラの顔の、頬をわずかに切り裂いて過ぎ、赤の目玉の中央、深黒の瞳に突き刺さったのである。

赤の腕の力がゆるんだ。全身を強い力でしめつけられ、弱りきったサハラは、赤の手からすべり落ちるまま、床にたたきつけられ、転がった。

赤は、まぶたを閉じようとした。しかし、それは目玉の真中に突き刺さった矢に邪魔されて止まり、巨大なひとつ眼は半開きのまま、うつろに宙を眺め渡した。

すさまじい音と地響きは、地震のようであった。アイゴールの赤は、よろりと、ひとつよろめいただけで、足元を切られた大木が、その身の重さで倒れるように、ゆっくりと、仰向けに倒れくずれたのである。

\*

サハラの右腕は肉がつぶれ、大きなあざをつくった。大したことはない、と自分では言うが、剣をかまえたときに、その辛さが知れた。

アイゴールの赤の首から鍵束を取るの、ひと作業であった。鍵束を首につなげていた革紐は特別強<sup>きやうじん</sup>、鞆<sup>たもと</sup>で、結局、鍵束を束ねた金属の輪を断ち切る方がたやすかったのだが、それとて、ずいぶんの時間がかかったのである。ばらばらになつたいくつかの鍵、それは全部で五つあつたが、それをポールは兵<sup>ひやうのう</sup>囊<sup>ふくろ</sup>にしまった。

アイゴールの赤が身をひそめていた部屋は結局行き止まりであつた。扉はひとつだけであり、石を組み上げてできている壁には、怪<sup>あや</sup>しげな亀裂<sup>きず</sup>ひとつあつたのである。

ゆくとなれば、左の扉しかない。赤が持っていた鍵のひとつがぴたりと合い、扉は、快<sup>こころよ</sup>い音をたてて開いた。そして、そこは、もうひとつの広間であつた。

先の広間は客を識別するための広間であつたのだらう。神殿に足を踏み入れていい者と、そうでない者。後者と知られた者は、アイゴールのえじきになるのである。

広間は、この神殿の心臓部であるに違ひなかつた。正しく、儀式の間である。広さは言うにおよばず、さまざまな儀式のための細工が、この広間に立つものを、徹底的に不思議な気持ちにさせるのだ。

ポールとサハラの入つた扉は、広間に他にいくつもある扉のうちのひとつに過ぎない。そして、いま、ポールとサハラは、天井高い広間の壁づたいに、まるで巨大な棚<sup>たな</sup>のように造られた天井<sup>てんじやう</sup>、棧<sup>せき</sup>敷<sup>じき</sup>にいるのである。儀式に立ち会う者のための棧敷であらう。この天井棧敷にも、ざつと見ただけ

で四方にひとつずつの扉があった。

広間の床ははるかに下だ。棧敷に身をのりだして見おろせば、同じ大きさ、同じ形の四角い石の板が隙間なく並べられており、それらは時間を超えて美しく輝いている。もうしばらくすれば、司祭と巫たちが現れ、すでにすたれたいにしへの儀式が始まるかのような心地がする。

棧敷からは、広間へ下りることのできるよう、木製の梯子段がかけられているが、年月に朽ち、使えるかどうかは心許ない。

ポールとサハラの正面、はるか奥の壁には、この神殿の主とおぼしき、魔神の巨像が彫り込まれてあり、広間全体を見おろしていた。三日月のようにつり上がった眼は瞳なく、炭のように黒い。鼻は平らであり、胡桃の実を割って、その中を覗いたようである。牙が二本、左右に、天をついて伸びている。一見したところでは、邪教の神殿のようである。

何よりも、ここに立つ者を不思議な気分させるのは、広間の天井を横切っている、空中回廊である。どの山から切り出したものか、これだけ長い一枚岩は、滅多に見つかるものではない。高い天井の、ポールとサハラのある棧敷のそのはるか上に、その石の橋はかかっている。両端に、壁をうがって扉がついているのがわずかにわかった。

そして、その空中回廊の、左右から距離を測ってちょうど真中に、回廊の幅をとってひとつの石の棺らしきものが鎮座していたのである。

「棺ではない。御神体だ」

サハラが、あたりに気づかれぬよう、ポールに耳打ちした。なぜなら、見おろした広間には、いしえの邪教徒の化身なのだろうか、骸骨のような様をしたのが、無数にうようよしていたのである。

「勇気の紋章は、おそらくあの中だ」

サハラが言った。ポールも、確かにそうらしい、と思った。この儀式の広間は、すべてが、あの石の箱を中心に考えてできあがっているように見えたからである。

「しかし、とてもではないが、ここからでは届かない」

ポールの兵囊の中には、ロープや鍵爪など、壁をよじ登るための道具はいくつかあったが、そんなものを使えば、たちどころに、下の骸骨たちに気づかれるだろう。

「あの空中回廊へ出る扉を捜すしかない。右の扉に出るか、左の扉に出るか、それはわからないが、儀式の広間をぬけて奥を回れば、どちらかの扉へたどりつけるはずだ」

サハラは言い、腰の革袋から磁石を取り出した。木杵にガラスがはめこまれ、中に、細い針が一本仕込んである。

「こいつが役に立つ。扉を抜けるたびに方位を確かめれば、あらかたの位置は把握できる」

サハラは磁石をそのまま腰のベルトに留めた。そして、細身の剣を抜き、ふたたび切っ先を確か

め、握りにぐらつきはないかどうかを確認する。

「あの中に勇気の紋章があるとすれば、空中回廊に至る扉のある部屋には、化け物か、仕掛しかけの罠わなか、想像に難い障害かたが待っているに違いない。もし、簡単に空中回廊へ抜けられるようなことでもあれば……」

「あの石の箱の中に、紋章はない、ということだ」

ポールがサハラの後をついで言った。

「その通りだ。ゆこう」

ポールとサハラは、棧敷をつたって壁ぞいに歩いた。下から気づかれぬようにするためである。サハラはあいかわらず、赤にやられた痛みいたみに右腕をおさえている。ポールが先を歩き、やがて、扉の前まへにくる。

天井棧敷からゆける扉は、他にあと二つある。最も奥、魔神像の、ちょうど胸のあたりにひとつあり、その扉は、おそらくは司祭の使う部屋へと続いているはずである。いわば、儀式のための楽屋部屋といってもいいかもしれない。そして、いまポールとサハラがいる地点の正面、棧敷をつたって行けば最も遠い地点にもうひとつ扉はある。

扉はどれとして、どこへ通じているものか、わかっていない。ならば、どの扉を選んで今今は同じだ。ポールは眼の前の扉へ入って行こうとした。赤の持っていた鍵のうち、いちばん小さいの

が、鍵穴にぴたりと合った。

背後に、かたり、と音がした。見れば、すぐそこに見えている、下から棧敷にかかった木製の梯子はしが、顔を出した頭のところで揺れている。

鍵穴を相手にしているポールをその場に残したサハラがかけより、見ると、下をうろついていた骸骨の一行が、すぐそこまで上ってきていたのである。骸骨は、眼の穴のうつろで、サハラをじろりと一瞥いちべつした。

闘気とうきがない。骸骨どもは抜け殻がらのように思えた。サハラは、最も簡単で効果的な手段をとった。梯子を蹴り落としたのである。腐りかけた木製の梯子である。梯子はたやすく崩れ落ちたのだが、骸骨どもは、違っていた。

サハラの頬ほおのあたりを、白い風が通り過ぎた。そして、それは骸骨どもが瞬時にして飛び上がり、素早い動きを見せた、その軌跡きせきだったのである。棧敷の上、ポールとサハラをとりかこんで、いつのまにか、三体の骸骨がいた。

「うかつだった。スタルフォスは、悪霊あくりょうのいちばん悪い形態だ」

サハラが言った。スタルフォスは、ポールとサハラを見るでもなく、見ないでもなく、ただ、そのあたりを漂っているように見えた。

「剣は効かぬ。ただ、やりすぎすのだ。スタルフォスは闘気に反応する」

この扉から入るのはまずい、とポールは思った。扉の奥から新たな敵が現れば、前後を抑えられてしまうことになるのだ。

スタルフォスは襲ってくる様子もなく、浮遊している。

「あの扉からだ」

ポールは、魔神像の胸にある扉を指さした。動きを確認しながら後ずさり、その場を離れても、スタルフォスは追ってくる気配はない。

サハラもまた状況を察したのである。ポールの言葉にうなずき、ポールの後をついて静かに壁づたいに歩く。

しかし、ポールはスタルフォスの動きを警戒しすぎた。そのあまり、足元の用心をおこたつたのである。ポールの足をすくつたのは、一個の小さな壺であった。はるか昔、儀式に参加した信者が、渴きをいやすために水を入れて用意したのをそのままに忘れ置いたものかもしれない。

ポールはすねをしたたかに、ぶつけ、その場に倒れ込んだ。壺は割れ、激しい音をたてた。サハラが急いで助け起こす。三体のスタルフォスが、一斉に眼の穴のうつろを、こちらに向けた。

「走れ。ポール！」

サハラが叫び、ポールの手を取り、今度は先に立って目当ての扉に向かって走りだした。スタルフォスは、大きな蚤でもあるかのように跳躍し、迫って来た。



一体のスタルフォスが、奇妙な動きを見せた。おのれの頭蓋骨ずがいこつをおのれの手ではずしたのである。その頭蓋骨は、身体を持たねばならない呪縛じゆばくから逃れたことに喜々ききとして、宙をさらに速度を上げて泳いだ。

——ぐっ！——

サハラに手をひかれて走るポールの肩に激痛が走った。スタルフォスの、自由になった骸骨が、空中で大きく口を開け、あつという間にポールにせまり、ポールの肩口の肉を食いちぎったのである。頭骸骨はそのまま飛び去り、旋回せんかいする。

棧敷さじきの角をまがり、扉はもうすぐである。鍵がかかっていたとしたら、万事休ばんじきゆうすだ。覚悟を決め、剣もたたない悪霊あくりようを相手に何か手をつたねばならない。

ポールの肩から、鮮血せんけつがほとばしった。傷はかなり深く思えた。サハラも、それに気づいていた。一旦いったん、どこでもいい、身をかくさなければならなかった。

頭骸骨が、向こう側の壁をなめて旋回し、大きく口を開けてふたたび、飛びかかる体勢だ。後ろを見れば、二体のスタルフォスと、頭骸骨の主である身体だけのスタルフォスが、いよいよ、そこまでせまってきている。

「開け！」

サハラは、眼をつぶり、頭骸骨の顎あごが今度は自分の首にくらいつくのを覚悟して、また、まさに

その情景を頭にまざまざと描く思いとともに、扉に体当りした。

予想した抵抗は扉になかった。扉は開き、幸運な二人を迎え入れたのである。勢いあまって扉の奥に転がったサハラは、ポールもまた、うまくこちら側に転がり倒れこんだのを確かめ、扉をあわて、閉めた。

頭骸骨が扉に激突する音が鈍く、サハラの耳に届いた。閉めた手元に、かんぬきの棒が渡っているのが、感触でわかった。サハラはそのかんぬきの棒をしっかりと扉に渡し、扉に背をあずけると、深くためいきをついたのである。

スタルフォスが扉に体当りを続ける、乾いた骨の高い音がしばらく続いた。

\*

サハラは、ナイフで自分の腕を少し切った。アイゴールの赤を倒した時にやられた右腕のあざがうっ血し、悪い血が溜りはじめていたのである。黒ずんだ血を自らしぼり、そして、布を裂いて腕に巻いた。

ポールの肩の傷はかなり深い。サハラが革紐をきつく巻き、血止めをしたが、痛み激しく、ポールは大きく肩で息をしていた。それがまた、肩の傷口を開かせる原因にもなる。スタルフォスに逃れて転がり込んだ部屋はまさしく、かつて神殿の儀式を司った司祭の間であ

った。それほど広い部屋ではないが、司祭はここで用意を整え、魔神像の胸元から、広間に待つ信者の前に姿を現したのだ。

部屋が締め切られ、空気の流れのないために残ったものか、それとも、雲母の繊維で織られたそれが、それほど強いものであるのか、司祭の着る聖衣がすぐにでも着ることのできる状態で、幾着も壁にかかっていた。おびただしい古文書の類にうすくつもったほこりは、それらを守って薄布がかけてられているように見えた。

ここに、敵の気配はとりあえず、無い。動けぬポールを壁ぎわに残し、サハラは部屋の四方にある扉すべてのかんぬきをかけ渡した。敵との余計な接触から逃れるためである。いくらかの時間をかせがなければならなかった。

「止血草と止痛草を貼った。しかし、効き目が現れるにはもうしばらくかかる。ここにいれば、しばらくは安心だ。寝ろ」

サハラは言い、壁に背をあずけて身体を休めているポールの横に、自分もまた座った。

「サハラ……」

ポールが言った。肩の傷のため、頭の中まで熱をおびてもうろううとしていた。

「しゃべるな」

サハラが言う。しかし、ポールには、戦鬪の谷間のこんな時でもなければ尋ねることのできな

い、しかし、ぜひとも聞いておきたいことがあったのである。

「僕のために、どうしてこれまで親身しんみなのだ。アイゴールの赤を倒すとき、きみは、死ぬのを一度覚悟した。恩もなければ負目おいめもない僕のために、どうしてここまで力になれる。僕はきみに、助けられてばかりだ」

苦しい息をつく。肩がふたたび痛んだ。その痛みに、ポールの頭はわずかにはつきりした。サハラの方を見る。サハラは少し微笑んだようだった。

「きさまのためなどではない。勘違かんちがいするな」

そう言ったサハラの眼は、しかしやさしかった。サハラは壁にあずけていた背を起こし、そのまま自分の膝ひざを抱いた。

「ポール。きさまは、マスターソードをその手にできる、たったひとりの剣士なのだ。ハイラルを救うことのできる、たったひとりの救世主なのだ。きさまに死なれては困る。……きさまにはこの先、想像もつかぬほどに偉大な運命が待っている。果てしもなく辛く苦しい道だろうが、弱気になるな。この俺を踏み石ふみいしにしていくことなど何とも思わぬ強い意志を持って。俺の苦しみなど、きさまがこれから味わう苦しみに比べたら、鼠の髭ねずみひげほどのものでもない」

ポールは、サハラその言葉に、自分の立った立場の意味を改めて思い知った。頭の中では、自分ハイラルのために戦うことを十分に知っていたはずのポールである。しかし、いま、傷つき、

死に直面しながらもポールの力になり続けるサハラを前にして、その意味の重みと大きさを実感したのだ。

大きすぎる運命だ、とポールは思った。たまらずその運命から逃げだしていく自分をふと想像して、ポールは身震いした。

サハラはしばらく沈黙し、まっすぐ前をただ見つめ、物思いにふけていたようだった。布に、黒いしみは広がるのをやめ、血を抜いた傷口は乾いたようだった。サハラがふたたび、口を開く。言おうか言うまいか迷い、ついに決心した、そんな調子であった。

「ハイラルを救うため、と俺は言った。しかし、それはごまかしだな。ハイラルのことなど、例えば、カカリコの村人の毎日が平和であることなど、この俺には爪ほどにも興味はない。……ポール、すべてはゼルダ姫を救うためだよ。ゼルダ姫の面ざしに、ふたたび、あの可憐な笑顔を取り戻すためだ。ハイラルの平和などは、その結果にすぎない。俺は、ゼルダ姫のためならば、サハスラーを殺すことさえ、いとわないだろう。」

カカリコの村の長老、サハスラーの孫であるサハラにあって、それは、たとい頭の中にあつたとしても、決して口にはならない言葉であった。もしサハラがサハスラーを前にそれを言ったとしたならば、サハスラーはその心を見事として誉め讃えるかもしれない。しかし、それは万人に理解できる考えではない。秘密結社「剣士の翼」の中にも、理解できぬ者は多いだろう。そし

て、それはサハラのハイラルからの追放つひほうを意味する。

ポールは、サハラその言葉を、自分にいよいよ心を開くその証あかしとしてうけとった。とまどいながらも、うれしく思った。サハラと自分とはほんとうの友となれる。そんな気がした。

「ゼルダ姫とは、たった一度、お会いしたことがあるだけだ。いや、お会いしたと言うもおおこがましい。ゼルダ姫は俺のことなど、記憶の隅にもとどめておられぬだろう。」

もつどれくらい前になるだろうか。十年に一度のハイラルの大祭たいさいの日のことだ。城の中庭で行われる儀式の折り、幼かった俺は、同じくまだ幼かったゼルダ姫の、式典しきでんのための長いドレスの裾すそを持つ栄誉を賜たまわった。村の長老の孫である俺は、その年にちょうど元服げんぷくを迎える縁があつたのだ。

ゼルダ姫は幼いながらも、王族らしいしつかりとした足取りで、ゆつくりと中庭を進まれた。俺はそのとき、ちよつとしたへまをやつたのだ。通路の、ほんの少しの組石くみいしの高さの差に、つまずいたのだ。先のきさままのようにな。それは儀式の参列者にはわからないほどのつまずきだったが、ドレスの裾は一瞬強く引つ張られ、ゼルダ姫の歩みのリズムは一、二歩乱れた。大変なことをしてしまつた、と俺は思つた。

俺は、ゼルダ姫は神である、と教えられて育つたのだ。近寄らずにひれ伏し、絶対の忠誠を誓つて崇めるべき姫である、と教えられてきたのだ。その姫様のドレスの裾を持つ最高の栄誉を立派に成し遂げたいと、幼心おきなこころに誓つていた俺は、取り返しつかない失敗をしてしまつた、と思ひ、涙

さへ出てきた。裾を投げ出して、その場を逃げだしたい、と思った。

そのとき、姫様は、俺の方を見るでもなく、ふりかえられたのだ。その顔は微笑んでおられた。姫様は俺よりも幼かったが、やさしさに満ちた横顔が、高い耳のその向こうにあった。式典のための化粧のせいもあったかもしれないが、その顔は大人びて、驚くほど美しかった。

そして、俺は見たのだ。一瞬、姫様はいたずらげに舌を、唇くちびるからかすかにほころばされた。そして、果実のようなその顎あごでうなずかれ、ふたたび前を見て歩み続かれた。俺は、すべてが許されたのだ、と思い、ふたたび涙が出た。

王族である姫が、民の失敗を慈愛じあいをもって許された、その徳とくの高さを俺は言うのではない。かすかに振り向き微笑んだ横顔に、俺はゼルダ姫という少女の美しさを見たのだ。失敗をした俺の硬直した気持ちをほぐすべくほころばせた、薔薇色ばらいろのちいさな舌かたの可愛らしさに、俺は、今後何があってもこの姫を命にかえても守るべきである、という俺の決心を見つけたのだ。

俺はそれ以来、姫様を愛した。報むくわれるわけのない大それた愛と笑われても、俺はそのことを何ほどにも思わない。命をかけて、恋こがれている。剣士の翼は、王族であるゼルダ姫を慕したい敬うやまう。しかし、俺のゼルダ姫への思いは、それよりはるかに深いのだ」

サハラは、膝ひざを抱かかえていた腕をとき、ふたたび背を壁にあずけて、しばし照れくさそうに笑った。

「僕が夢に見続けたゼルダ姫は」

止痛草<sup>しつうそう</sup>が効<sup>き</sup>いてきたのか、気分のだいぶよくなったポールが話しはじめる。

「きみの思うゼルダ姫そのものの少女だ。いつも、花に囲まれていた。王族だとは、気のつかかなかつたほど、ゼルダ姫はこだわりなく、僕に微笑んでくれた」

サハラが言う。

「きさまは、ゼルダ姫が好きか」

ポールがうける。

「ああ。好きだ。きみは」

「きさま以上に」

サハラはそう答え、高らかに笑った。ポールもつられて笑ったが、ふたたび肩に痛みが走り、苦<sup>にが</sup>い顔になる。

「よし。正々堂々とやろう」

サハラがポールの、傷を負<sup>お</sup>っていない方の肩を叩<sup>たた</sup>いて言った。

「わかった。拔<sup>ぬ</sup>駆けは無<sup>な</sup>しだ。剣に誓<sup>ちか</sup>おう」

痛みをこらえながらポールが言う。その声はしかし、明るかった。ポールはうれしかったのである。



「ゼルダ姫はまず僕に助けを求めた。今のところ、僕が一步、先んじている」

「そんなものはすぐ逆転するさ。勝負はこれからだ」

ポールとサハラはふたたび高く笑いあつた。そして、お互い、胸の中に生まれた何かしら温かいものを抱き、しばしの眠りに落ちたのである。

ポールは夢を見た。人影が現れた。ゼルダ姫かと思つたが、そうではない。ゼルダ姫以外の夢を見るのは、ポールは初めてだった。

色とりどりの細かい花を岸边に咲かせた泉の夢であつた。すずかけの細い木立ちこだに囲まれ、幾筋いくすじもの日の光が、泉を横切っている。人影は、泉の水の上に浮かんで現れ、その背には薄い羽根があり、光の粒を羽根に宿したその様は、小さい星のようであつた。

「肩をお出しなさい」

ポールは声を聞いた。その人影は、妖精よちせいであつた。

ポールは夢の中で、スタルフオスにやられた肩を素直に差しだした。妖精は、薄い羽根を使って飛び、ポールの肩のあたりに止まつた。ポールはその妖精が意外に小さいのに初めて気づいた。

「癒いされました。ゆきなさい」

妖精はそう言った。ポールの肩から、痛みがはるかに遠のいていった。

「ポール。不思議だ。傷が治なおっている」

サハラは驚きのあまり、ポールの身体を揺り動かしていた。ポールの、肉を食いちぎられたはずの肩は、嘘うそのようにきれいに、もとのままに癒なごされていた。サハラの腕のあざもまた、消えていた。

「ポール。やはり、きさまは選ばれし者に違いない」

サハラは、ためいき深く、そう言った。

そしてポールが妖精の夢を見たのと同じとき、サハラもまた同じ妖精の夢を見ていたのである。しかし、その夢の内容はポールのものとは違っていた。

ポールの夢に現れたのと同じ妖精は、サハラに、こう伝えたのである。

「勇気ある者よ。あなたの命を必要とする者が程ほどなくして現れるでしょう。あなたの命をその者に移す術を授けます。必要なとき、また、わたしをお呼びなさい」

俺の命をくれてやる者。サハラは夢からにわかに覚さめ、そして、横に寝息をたてているポールをしばらく見つけた後、ポールを揺り起こしたのである。

\*

いくつかの空の部屋を通り過ぎた。サハラが磁石じしやくを確認しながら進む。勇気の紋章がその中にある。



ると思われる石の棺ひつぎの鎮座ちんざする、あの空中回廊かきろうへ至る扉に近づいていることだけは間違いない。しかし、ポールとサハラサハラのいらだちはつのる。

「この扉ではないか」

「いや、そこは先に通過した部屋だ」

そういう類たぐいの言葉の応酬おうしゅうが何度か続いた。

何度と同じ部屋を繰り返して通過している気がする。気がするばかりでなく、実際にそうであることが、扉の、炭でひっかいた印でわかる。サハラが、念のために通過するたびにつけておいた印である。

サハラとポールはふたたび、司祭の間いつものまにか戻ってきていた。夢の妖精の力によって傷が癒された、あの部屋である。

「扉はすべて試ためした」

サハラが言った。

「たどりつく部屋には、何の仕掛けも、隠し通路もなかった」

ポールが言った。気になる場所、特に奥に隠し部屋や隠し通路のありそうな場所には、その爆裂音で魔物を呼ぶこともいとわず、爆薬を仕掛けて回ってまで確かめたのである。

「鍵はいくつ残っている」

サハラが尋ねる。

「二つだ。他と比べてはるかに大きいこの鍵はおそらく、あの棺ひつぎの鍵だと思つ」

ポールが答える。

「だとすれば、残るひとつの鍵の合う扉がどこかに残っているはずだ。おそらく、その扉の奥にある部屋が、空中回廊へと続いている」

サハラは言い、司祭の間の中央に立つた。

「きみもそう思うか。僕も同じだ。これだけ調べて他にないのだ。秘密はこの司祭の間にある」

ポールもまた、サハラに並んで立つ。サハラが頬ほおに手をあてた。ポールもまた、頬ほおに手をあてた。

かすかな風が、司祭の間の中央をわたっているのである。どこからかすきま風が入ってきているのだ。先には気がつかなかつたのは、仕方のないことだ。ここにこそ秘密があるとわかつて初めて気が付くほどの、その風はほんのわずかな空気の動きにすぎなかつた。

ポールが指さした。古文書こもんじよが天井まで埋め尽くしている、壁の一角である。巻物まきものがぞんざいに、かまどかまどに焚たく薪まきを積みおくように並んでいる。そして、それに降りつもつた軽いほこりがわずかに、線香の煙のようになるときどき立ち上がる列があつた。

ポールとサハラが駆け寄る。

「司祭の書き机が台になるだろう。古文書をおろすんだ」

ポールが言う。サハラが笑った。

「そんなまどろこしいことができるか」

サハラは言うなり、古文書の山に体当りした。藁わらの山に飛び込むはずら坊主のようである。

古文書の山は、積木がくずれるように、簡単にくずれ落ちた。ほこりがもつもつと立ちこめ、巻物の落ちたのが、司祭の間のあたり一面にごろごろと転がった。

「我々はずいふんと遠回りをした」

サハラが言った。ほこりの嵐が落ち着くと、古文書の山で影になっていた壁に、小さな入口が口を開けているのが見えたのである。石組でしっかりと枠わくのつくられた、立派なものであった。ポールとサハラは、ちらばった古文書を踏み、その中へと入った。古文書が足の下で、落葉をふむよくな音をたてて、粉となつてくずれた。

狭い通路であった。おそらくは、部屋と部屋との壁の、その間につくられた隠し通路である。サハラが、カンテラの火をかかげ、磁石じしやくで方位を調べた。

「間違いない。空中回廊へと向かっている」

ポールとサハラは、急いだ。突き当りに、扉が見える。恐らくこれが最後の扉だ。ポールは兵囊あきの中を漁りながら走った。ブーツの、石床をたたき音が通路いっばいに響く。時に混じる重い地じ

響ひびきのような音は、神殿のつくりに来た空洞くうどうか何かに、靴音が反響するせいだろうか、とポールは思った。

鍵を取り出し、扉の前に立った。そしてポールは、その重い地響きのような音が、ポールのブーツのものでも、サハラのものでもないことを知った。

「扉の奥からだ」

サハラが言う。

「何がいるんだ」

ポールは言い、鍵を差し込むのをためらった。

「わからん。しかし、ゆくしかあるまい。開あけるんだ、ポール」

ポールはうなずき、扉を開けた。まず、まばゆい光が二人の眼を射いた。天井が吹抜ふきぬけになっているのか、それは、日光である。一瞬にして眼がなれ、ポールとサハラは、あたりを見回した。何もない。ただの、石床いしゆかの続く広間だ。正面に、もうひとつの扉がある。

「あれだ。空中回廊へはあそこからいける」

サハラが言うがはいか、ポールは駆け出していた。

そしてそのポールのゆくてを、柱のようなものがふさいだのは次の瞬間だったのである。

——ドーン……——

通路で聞いた重い地響きの主は、それであった。身をかわして後ろに飛んだ、というより、その柱のようなものにはじき飛ばされた、と言ったほうが正しい。そして、はじきとばされた所に、ふたたび、別の柱のようなそれが、ポールを襲ったのである。

サハラが走り、ポールの腕を握って立ち回り、広間の隅へと逃げ込んだ。そして、ポールは見たのである。石でできているとしか思えない巨大な魔人像が六体、広間をとこ狭しと飛び回っているのだ。

「地堅めでもしているのか」

ポールが息を切らしながら言う。

「馬鹿言え。俺たちを踏みつぶそうとしているのだ」

凶体げうたいが大きすぎるために、広間の隅へは攻撃が及ばない。サハラは剣を抜いた。盾は右肘みぎひじに留めたままである。

「デグアモスに生命はない。機械仕掛けで動いている。手に持っている馬鹿でかい剣にまどわされるな。奴の攻撃は体落としかだけだ」

ポールもまた、剣を抜く。盾は弓とともに、背におった。

「俺たちの体温に反応して動きだしたんだ。しつこいぞ。奴の腹を見ろ。甲鎧かっちゆうの隙間すきまに、幾本か、蔓つるのようなものがあるだろう。力があそこを行き来している。あれを斬ればデグアモスの動きは止



まる」

「きみはよく知っているな」

「剣士たるもの、知らぬ方がおかしい。ゆくぞ！」

デグアモスの死の舞踏の舞台に、サハラがまず飛び出し、ポールが続いた。一体め、二体めは、簡単だった。二人仲良く、一体ずつをしとめた。甲鎧の隙間の蔓を断てば、そこからは油臭い水が滝のようにほとばしり、デグアモスは、遠雷のような深い叫び声を残してその場に立ち尽くし、動きを止めた。

苦しい戦いはそれからであった。デグアモスは、その動ける仲間の数が少なくなるにつれ、動作を速めて飛び回りはじめたのである。石床の広間は、その振動で大きくゆれ、立ってられないほどの有様であった。動きを止めたデグアモスが仲間の飛び回る振動で、横倒しに転がった。

デグアモスの体落としを受ければ、助かる見込みは方に一つもない。ポールもサハラも、骨も肉も分からぬ、ただの土くれに変わるだろう。デグアモスの攻撃を避ける、そのために、ポールとサハラは傷つき弱っていくのだ。

はじき飛ばされ、壁にたたきつけられて骨を痛めた。間一髪で体落としをすりぬける、そのために、足をくじき、膝の皮をむいた。

剣が、デグアモスの急所を襲うその頻度は目に見えて減少してきたが、それでもなんとか、あと

二体を残すところまで来た。デグアモスの動きはいよいよ速い。時に眼が追いつかぬほどの速さで飛び上がり、また落ちてくる。

ポールは、動きを止めたデグアモスをうまく隠れ蓑かくみのに使いながら、急所を断つ一撃を狙った。もう一体のデグアモスは、サハラが引き付けている。デグアモスが斜めに飛んだ。それは、いまままでのデグアモスも見せたことのない飛び方だった。いよいよ戦いも大詰めを迎えたその証拠であった。デグアモスも、一か八かに撃って出てきたのだ。

ポールは、デグアモスの動きを見切って、横だおしになっている抜け殻ぬがらの影に飛び込んだ。デグアモスは、ポールが身を隠している仲間の身体をみじんに砕き、その反動でバランスをくずした。ポールはその一瞬をつかんだ。飛び上がろうとするデグアモスは、まず体勢を整えようとして、数秒、巨体をかしがせたのだ。

ポールは剣を上段に構えて走った。そして、腰に力をため込み、身体を回転させた。剣に光が宿り、見事な円を描く。その円は、デグアモスの甲鎧を裂き、急所を断った。

デグアモスはバランスを失ったまま、動きを止め、叫び声をあげ、重い地響きをたてて倒れた。そしてその拍子に、見せかけだけであった巨大な剣が、扉を裂いたのである。扉はまっふたつに割れ、向こうに空中回廊が続いていた。求め続けた石の棺ひつぎがそこに鎮座ちんざしているのが見えたのである。

「走れ。いくんだ！」

サハラの声であった。ポールは振り返った。サハラは、広間の隅に追い込まれていた。ポールには、最後の一体のデグアモスの魂胆こんたんがわかった。床をくずし、自分もろとも侵入者をがれきの下敷したじまに葬ほうむろうとしているのだ。

ポールは背から弓をおろし、腰の革筒かわつつから一本の矢を抜いてつがえ、ゆっくりと構えた。サハラに気をとられているデグアモスの背中に、急所のありかは、ありありとポールに見てとれた。

……飛び上がる、その一瞬だ……

矢は放たれた。空気を裂いて飛び、矢はデグアモスの急所を切り裂き、甲鎧の中へ沈み込んで止まった。

——ズン……——

サハラを襲おうとしていたデグアモスは最後の地響きを残して動きを止めたのである。

ポールは、すぐにきびすをかえして、扉をくぐり、空中回廊を走った。石の棺は今まさに眼の前にある。兵囊ひょうのうから、ひときわ大きな鍵を取り出す。そこだけ金属でできている鍵穴に差し込む。

いい音がした。棺は自然に口を開けた。

サハスラーラから受け取った二つの紋章もんしょうと、それは、何ら変わるところはなかった。古びた、どこにでも転がっていきそうな石の紋章である。しかし、ポールにとっては、何物にも代えがたい代物しろもの

なのだ。勇気の紋章は、棺の中、大量の砂粒すなごに守られて、そこにあった。

「やったな」

サハラの声である。ポールが振り返れば、デグアモスとの戦いで、自分と同じく全身に傷を負い、頬から血を流しているサハラがいた。

「やった」

今度はポールが先に笑った。サハラも笑った。ポールは、サハラを抱いた。

「きみのおかげだ」

ポールが言う。

「何を言うか。高い耳だけではない。きさまの剣と弓の腕こそ、勇者にふさわしいものだ。堂々と勇者を名乗れ、ポール」

サハラは一層の力をこめ、ポールを抱き返した。泣いている自分をポールに気づかれぬようにするためにである。

第四章

---

闇の世界へ

森は深い息をつき、その水気で、そこに集まる者みな髪の毛をしとどに濡らしていた。まだ日の高い時刻であるけれど、厚い葉が天を覆ってなお暗い。むせかえるような、緑の臭いである。ハイラルの森には、生命が濃く充滿している。

年ふつたが故に城より聖職を与えられたサハスラーラが長いローブをひきずり、その裾を樹々の滴で重く濡らして歩き、正確に円形であるその遺跡へと近づく。サハスラーラは遺跡へ上る階段のその一歩手前で立ち止まり、いくつかの聖なる言葉を口にした。いにしえのすでに忘れ去られた言葉と文法を持つ言葉であり、翻訳すれば次のようになる。

「偉大なるハイリアの遺志を継ぐ者に、聖なる剣を与えられん」

サハスラーラが手をあげた。合図である。背後に控えたおびただしい数の「剣士の翼」の群衆の中から、ひとりの少年が進み出る。ポールであった。

ポールは、改めてサハスラーラから、三つの紋章を受け取る。力、知恵、そして、勇氣。この石でできた古びた紋章とポールに、すべての者の視線が集まる。

ポールはサハスラーラの指図に従い、伝えられた流儀通りに、三つの紋章を組み合わせた両手に巻く。それは、捕らえられた罪人にかけてられた縄のようにも見えた。これから後、勇者としての運命にすべてを捧げる、その証でもあるのだ。

ポールは、遺跡の階段を一步ずつ、確かめるように上った。階段は円形の遺跡の、その芯に向か

って伸びている。

そして、その芯、遺跡の中央には、一本の剣が、風雨にもくさらず、刃もこぼれず、たつたいま打ち仕上げられたばかりの品であるかのような輝きをもって、切っ先を下に突き刺さっていた。

過去、財宝を求めてさまよう盗賊とうぞくをはじめ、何人がこの剣の前に立ったかはわからない。しかし、この剣は、剣自身が、前に立つ者を勇者と認めてはじめてそこから身を自由にする剣である。古代ハイリア人が、神のお告げをもって鍛えた退魔たいまの剣、マスターソード。幾世紀、ここで勇者を待ち続けたか、それはマスターソード自身にさえ、わからぬ。

ポールは、深く息を吸い込み、そして吐き、マスターソードの前に立った。見事な剣である。薔薇びの巨木から切り出した材を磨きあげてつくられた握り束。それは、剣の胴と同様、輝きを少しも失ってはいない。そして、聖三角体の紋章が中央に。それは伝説のトライフォースの写し絵であった。

いよいよマスターソードが抜かれる瞬間である。幾世紀待たれたこの瞬間に立ち会うその感動に、剣士の翼の群衆は、うちふるえていた。それはサハスラーも同様である。誰も、ひとこともしゃべらなかつた。息をするさえ、はばかつた。

ポールが両手を伸ばした。それが合図でもあったかのよう、森は、ポールの頭上はるか枝々を左右に分けた。太陽の光が流れ込み、滝がその身を打つように、ポールの身体を太い光の筋が打

った。

そして、ついにポールはマスターソードをその手に握ったのである。マスターソードの握り束は、ポールの手に、まるでそこそがおのれの生まれた場所であったかのように、ぴたりとなじんだ。ポールはふと、幼いときから慣れ親しんだ、あの一丁のダガーの感触を思いだした。

マスターソードはぐらりと動いた。重い。ポールの両腕に、その重みがどっしりと伝わった。長さはポールの背丈せたけの半分以上はあるだろう。おびただしい光を浴びて、ポールはマスターソードを上へと引く。

——おお！——

サハスラーが声を上げた。森がその枝を分けて誘い入れた太陽の光の筋が、ひとつの巨大な腕となつて、マスターソードを引き抜くポールに力を貸しているように見えたからである。

そして、マスターソードはポールの胸に抱かれた。三つの紋章が砕くだけ、砂の粒となつて遺跡の上にごぼれるのと、それは同時であつた。太陽の光は、それまでマスターソードがそこにあつた場所を照らしていた。くさび型のそのうつろを、今は砂となつた紋章が埋めたのである。

——ポール！——

一斉いっせいに声が上がリ、森にこだました。勇者の出現を讃たたえる、剣士の翼ふたぎの風儀である。サハスラーは、眼に涙をため、遺跡から戻つたポールを迎えた。





「ポール。おまえこそは真の勇者。ハイラルはこれで救われる」

サハスラーは、ポールが腰にはいていた剣に手をのばし、引き抜いた。

「アトラスの剣は私がこの手で供養くようすることにしよう。このうえない逸品いっぴんだが、洞窟どうくつの祭壇さいだんに祭り、剣士の翼の神器しんぎのひとつとし、封印ふういんする。盾たてはアトラスの形見かたみとして使い続けるがよい」

ポールは盾をかまえ、剣をその盾に見合わせてみた。美しい組合せの一組であった。アトラスはいつかマスターソードと出会う日を胸に、喜々ききとしてこの盾を仕上げたのかもしれない。

——アトラス！——

アトラスを讃たたえる声があがった。

——ポール！——

続いてふたたびポールを讃たたえる声。そしてそこに、ただならぬ緊急の声が混じったのは、次の瞬間であった。

「長老！ ゼルダ姫が！」

サハラであった。ポールとともに洞窟へと戻ったサハラは、ゼルダ姫をより安全な場所へ移すために、休息をとる暇もどかく、教会へ向かったのだ。

「ゼルダ姫がいないのだ。教会に、影も形もないのだ！」

サハラは、泣いていた。声がかれ、その形相ぎやうそうは憔悴しょうすいしきっていた。サハラは、最後の望みを

託して手をつくし、ゼルダ姫を捜し回ったのである。

「落ち着け、サハラ。神父はどうしたのだ」

サハスラーが言った。サハラは腕を伸ばし、手の中を見せた。そこには、神父がいつも胸に飾っていた聖石がサハラの手の汗に濡れて、あった。

「囲炉裏の脇に転がっていた。血の跡があった」

遅かったのである。ゼルダ姫は、一步早く、アグニムの軍隊に連れ去られたのだ。それはサハスラーにとって、予想の外に急激な展開であった。

「馬鹿な。それではアグニムはすでに六人のいけにえを闇の世界へ送り込んだと言っても言うのか。娘をのせた船は、我らの手で足止めしたはずなのに」

しかし、ゼルダ姫が姿を消したのは事実である。そして、ゼルダ姫を追うものは、アグニムをおいて他にないのだ。

「猶予はならぬ。サハラ。軍を集めろ。城へゆく」

サハラは涙を拭う。さすがにサハラは長老の孫であり、ふたたび毅然とした顔つきに戻る。背後に控えた群衆の中にサハラは飛び込み、次々に指図を与えていく。群衆はいくつかの集団に別れ、ある者はまっすぐ城へと向かう。ある者は、洞窟へと戻り、兵具の準備を整え、城へゆく者を追うのである。

「ポール。おまえは、私と城へゆくのだ。わかるな。私が倒れば、おまえが指揮をとらねばならぬ」

サハスラーラが言った。群衆に指令を与え、サハラもまた戻ってくる。サハラが、ポールの肩を叩く。ポールがうなずく。

「長老！」

森はいよいよあわただしくなってきた。ひとときわ高く声をあげて駆け寄ってきたのは、城の様子を確かめるために昼夜を問わず張り込んでいたはずの、諜報部隊のひとりであった。

「たった今、ゼルダ姫が城へ！ 山のような軍隊です！」

カカリコの村で普段は穀物を商っているその商人の顔は、炭で黒く染められている。絹を黒く染め、身体に合わせて織られた衣服をぴたりとまとったその姿は、剣士の翼の訓練を重ねた、第一級の諜報部隊の一員であることを物語っていた。

「何人か、城へ入ったか。ゼルダ姫を追って、誰が城へ入った！」

サハスラーラが言う。

「それが……」

商人の声が弱まる。

「どっしたのだ！」

サハスラーラが声を荒げた。嫌な予感が走ったのである。

「アグニムが、城に結界をはったのです。誰も城へは入れないんだ！」

サハスラーラは息を飲んだ。城全体に結界をはるなどは、なまじの魔術師の力では、できないことである。アグニムをあなどっていたのか、とサハスラーラは思った。いや、そうではない。もしかすると、すでに……

……ガノンの魔力がこちらへにじみ出てきているとでも言うのか……

サハスラーラは、それを声に出しては言わなかった。自分でも信じたくないことであると同時に、おそらくそれはすでに確実なこと。そして、そうだとすれば、それはすでにサハスラーラの対処の枠を超えている最悪の事態だったからである。

「ゆくぞ、サハラ」

ポールが言った。ポールはアグニムの影に、今はさらに色濃く控えているガノンの存在を直感したのである。それはまた、たった今手にしたばかりのマスターソードがポールに教えた知恵でもあったに違いない。

サハラは、しばし立ち尽くしているサハスラーラを抱いた。サハスラーラは、サハラの頬を、慈しむように手のひらで二、三度たたいた。そして、サハラは、ポールの後を追う。

すでに城へ向かって歩き始めているポールの背中、村で捕らえられた時にサハラがはじめて見

たそれよりも、今ははるかに大きく、逞しく見えた。

\*

「いくら軍備を揃えたところで、これでは……」

先手で城へ発った剣士の翼の部隊は、城の前に立ち尽くしていた。城がそこにあることさえ、はじめてここに立つ者は信じないだろう。城があるべきはずの場所は、黒雲のかたまりが空から下りてきて、そこにじっとうずくまっている、そんな様子でしかなかったのである。

アグニムは城に結界をはった。アグニムだけの力によるものではないことは明らかだった。結界のエネルギーは過剰に過ぎ、空間を歪ませて磁場嵐を呼び、雲をつくって結界のありかをありありと見せていたからである。

結界の力が強すぎるのだ。わからぬように結界をはり、相手を攪乱するのが、普段の魔術師の常である。城にはられた結界の尋常でない巨大さは、ガノンの魔力がこちら側、つまり光の世界ににじみ出てきているその証しであった。

しかし、今のアグニムには、結界をはることさえできれば、それで文句はなかったのである。結界が目立ちすぎるなど、どうでもいいことだった。少しの間、邪魔者どもが城へ入れぬようにすれば、それですべては事足りるのだ。

最後のいけにえであるゼルダ姫を闇の世界へ送る儀式さえ済んでしまえばもう、自分の手に落ちた城のことも、王族に忠誠を誓うがゆえに自分を憎む者たちのことも、ハイラルに関わるすべてのことは、その瞬間に意味を失うのである。気を使うことはない。徹底的にやっつけてしまえば、それはそれでよかつたのだ。

黒い雲が渦を巻き、城の周囲を旋回していた。大雨の末の濁流が、そのまま宙に浮いて暴れているような様であった。黒い雲の帯が、巨大な巻貝のようになって、天へ立ち上っていくのである。不思議に音はなかった。眼の前の運動の激しさに全く不似合いな静けさが、剣士の翼の部隊の恐怖を増した。

部隊は、ありとあらゆる方法を試した。大木を運んで、雲の帯と見える結界にかまし、その流れを絶とうとした。しかし大木は、まるで藁くずのように軽がると上空へ持っていかれた。

部隊の者五人分の体重ほどもある爆薬を仕掛け、結界の空間構造を力で破壊しようとした。しかし、その爆裂は光に変わっただけであり、黒雲の渦を一瞬、美しい火花で染めただけであった。

「サハラ殿！」

前線部隊をまとめる指揮官の剣士が叫んだ。対処の仕方が見つからず、ことごとく肩を落としていた部隊が全員、顔を上げる。サハラとポールが城に到着したのは、部隊が、三発目の爆薬を、空しく試し終えたときのことであった。

「なんてことだ……」

遠くから城を眺めてもその様子は伺えたが、いまサハラが間近に見る城は、想像を超えた荒々しさをもってそこにあった。胸に鉛のかたまりが生まれるのを感じ、サハラは深くためいきをついた。

「絶望的です。結界がはられてからも、太陽がだいぶ動きました。おそらくゼルダ姫はもっ……」

指揮官は、なすすべのないこの状況に青ざめていた。爆薬も底をついている。剣士の翼に参画した白系列の魔術師たちの力も結界の巨大さに歯がたたず、かえって異能力者だけが感じる波動に神経をやられて倒れる術師が続出している有様なのだ。

「絶望的だと。それを言っただけでどうなる」

サハラは、いらだった。城にはられた結界の異常さと、結社部隊の様子を見れば、もはや事態が最悪の局面を迎えていることは、サハラ自身、瞭然としてわかった。そして、サハラのいらだちは、何より、この時この場において何もできぬ自分自身のふがいなさから来っていたのである。

「手は尽くしました。覚悟をきめられるべきだ。新しい世界が始まる、仕方のない歴史の流れかもしれませぬ」

「きんぐまー」



若いサハラは、指揮官のその言葉に思わずこぶしを握った。指揮官は、サハラより二まわりほど年の高い男である。サハラは、指揮官のその両眼いっばいにたまった涙にも気づいていないわけではなかった。しかし、許せなかったのである。

そして、その許せない気持ち、何に對してのものなのか、サハラにはすでにわからなかった。結社の重鎮じゅうちんとして生きてきた指揮官のその言葉には、とてつもない現実の重みがある。それすらも、サハラは十分にわかっていた。これ以上策を狙ねらい、剣士たちの命をいたずらに動かすことはもはや悪行に近いことも、サハラには心にしみて、わかっていた。しかし、許せないのだ。許せないと思つこの気持ちに向かうべき場所を、ついに見つけられず、サハラは叫んだ。

「では俺たちは何であつたのだ！」

サハラは指揮官を殴なぐつた。指揮官は、サハラのコぶしを甘んじて受けた。ゼルダ姫はハイラルそのものである。ゼルダ姫なくして剣士の翼はない。指揮官もまた、それを十分にわかつていたのである。伝説でんせつを戴いたく清澄せいじやうなる一団「剣士の翼」は今、結束はじまって以来の大きな試練に立たされたのだ。

しかし、果してそれは試練と言ふべきものだったろうか。何ほどかの未来がそこにあるときこそ、苦しみは試練とも呼べるだろう。抜け道のない試練、それは純粋じゆんすいなる苦しみであり、剣士の翼が今この時に立たされた状況は、まさにそれであつた。

一方、ポールはその場に、まったく独立した風をもって、いた。城にはられた結界の流れをただじつと見つめ、サハラと指揮官のしばしのいさかいは、まったく無関心の風をもって、そこにいた。

ポールは、城の前に立った瞬間に自然にその手にし、胸の前に掲げていたマスターソードが、自分に語りかけてくる、その声を聞いていたのである。

「サハラ。動ける兵を集めてほしい」

ポールが言った。

「たいそうな軍備はいらぬ。おのおのに、剣のひとふりでいい」

サハラは、しかし、ポールを見なかつた。ポールの声が耳に届いたかさえ、定かではなかつた。サハラは、ただ、眼をうつろにして城を見上げているばかりであつた。

「結界はきつと僕がやぶる。あなたは兵を頼む」

ポールはサハラをひとまずおき、指揮官に向かつて言った。百戦錬磨の指揮官である。ポールの強い言葉に、望みあり、と知つたのだ。すぐにその場を去り、先鋭の部隊を組みに走つた。

「俺はどうしたらいいのだ」

うつろな眼でサハラが言う。

「剣をかまえるのだ」

ポールが言った。しかし、サハラはただ苦く微笑んだ。

「ゼルダ姫はもう、行ってしまった。無駄なことだ」

ポールはゆっくりとした仕草でまずマスターソードを腰にはきなおし、盾を背におった。両手を自由にし、そしてポールはサハラの頬を音高く殴ったのである。

「正々堂々とやろうと誓ったはずだ」

ポールはそう言い、ふたたびゆっくりとした仕草で盾を手に持ち、マスターソードを胸の前に構える。サハラは打たれた頬に手をあててなで、しかしまだ、ポールから視線をそらしている。

「ゼルダ姫が聞の世界へ連れ去られたのなら、僕たちもそこへ行けばいい。地獄の底へ落ちたのなら、僕たちも一緒に落ちていけばいいのだ」

ポールはそう言い、サハラに背を向ける。しかしサハラは動かず、その場に膝を折り、草の上に腰を落として頭を抱えたのである。

おのれに自信がなかったのではない。ポールでさえも、すでにゼルダ姫はあちら側へ行ってしまったことを確信している、それははっきりと今知ったのだ。サハラはゼルダ姫の苦しみを思い、その悲しみに沈んだのである。

ポールはサハラを残したまま、城門のあるべき方向へと向かって歩く。黒雲はさらに勢いを増して渦巻き、ポールの頬を気味の悪い、粘り着くような風がなでていく。剣士の翼の先鋭剣士たちが

ポールの背後を固めた。

粘り着くような風は、いよいよ実体となって、ポールの頬にまとわりつく。背後の剣士たちにおいても、それは同じであった。なめくじの吐く粘液のような物質が、城になお近づく者たちの耳に鼻につまり、呼吸を難しくさせた。結界が、現実との境界と接触する時に吐き出す、それはエネルギーの槽であり、結界に分けいったことを示す、ひとつの印でもあった。

マスターソードは、結界の吐き出すエネルギーの槽に触れるたびに輝いた。光をまもって、ポールの手の中でふるえた。

そしてポールは結界の圧力に逆らい、満身に力をこめて、マスターソードを頭上に掲げたのである。

——ハイリア人の魂よ。くずれるべき壁をくずせ！——

ポールは、つまる喉を開き、声をふりしぼった。それは、マスターソードがポールに教えた言葉であった。

マスターソードは太陽の光を呼んだ。光はマスターソードの切っ先をめぐけて集束し、密度の高い光のロープとなり、その分、世界の他の場所は闇に落ちた。太陽は、その時、力のすべてを、マスターソードに与えたのである。

太陽とマスターソードをつないだ光のロープが、黒雲の帯と見える結界を裂き、その流れをせき

止めた。まきがい巻貝のように天に立ち上がった結界のかたまりに、きれつ亀裂が入った。亀裂の入った結界は、そこから綻び、ほころ勢を増してほどけた。

アグニムのはった結界は、ついにあとかたもなく空へと消えたのである。

あとには、ハイラルの城の、すがすがしい姿だけが残った。アグニムの手に落ちるまで、常に城下を見守り、また民を見守ってきた、それは聖なる城であった。

城門は、マスターソードを掲げたポールを前にして、自らの力で大きな音をとどろかせ、左右に開いた。城の中、ちゆうおうしやう尖塔へと続く中庭に葺かれた石組みの回廊がその奥に見え、ポールと、剣士たちのゆくべき道を指し示した。

「命を俺にあずけよ！」

指揮官が叫ぶ。一度絶望の淵に立った剣士たちの胸に、ふたたび炎が燃え上がった。ときの声をあげ、ポールを追い越し、次々に城内へなだれ込んで行く。

ポールは城内へ向かう激流のような剣士たちの流れの中に立ち止まり、ふりかえった。そして、ポールは城門の下に、サハラ姿を見たのである。ほそみ細身の剣を手の先に伸ばし、サハラは、鋭い眼をして立っていた。

\*

大きな一枚岩いちまいいわを正確に長方形に切り出した、棺ひつぎのような冷たい台の上に、ゼルダ姫は身を横たえていた。眼は堅く閉じかたられていた。息はかすかにあった。規則正しい、しかし、よほど注意して見えない限りわからないほどにゆっくりとしたリズムで、小さな胸は上下していた。

金色の髪が広がり、大鳥おやどりが羽根を広げているようにも見えた。両手は、胸の前にきちりと組まれてのっている。唇くちびるの、生命あふれた、見事に薔薇ばらのように赤いのが、いま、ゼルダ姫はその御身おんみの病いや故障のためでなく、正しくアグニムの術力じゆつりきによつて眠らめされていることを教えた。

ゼルダ姫の白いドレスに不気味な影が大きく落ちた。アグニムである。

アグニムは、ゼルダ姫をただちに城の中央塔、最上階に運びこませた。ゼルダ姫は最後まで抵抗を続けたが、その時にはすでにガノンの魔力の後見こうけんを受け始めていたアグニムの術力は、ゼルダ姫の眼に、自分がこれから身を横たえることになるいけにえのための祭壇さいだんの冷たい輝きを、一瞬だけ見せはした。しかし、この最上階の儀式の間に足を踏み入れるか入れぬかの内にアグニムは、深い眠りをたつぷりとゼルダ姫に与えていたのである。アグニムの顔をにらんだか、と思った次の瞬間には、ゼルダ姫は床の上にくずれ落ちていたのだ。

封印戦争で功を成なしたいにしへの七賢人けんじんの血を継ぐ娘たちのうち、六人まではすでに闇の世界へ送った。闇の世界は、ガノンがトライフォースの力をかりて創つくった世界である。ハイラルの光に対して闇と呼ぶ、それは今のいままで、ハイラルの民にとっては想像上の世界でしかなかった。善に

対する悪、美に対する醜しゆうといったような、単なる言葉の上での世界でしかなかったのだ。

しかし、アグニムは、闇の世界にとりつかれて研究を進め、そこへ至いたる道を発見して、確かに闇の世界が実在することを証明して見せたのである。闇の世界との接触に成功したならば、次にはガノン、そしてトライフォースへと野望を連続させていくことは、ブラック系列の魔術まじゆつし師であったアグニムにとって、ごく当然のなりゆきであった。古代ハイリア人の知力の再生を追求することがホワイト系列の魔術師たちの夢であり理想であったとすれば、魔王ガノンの復活こそはアグニムをはじめとするブラック系列の魔術師たちの、最大にして最終の目標であったからである。

朽くちかけた教会に隠遁いんとんした神父の恐れていたことが現実になりつつあった。神父が古文書こもんじよを研究しつくして得た結果のその通り、ガノンの封印は決して完璧かんぺきではなかったのである。娘たちが祖先から受け継いだ魂たましいの波動はげうは闇の世界へ至きつて共振きざんし、ガノンの動きを止めている封印のくさびを揺ゆすった。五人めを送り込み、六人めを送り込む頃には、ガノンは、少なく見積みつても上半身の自由は得てしまっていた。

自分自身、幾世紀も待ちに待った復活を、今ハイラルで実現させようとしている者がいる。それを知ったガノンは、せいっぱいアグニムに力を貸した。アグニムが開あけた両世界をつなぐ道を通じて、できうる限りのエネルギーと必要なスペル、呪文じゆもんを送り続けたのである。

「今日が最後の日となろう。ゼルダ姫。あなたは幸せだ。城下の民たみがその眼で見、全身で感じなけ

ればならぬ苦しみと恐怖の時に、あなたは眠っていられるのだからな。ふたつの世界に境はなくなる。津波のように、闇の世界はこちらへ押し寄せるであろう。そして、すべての生命は、血の海の中で思い知るのだ。光があつて闇があるのではない。闇があつてこそ、はじめて光はあつたのだ、ということだ」

アグニムはゆっくりと歩き、眠っているゼルダ姫を中央に囲んで方角を六つに分ける地点に一本ずつ、ハイラルの地に住む巨大な蜂はちの、その巣からとれる蠟ろうを丹念たんねんに練り上げてつくった蠟燭ろうそくを置いた。それぞれに灯す火は、すでに闇の世界へ送り込んだ娘たちの魂の象徴である。その中心に、儀式の最後をしめくくる最も重要なけにえである、ゼルダ姫が昏々と眠る。

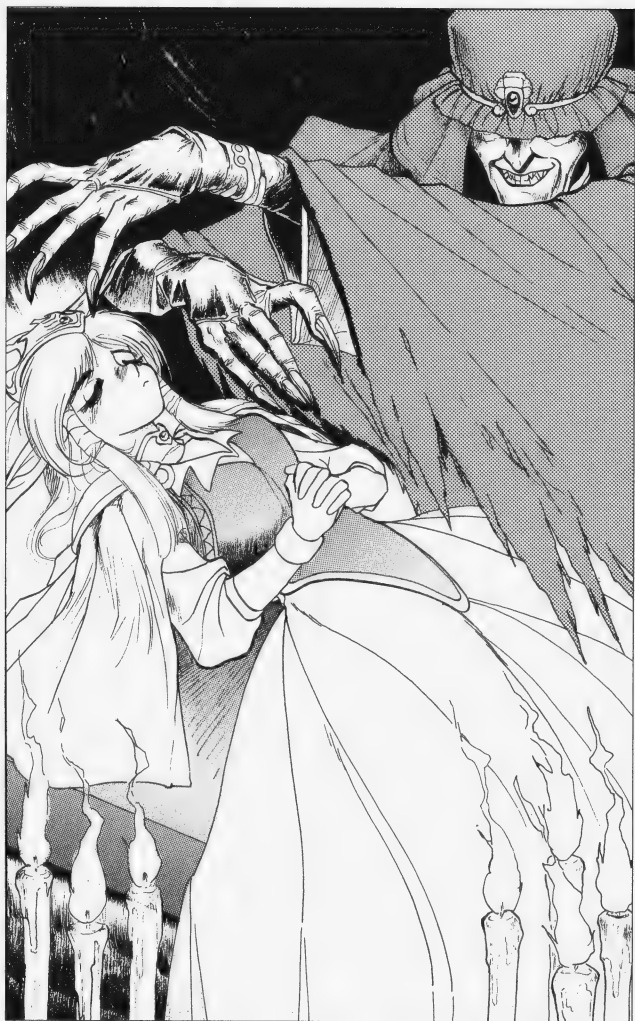
アグニムは、いよいよ仕上げにとりかかろうとする。長いローブのその裾すそをたくしあげ、骨の浮き出た両腕を裸にし、天をおおぐでもなく肩のあたりへ、そして頭上に掲げる。必要なスペルは、次々にアグニムの頭に浮かんだ。魔王ガノンが闇の世界から伝送でんそうしているのである。

「アグニム様！」

中央塔最上階のこの部屋に、扉はひとつだけである。もとより儀式のために造られたものではなく、見張り用に設けられた部屋だったから、扉は薄い板一枚の出来である。その扉が軽い音をたてて開き、顔の全面を甲かぶとで隠した兵士がひとり、現れた。

「結界がきました。反乱軍が、城内に」





「ボールか」

「はい。あの小僧です。サハスラーラの軍隊が続いています」

アグニムにとつては、意外なことではない。遅かれ早かれ、結界はやぶられることは百も承知だ。城に配下はいかの軍隊は三千。その軍隊が、儀式の終わるまでの時間を稼かせぐならば、結界の消滅などはそれほど重じゅうだいじ大事ではない。反乱軍を排除することも、また、ボールを倒すことさえ必要ではない。

アグニムは言った。

「あわてるな。たかが田舎軍隊いなかぐんたいに何ができる。きさまらは、軍人一系、手練れの集まりだろうが」

「ことのほか、苦戦です。アグニム様。ここは危ない。塔の最上にて、逃げ場がありません」

その兵士は、儀式の意味を知らない。アグニムはゼルグ姫を人質としてハイラルを配下に治めようとしているくらいにしか判断できていないのである。そしてそれはまた、配下の軍隊ほとんどの者の意識であった。アグニムの野望の本質を知っていたのは、剣士の翼の、ごく一部の者だけだったのである。

「心配無用だ。剣士のしかばねひとつに、百ルピーの報酬ほうしゅうをつかわすと全軍に伝える。存分ぞんぶんに戦え」

アグニムは、そう言い放つと、兵士を部屋から追い立てた。なかば腕うでづくで兵士の肩を押しして追

い出し、アグニムは扉にかんぬきを渡し、簡単に入れぬようにした。配下の軍隊のいちいちの戦況報告などは、つまらぬ邪魔でしかなかったからである。とにかく時間がかせげればいい。おのれの身の安全さえ考へる必要もない。だからこそ、ハイラルの地で最も民から遠い場所、城の、それも最も高いこの中央塔の最上階にアグニムは儀式の間をかまえたのだ。

しかし、ただひとつ、アグニムの計算が狂っていたところがあつたとすれば、それは、サハスラーの軍隊が、配下の兵士たちの実力に迫って訓練を重ねてきていた、予想外に優秀な剣士たちの集団であつたということである。

「城に仕えながら、なぜ、きさまらは寝返つた！」

サハスラーの軍隊は、指揮官を先頭に、城内を突き進んだ。諜報部隊が事前に調査したはずの数よりも、はるかに多い兵士たちが城内にはいた。鉄球をあやつる巨人の兵士、猪の頭を持つ槍使いなどは、アグニムが異次元から呼び込んだ直属の魔界軍であり、その分、数はふくれあがつていたのである。

魔界軍はことに手ごわく、サハスラー側の反乱軍が倒されるのは、主に、それらの兵士の手によつてであつた。もとより城に使っていた兵士の中には、サハスラーの反乱軍を待つて、あらためてそれに合流し、アグニムに反旗をひるがえす一団もあつた。反乱軍は、倒れる者と、途中からつく者としてその数のバランスを保ちながら、粘り強く城の奥へと侵攻した。

「アグニムはどこだ」

サハラがひとりの兵士を捕らえた。赤の甲鎧かっちゆうをまとった、それは将校級の兵士である。腰をおつたところを後ろからはがいじめ、のどもとに剣をあてがった。兵士ののどはわずかに切れ、剣に血がつたつた。

ポールはサハラの背に背をあわせ、四方からくる敵軍の攻撃に備えていた。マスターソードは、ポールが繰り出す剣の技に見事ことに応え、さらには、その切れ味をポールの実力以上に発揮させもするのであった。次々に倒される兵士たちの、床に倒れて立てる甲鎧の音を間近に聞き、赤の甲鎧の将校は怖気おびげづいたと見えた。

「中央塔の最上階。その螺旋らせんの階段を上りつめて突き当りだ」

サハラとポールは、将校しょうこうの指さす方向を見た。城内広間の最も奥まった場所、壁が大きく切りこまれ、そこに、巨大なネジのようなものが上へと延びておさまっている。円形の石を無数に積み上げたのに段を刻んで螺旋とした、中央塔の芯しんを通る階段柱だ。

ポールはただちにそれへと向い、サハラもまた、将校から手を離して後に続く。放り出された将校は、二人を追うでもなく、肩を落としてその場へへたりこんだ。

見上げれば、それは井戸を覗のぞくに似ていた。柱は高く、終点は針の先のようにである。ポールとサハラは、後になり先になり、その螺旋階段を上りはじめる。反乱軍の兵士のうち、幾人かは、二人

の後に続いた。残る兵士は、それを追おうとする敵軍をせき止めるために、階下に立った。

「ポール。きさまは何に向かって走っているのだ」

サハラが言った。螺旋階段は果てのないように思えた。息は辛く、心臓は痛んだ。

「わからない」

ポールが答える。下を見れば、眼がくらんだ。いま上っている柱のその姿だけが続いていた。それでもまだ、階段は終わらぬのである。

「きみはどうなのだ」

ひるがえってポールが尋ねる。

「アグニムを八つ裂きにしてくれるのだ」

サハラの前にはとばした敵軍の血はすでに乾き、波を描いて輝いている。

「ゼルダ姫は、やはりもうだめか」

激しい息づかいだけが支配するしばしの沈黙の後にサハラが言った。ポールはサハラその言葉に足を止めた。ポールは言った。

「あきらめてはならない、とマスターソードが僕に叫び続けている。だから、走っているのだ」

「それでは」

「そうだ。望みはある。急ぐのだ」

サハラ顔に、にわかに赤みが差した。助けることができるかもしれない。ゼルダ姫はきつとまだ、自分と同じこの世界にとどまっておられる。サハラは、自分にそう言い聞かせ、ふたたび走りはじめた。

しかし、その時ポールが考えていたことは、サハラとはまったく違っていた。この中央塔の最上階、そこは決して戦いの最終の場所ではないことを予感しつつ走っていたのだ。ゼルダ姫は必ず、闇の世界へ連れ去られるだろう。ガノンは必ず復活するだろう、と考え、それは確信に近かったのだ。

ポールは、自分にマスターソードが与えられた、その意味について考えていたのである。古代ハイリア人が神のお告げによって鍛えし退魔の剣。トライフォースをかどわかす悪を絶つ、世界の根底に関わって、その平和を取り戻す剣。マスターソードは、魔王ガノンをこの手で切り裂くために与えられた剣である。ハイラルの平和を守る。それこそが自分の使命であり、ゼルダ姫は、その平和の象徴に過ぎないのかもしれないのだ。ゼルダ姫を思う心にこだわれれば、道を誤るかもしれない。それは、ポールの胸にはじめて生まれた、勇者としての自覚であった。

そして、ついに、螺旋階段は切れた。中央塔を貫く柱は、細くその先を削って上空へ消える。わずかな踊り場があり、そこに意外なほどに簡単な扉があった。

「はいか」

サハラが言った。

「違うない」

ポールが答えるのももどかしく、サハラは扉を蹴破けやぶっていた。一枚板の扉はわけもなく二つに割れ、内側へと倒れ込む。最初に中へ飛び込んだのは、細身の剣を腰だめに身構えたサハラであった。

アグニムが、最後の儀式の間として選んだ中央塔、最上階の見張り部屋。確かにアグニムの手で最後の儀式が行われていたはずの場所。サハラは、がくりと膝ひざをついた。

ゼルダ姫はすでにそこにはいなかった。そして、アグニムさえ、泉にたつて風に散る白霧はくむのように、その姿をかき消していたのである。

\*

「どういふことだ」

サハラは天を仰あおいだ。

「あの将校め。嘘うそを言ったか」

「いや。違うな。アグニムは確かにここにいた。そしておそらくゼルダ姫も」

ポールが言う。

「この一枚岩は儀式の名残りだ。ろうそくは消えて間もない。事が起こつたのは、たった今だ」  
窓がある。城に迫る外敵の規模を、遠方で見極めるための見張り窓である。石組みの壁を円形に切り取り、さらに小さい石で枠を葺いてある。城の変事をよそに青く晴れている空が、その円形の窓に美しく切り取られてあつた。

ポールとサハラは、不思議にその窓にとりつかれた。何かが迫ってきている予感をその窓に感じて、二人、くいいるようにつめていた。

後に続いてきていた剣士たちも、同じであつた。そして、起こりつつある異変に最初に声をあげたのは、その剣士の中のひとりであつた。

まず、窓の枠をかためていた石のひとつが、音をたてて床に落ちた。力が加わつたわけではない。自然に落ちたように見えた。次の瞬間には、すべての石が、砕け散つて、ポールとサハラの足元にはばらばらと降つた。

窓のある壁が、何かの力で外側から圧迫されているのである。外は宙だ。ここは塔の最上階なのである。風ではない。嵐のせいならば、この塔全体が揺れるはずだ。

円形の窓が奇妙に歪んだ。縦に向かつて楕円形に歪み、そしてまた、今度は横に向かつて楕円に伸びた。まるで、窓そのものが苦しみに身をよじっているかのようである。

窓が外に向かつて膨張したかのように見えたのは、今度は、窓のある壁自体が飴のように曲が



り、歪みはじめたからであった。卵を飲んでふくれうごめく蛇の腹のように、壁は動いた。石組の壁が、動物の皮膚の弾力性を得て、自在に揺れている。

壁は動きをひとつに定めた。開いた窓が、まっすぐこちらへ近づいてくる。部屋の中央にいたポールの顔の前まで窓は押し寄せ、窓が壁を引っ張る。ポールは見た。窓の向こうは、絵の具を投げ散らしたような、色彩の嵐だった。

そしてついに、壁は膨張に耐えるのをやめ、砕け散ったのだ。窓がある側の壁一面の、すべての組石が宙にはじけ、ポールとサハラと、剣士たちを襲った。頭を襲い、肩を襲い、腹を襲って、そして床にばらばらと転がった。

ここは塔の最上階である。壁がなくなれば、そこには広々としたハイラルの空が待っているはずであった。しかし、そこにあったのは、空でも、城下を見おろす田園の風景でもなかった。色彩の嵐がそこに渦巻き、結界に相対した時に体験したのと同じ、あの粘りつく風が、そこにいる者全員の頬を打った。

光の世界と闇の世界をつなぐ、ここは門であった。闇の世界がこちら側、光の世界に押し寄せて来る、その最前線であった。

「剣士たちをその場に残せ」

ふりかえってポールが言った。異空間同士のあつれきが生む粘液を全身に浴びながら、ポールは

一步前に進み出る。

「ゆこう、サハラ。ゼルダ姫はこの中にきつといる！」

ポールはマスターソードを掲げた。上段に構え、そして振り下ろした。重く鋭い音がした。物質よりも密度の高い空間を切り裂いた、それはマスターソードの悲鳴であった。

色彩の嵐は、一枚の厚いカーテンであった。マスターソードに切り裂かれ、布を断ったような裂け目を現した。その切口の奥は暗黒であった。

ポールが黄金色の髪をなびかせ、粘り着く風に逆らい、その暗黒へと向かう。サハラもまた、革の甲鎧を粘液にひたらせ、色彩の嵐の裂け目をくぐる。裂け目は二人の通過するのを待つて閉じ、その場に残った剣士たちの眼の前で再び荒れ狂った。

ポールとサハラは、暗黒の中をさまよった。サハラはともにこちら側へ来れたのか。ポールには、それさえ、確かにはわからなかった。気配のみを頼りにするしかない。ポールもサハラも、全身を緊張させ、歩き続けた。何かが起こるのを待つより他に、なすべきことはなかったのである。

——ポール……——

声が出た。その声とともに、小さな光がひとつ、暗黒に浮かんだ。

——ポール……——

さらにもひとつ、光は浮かび、それからはこだまのようにポールを呼ぶ声は連続し、光も連鎖

した。ろうそくの光のように、それ自体は頼りなげに見えた。しかし、暗黒に位置を示し、ポールとサハラ、そしてもうひとりの人物の影を映し出すには十分な光の量であった。

アグニムがそこにいた。暗黒に床はなく、足元をそこに限って支える。長いローブが垂れ落ちるままに広がり、厚いフードは、口もとを隠し、アグニムの、青あざにくまどられた鋭い眼が、光の穴となつて暗黒に張り付いていた。

「あわれなる勇者よ」

アグニムのその声は、くぐもつて聞こえた。

「すべては、幾世紀前より、すでに遅すぎたのだ。何をもつてしても間に合わぬ。魔王ガノンの誕生は、すべてを決定した。そして魔王ガノンの復活は、これからの時のすべてを決定し続ける」

ポールはマスターソードを左舷に構え、アグニムの出方を見た。うかつに攻撃はできない。ここはアグニムの領土なのだ。

「きさま……」

しかし、サハラは違った。血気にはやった。

「ゼルダ姫をどこへやった！」

細身の剣が、暗闇にきらめいた。光の連鎖をけちらし、サハラはアグニムに向かってまっすぐに突進したのである。

アグニムのその姿が一瞬、膨張したかに見えた。確かに大きくふくれあがったのである。アグニムが防御波動ぼうえいばどうをはったのだ。光が厚くアグニムを守り、その屈曲くつきよくで膨張して見えたのだった。サハラの剣ははじかれてすべり、手ごたえを失った。

「愚かよの」

アグニムが笑った。

「この期ごにおよんで姫を案じてどうなる」

「おのれ！」

ふたたびサハラが飛びかかる。ボールの止めるその隙すきもなかった。

「眠れ！」

アグニムが、ひときわ声強くいい放った。その言葉がそのまま術の力となったように、ひとかたまりの光がアグニムの頭部から飛び、サハラの胸を射た。

——ぐっ——

うめいたのは一瞬であった。サハラはその場に釘くぎづけになり、そして次に、暗闇に浮遊ふゆうした。足が地から離れ、うつぶせに横になり、ふわふわと漂った。

「サハラ！」

ボールが叫ぶ。

「動くな」

サハラのもとへ駆け寄ろうとしたポールをアグニムが止めた。

「案ずるな。命はまだある。余計な殺生はしない。無駄なことだ」

いよいよ戦わねばならぬ。ポールはそう思った。マスターソードを上段に構え、ポールは少しずつ、アグニムとの間合いを詰めた。

「つまらぬ戦いだ、ポール」

アグニムは体勢を変えない。自分の勝利を確信している、そのゆえかもしれなかった。

「私はおまえに会いたかった。だから、ここへ誘い込んだ。その意味がわかるか、ポール」

ポールはさらに間合いを詰める。アグニムはそれでも体勢を変えない。

「私は闇の世界を復活させた。魔王ガノンの完璧なる再生はもう間近だ。私は闇を支配する。そして、ポール。おまえは光の勇者だ。わかるか。私の言おうとする意味が」

ポールがマスターソードを繰り出そうとしたそのとき、アグニムの身体は、音もなく遠のいた。幻灯の絵が銀幕をはずれて夜空に浮かび上がるように。

「単純な算数だ。闇の力。そして、光の力。その二つが一つとなったとき、力は完全となる。ポール。私と組まぬか」

ポールは胸が悪くなる思いがした。アグニムの、その貪欲な野望。見境なく得を追い求める、分

別のない恥知らずな思想。ポールは、身震いがして、今、確かに徹底的な憎しみをアグニムに対して抱いたのである。ポールはつばを吐き、叫んだ。

「犬に食われろ！」

「ならば闇の世界に落ち、魔王のえじきとなるがよい！」

アグニムが動いた。懐手にしていた両腕をにわかにローブの裾から伸ばし、暗闇に光を集めて、四方に放った。

アグニムの放った光は、暗闇を引き裂いた。裂け目は、四方に飛ぶその光に沿って走り、ポールの足元に巨大な口を開けた。

なすすべはなかった。ポールはその裂け目に吸い込まれた。魔王ガノンの領土である闇の世界へ、ポールは一気に落ちていったのである。

\*

嫌な夢を見た、と思った。何かとりかえしのつかない大きな罪を犯してしまった。記憶のすみに、そういった不安のかたまりがこびりついている。寝汗をたっぷりかいていた。サハラは、眼を覚ました。

剣士の翼の隠れ家である洞窟の、そこは治療室であった。ごつごつとした岩の天井がサハラの眼

に入つた。じりじりと油の焼ける音がしている。カンテラがひとつ、サハラの枕元に置かれていた。

カンテラの後ろを、小さな丸い影が動いた。おもに豆などの穀物をただ煎つたものにすぎないが、そういった兵糧ひょうりょうを入れておくための小さな革袋かわぶくろが、ばんばんにふくれて転がった、そんな感じだった。サハラはそれに気づかない。頭は重く、いまだ夢の中なのか現実じゆんじつに帰つたのかわからず  
にいたのである。

小さいが血のように赤い光の玉がふたつ、サハラの頭のすぐ横、薄暗うすくらがりの中に浮かんだ。それは、眼であつた。革袋かわぶくろのようであつた、その小さな丸い影の眼であつた。悪意あくいに満ちて眼はつりあがり、その眼の下に、ふたたび血のように赤い口が裂けて開いた。サハラの首筋を狙つているのである。

サハラは、まだ夢うつつの中、自分の顔の上にナイフを掲かかげてにらみつける、ひとりの人物の顔を見た。誰だつたらう。どこかで見た顔だ。にわかには思い出せず、俺はこれから殺されるのか、  
という思いだけが不思議に冷静に、サハラの頭に浮かんだ。

ナイフは振り下ろされた。サハラは、その光景をじつと見ていた。鋭い切つ先がいよいよ近づき、眉間みけんに落ちる、と思つたナイフは、ゆく先を不意に変えた。

——ギ……——

サハラの耳元に、高く鋭い悲鳴があがった。

「あぶないところだった。眼が覚めたかね」

神父であった。神父が手に握ったナイフに、獣けものの腹の中からとりだしたばかりの臓器のようにてらてらと薄気味悪く光っている、粘膜うすきみだけでできた丸い生物が突き刺さっていた。赤い眼を見開き、裂け目にしか見えぬ口からは、トカゲのそのような舌がだらりと垂たれ下さがっていた。神父の頭ほどの大きさの魔獣まじゅうであった。

「ゾル……」

サハラが身を起こして言った。

「そうだ。この魔獣の名をなぜ知っている」

神父はナイフに突き刺したまま歩き、治癒室の片隅に切られた暖炉だんろの火の中にゾルを投げ込んだ。ゾルは断末魔だんまつまの悲鳴を上げ、炎を吐き出して燃え尽きた。

「ハイラルの古い記録にありました。しかし、ゾルはガノンの封印とともに絶滅したはずの小魔獣しょうまじゅう。それがなぜ」

サハラが横になっている寝台に、神父は椅子を寄せて座る。

「闇の世界が溶け出している。道はついに開かれたのだ。ハイラルはふたたび暗黒に落ちようとしている。幾世紀も前に封じ込まれたはずの化け物どもが、光の世界をうろつきはじめているの



だ。この洞窟さえも安全ではない。かたときもナイフを手離せぬ」

神父は言い、サハラに顔を手にあてた。熱はだいぶ下がっている。

「神父様。ご無事で何よりでした」

神父の胸のあたりに、サハラは厚く巻かれた包帯ほうたいを見た。黒い聖衣せいゐの襟元えりもとから、それがことさらに白くサハラの眼を射たのである。

「うかつであった。城つきの兵士どもなら、手なすけることもできた。しかし、やってきたのは異次元の軍隊だったよ。荒々しくゼルダ姫の手をつかみ、それが私にはたまらず、ついおいぼれであることを忘れてしまった。後ろからやられたのだ。すぐに追ったのだが、奴らは空を飛ぶように速かった」

「ゼルダ姫は消えてしまった」

サハラがぼつりとつぶやく。

「いま、剣士の翼の賢人けんじんたちに調べさせている。最後のゼルダ姫が闇の世界へ送り込まれてしまった以上、ここハイラルは滅びゆく運命の地でしかないのか。それとも、まだ何がしかの可能性が残っているものなのか」

神父はサハラに休むように言い、寝台に寝かせた。毛布を胸の上にかけ、カンテラの火を細くする。

「俺は闇の世界への入口に立っていた。極彩色ごくさいしよくの渦巻くカーテンの奥は、大地の裏側のような暗黒だった。アグニムがいた。ゼルダ姫を翻弄ほんろうする者は許せない。俺は頭に血が上った。憎しみから、その場でアグニムを切り裂いてやりたいと思った。しかし、それからの記憶がない。ポールは俺を止めようとしたようだったが……そうだ。ポールはどうした。ポールはどこにいるのです」

サハラがふたたび身を起す。

「闇の世界への入口から吐き出されたのは、おまえひとりだけだった。剣士たちは瀕死ひんしのおまえを抱きかかえ、なんとかここまで運びこんだのだ。闇の入口はさらにその大きさを増し、いまでは城のまるごとを飲み込んでいる。誰も近づくことはできないのだ」

「では、ポールは死んだのか」

「いや。死んではいない。ポールは、闇の世界へと旅立ったはず」

「闇の世界へ……」

「すべてはマスターソードの意志だ。マスターソードはおのれが切り裂くべき魔を求めて勇者を走らせる。すなわちそれは、勇者の意志そのものだ」

ポールは、ゼルダ姫が闇の世界へ落ちたならば、自分も一緒に落ちていけばいいのだ、と言った。地獄へ落ちたならば、ともに地獄を見ればいいのだ、と。しかしサハラはいま、ここにこうして身を横たえている。

「俺たちはどうしたらいいのです」

サハラは、言った。いてもたってもいらぬ気持ちに、答えが欲しかった。

「どうすることもできぬのだ、サハラ。ポールが出す答えをひたすらに待つしかすべはないのだ」

神父は言った。その顔は、暗く沈んでいた。

「俺たちに、すべきことはすでない、と言われるのですか」

ポールは神父を鋭い眼で見つめた。神父に、サハラの気持ちは痛いほどに分かる。何を言えばいいのか、すぐには判断ができず、神父はしばし沈黙した。しかしサハラは、その沈黙を、何かの計算、それも、剣士の翼にあつてはならない、恥知らずなかけひきのある印と見てとった。

「俺たちに、横目よこめで見ている、と言われるのですか。剣士の翼は、闇の世界で戦うその苦しみを、たったひとりポールに負わせようとしておられるのですか！」

「それは違う」

神父も語気ごきを荒げる。

「よく聞くのだ、サハラ。魔王ガノンの封印ふういんは解かれた。我々の力が足りなかつたことの何より明らかだ。悲しく辛いことだが、弁解べんかいの余地よちはなく、素直に認めねばならぬことだ。世界はこれからどのように変貌へんぼうするのか、それは誰にもわからぬ。誰にもわからぬがゆえに、これから先のことは我々が責任を負わねばならぬ。城下には、何千を数える民がいる。たとい滅びゆく運命であ

るにしろ、我々はその民たみの今の生命に責任がある。こちら側に生きて、守らねばならぬ事が、おまえの思う以上にあるのだ」

「きれいごとだ！」

サハラが叫んだ。

「泥棒のいるのは仕方のないことだ。だから、人を疑い鍵をつけよう。殺人者のいるのは仕方のないことだ。だから隠れて生きよう。鍵を売りつける、隠かくれやに案内する、それを俺たちの使命しめいであると言われるのか。剣士の翼はいつから腰ぬけになったのだ。泥棒を除き、殺人者を排除はじきよし、俺たちはそうして今までやってきたのではなかったのですか！」

サハラは両のこぶしおひぢを握りしめた。

「サハスラーは怖気おびけづいたのだ。魔王ガノンの恐怖に、ポールひとりを立ちむかわせようとしているのだ。どちらに転んでも生き延びようとすると、こうもりのかけひきに立ったのだ！」

サハラは、そう言いながら、心の中が空むなしく寒くなつていくのを感じていた。自分が今言っていることは本当ではない。神父の言ったことはきれいごとでもなんでもないことをサハラは確かに知っていたのである。

そして、神父にもまたサハラのような心がわかつていた。神父はポールが落ち着くのを待って、言った。

「サハスラーラの真意はそんなところにはないが、おまえの言うことはもつともである」

サハラが口をはさもつとする。神父がそれをささげさる。

「よい。おまえの言いたいことはわかっている。ただ、これだけは忘れるな。我々、剣士の翼は、いや、ハイラルは、魔王ガノンに抵抗する方法をもちや持たない。すべてはここから出発して考えなければならぬのだ」

そのとき、治癒室の扉が開いた。神父と同じ聖衣をまとつたひとりの青年が入つて来、サハラに一札をし、椅子に座つた神父の前に立つた。

「神父様。ハイリアの預言書よげんしょの一行にこんな言葉を見つけました。捕とらえられし封印の鍵七つ、勇者を待ち、光の世界へ戻されるのを待つ」

「なに。それではゼルダ姫は闇の世界でまだ、生きておられるのか！」

その言葉にまず打たれたのは、サハラであつた。

「確かに、そう読めます」

聖衣の青年が答える。神父はやや興奮して言った。

「魔王ガノンはまだ復活していないということか！」

神父は立ち上がる。そして、青年の持参した古文書こもんじょに素早く眼を走らせた。

「なるほど、マスターソードの意志は、まさにそこにあつたのか。最後の望みをかけて、封印の鍵

を握る六人の娘とゼルダ姫を救出するために、ポールをともなって、マスターソードは闇の世界へ落ちていったのだ。魔王ガノンはまだ完全に復活していない！」

神父は聖衣の青年に向かって言った。

「サハスラーラに伝える。軍のありったけを集めて、闇の世界への入口となった城をかためるのだ。周囲にはびこっている魔物どもを徹底的に排除し、清めるのだ。ポールはいま、闇の世界で、娘たちのために戦っている。封印の娘たちが、いつ、こちらに戻ってくるかわからぬ。魔にふたたび捕らえられ、ふたたび闇に送り返されることのないよう、満を待<sup>まん</sup>て警備するのだ」

聖衣の青年はただちに治癒室<sup>ちゆしつ</sup>を出る。神父もまた、それに合わせて立ち上がった。

「書室<sup>しょしつ</sup>に行く。まだ何か、残されているかもしれない」

「神父様」

急ぐ神父を、サハラは呼び止めた。

「闇の世界へ行く方法は」

神父はサハラをふりかえった。

「それを聞いてどうするのだ」

「それではあるのですね。闇の世界へ行く方法が」

神父は、しばし沈黙し、考えた後にきっぱりと言った。

「ない」

神父は、ふたたび戻り、寝台しんたいに身をおこしているサハラを抱いた。

「つまらぬことを考えるな。闇の世界へ行つてはならぬ。闇の世界へ行つたところで、サハラ。おまえは戦うことはできぬ。闇の世界で戦えるのは、マスターソードが選びし勇者のみ。そして、それはおまえではない。

サハラ。私はおまえの辛いつら気持ちを知っている。おまえの父も、かつて勇者をめざして修行を積み、紋章もんしょうのひとつをも手に入れた男だった。しかし、あえて言う。これは宿命だ。三神さんじんがこの世をつくりし創世そうせいの時より決まっていたことだ。ポールを追うことはあきらめろ。ゼルダ姫を追うことはあきらめろ。闇の世界へ行つてはならぬ。また、行くこともできぬ。今おまえのするべきことは傷を癒いすことだ」。神父はそう言い、サハラを寝台にふたたび押し付けた。神父の言ったことは、サハラがこれまでに幾度いんども考え、幾度も結論を出し、幾度もあきらめ、忘れようとしてきたこととであった。サハラはもう神父を見ず、寝返りを打って壁をただ見つめた。

サハラは泣いた。サハラはついに勇者ではなかった。しかし、悲しみの本質はそこにはなかった。ゼルダ姫のために戦うことは、俺にはついにできなかった。サハラはそれを思つて泣いたのである。

神父は毛布をかぶつて後ろを向いているサハラを残し、治療室を出た。扉を閉める。その奥から

サハラの鳴咽が聞こえた。

神父は、洞窟の一番奥、書室の保管棚ほかんなに安置あんちされている、一枚の歴史ふった鏡のことを考えていた。丸く硬い木の枠わくにはめられた、それは単純な細工の鏡であった。幾世紀も前に磨みがかれた鏡であったが、一点の曇りもなく、輝きはさらに強い。

そしてその鏡の裏には、古代ハイリア文字でこう刻きざまれてあったのだ。『太陽の光を鏡に集めよ。さらば闇の世界への入口は開かれん』

いたずらに闇の世界へ送り、みすみすサハラの命を落とさせてはならない。神父はそう思った。

サハラはサハスラーの孫。サハラはいずれ跡あとを継つぎ、剣士の翼を束たばねる長とならねばならない人間だったのである。



第五章

---

闘いの終焉

ポールは、闇の世界のハイラルに落ちた。闇の世界は光の世界のリバーズであった。地形、それから建造物の位置などは、ハイラルのそれとほとんど変わらないことを、ほんの偶然からポールは知った。

ポールは森の中を歩いていたのである。森に巣くう樹々は、光の世界のものとはよほど違っていた。光のハイラルのそれは、すがすがしい緑色の葉を枝いっぱいにつけ、太い幹が大地から清澄な清水を吸い上げる、すずしい音楽を奏でていた。闇のハイラルの森を歩くポールは、最初、あたり一面に獣の内臓が散りばめられている、と思った。轟き続ける雷鳴は、腹を裂かれた獣たちの断末魔の声のように思えた。

濁りの混じった赤色と、すさまじく毒々しい紫色の肉のかたまりのよつなものが、汚泥が隆起してできたように見える大木に、まるで洪水の去った後のさまざまな漂流物といった有様でひっかかっていたのだ。しかし、それら肉のかたまりのように見えたものは、腸詰のような管で確かにそれぞれが連絡しており、その管の中には、液体が行き来していたのである。確かにひとつの生命体なのだ。ポールは試しにその管を傷つけてみた。濁った液体が途端にほとばしり、胸の悪くなる悪臭がポールを襲った。

暗雲が常にたちこめ、日の差さない闇のハイラルで、それらは不気味に、自ら発光していた。植物と動物の区別は意味がなかった。闇のハイラルの樹木は、意志を持っているかに見えてゆらゆら

と蠢き、その弾力性のある蔓で、時にポールを背後から襲った。

そしてポールはその森に、小さな川を発見したのだ。流れる水はどす黒く、色はまったく違っていた。しかしポールはその小川の、森を分けて流れるその様に見覚えがあったのである。

ポールはあたりを見回した。花を捜したのである。紫色の小さな、鈴の逆立ちしたような可憐な一輪の花。アトラスはあの日、花のために命を落とす覚悟がなければ、花に気をとられてはならぬ、とポールに教えた。ゼルダ姫が夢でポールに手渡したのと同じ花。

そしてポールは見つけたのだ。その花と同じような有様で、そこには、一匹の蛇が鎌首をもたげていた。まったく違う色。まったく違うもの。しかし、眼の前にあるこのかたちだけは、いつか見たあの風景であった。

ポールは走った。足が自然に覚えている。なだらかな坂。岩がくずれ落ちて自然にできた階段。眼をつぶって足の踏みしめる感触だけを追えば、それは、光のハイラルを駆けているのと寸分の違いもなかった。

ポールは発見した。アトラスと暮らした小屋は丸太で組んだ質素な小屋であった。いま、ポールの眼の前にある小屋もまた、丸太を組んでできていた。しかし、その丸太は、あの森が切り出してきたものであることがはっきりと分かって、不気味な色に発光していた。

地図を書けば、まったく同じである。しかし、その内容はまったく違う。広い世界の中、自分ひ

とりが忘れ去られている。見覚えのある風景のかたちが連続するだけに、その寂しさと恐ろしさは、ポールの中でかえって高まったのであった。確かに闇だ。ポールは心の底から恐怖した。

……ポール……

声を何度も聞いた。聞き間違えるはずのない、それはゼルダ姫の声であった。

……助けて、ポール……

ポールはその声に導かれ、闇の世界を漂泊した。ゆく先々に、魔宮はあり、地下迷宮があった。魔獣が巣く、それぞれの主の魔が潜み、アグニムが光の世界から送り込んだ娘たちを幽閉していた。

ポールの兵囊には今、五つのクリスタルが入っていた。手のひらにすっぽり隠れるほどの大きさの、透明な石の棒である。それは、アグニムが光の世界から送り込んだ七人の賢者の血をひく娘たちの魂に受け継がれた、魔王ガノンの封印を解くための波動を結晶させたものであった。

ポールは、クリスタルを奪回し、娘たちを奪回した。娘たちは、闇の世界の緒にからめとられ、苦しみがいていた。ポールがマスターソードでその緒を断ち切れば、娘たちは、たちまち闇の世界の呪縛から解かれ、天空へ吸い上げられて消えていった。娘たちは、その瞬間、微笑んだ。ポールは、それを、光の世界へと戻る証しだと了解した。

しかし、ゼルダ姫は、今まで救出した五人の娘たちの中にはいなかった。ポールはまだ、ゼルダ

姫に会えずにいたのである。導く声は必ずゼルダ姫のものだったが、しかし、そこに待つ娘は、違っていた。

……ポール……

今、ふたたび声がしている。ポールは闇の世界を南へと歩いてきた。太い雨が、横なぐりに降っている。雨のせいばかりでなく、もともと土地がそうなのだろう。足元が眼に見えてあやうく、ポールは時に膝までを泥の中にめりこませながらひたすら歩いた。疲労は重なるだけ重なり、どうしようもなく眠気が襲った。

遠く暗雲に散っていた稲妻が、龍のように空を泳いで、ポールの頭上にとどまった。雷鳴はしつこくポールの鼓膜を破り続け、雷の閃光がポールの前に続く、不気味な沼地の広さをあきらかにして、一層の恐怖を運んだ。

……ポール……

声は右前方から聞こえた。とりつかれたように、ポールはその方向へ足を踏み出す。そこが沼のはじまりと見えて、ポールの足は、すぐにあるはずの抵抗を失って沈み込み、水が腰まで来て、やっとポールの身体は止まった。

どんな植物の異形なのだろうか。沼には一面に蔓らしきものがたくっていた。沼から顔を出した部分の、大蛇の胴体のようなその蔓には、人の手のひらのような葉が茂り、実までつけていた。

実には表皮を透かして脈の走っているのがわかったが、ポールには、それがどうしても、裸の眼球のようにしか見えなかつた。

いきなり、ポールの鼻を動物的な異臭が襲つた。闇に眼をあける。閃光がきらめいたが、ポールは眼前にせまつたその影が何であるのか、一瞬わからなかつた。

沼に潜む猛虫、モルドアームが、餌食を見つけて大きく口を開けていたのである。いくつかの節を身体に持ち、繊毛をうまく使って泳ぐむかでの猛虫、モルドアームは、普段は沼に沈んだ腐敗物を食らつて生きている。ひさびさの新鮮な餌に、興奮しているのだ。

ポールはとつさに、身体を沼に沈めた。上下のあごが閉まつてぶつかるけたたましい音が頭上に響いた。水中でポールは眼をあき、濁りきつた沼の中でもあきらかにそれとわかる、モルドアームの長く巨大な身体が泳いでいくのを見た。

水面に顔を上げる。雨が顔を打つ。深く息を吸い込む。ポールがふりかえれば、そこにあるのは、ふたたび大きく開けられたモルドアームの悪臭を放つ口であつた。

ポールは盾で身をかばつた。それがいけなかつた。モルドアームは身をくねらせると、ポールの、盾を掲げた腕にくらいついたのだ。激痛が走つた。針のついた万力で締めあげられているのと同じことであつた。

——ぐつ！——

ポールは、思わずうめき、そして叫び声をあげ続けた。それは激痛に気を失わぬようにするためであった。マスターソードを握りしめ、ポールはモルドアームの頭部を狙った。しかし、硬い甲に覆われた丸い頭は、マスターソードの切っ先を跳ね返す。落ち着かねば、と思つポールは、かさねて激痛が走る。

腕をくいちぎろうとして身をよじるモルドアームの長い身体に、節目がいくつかあるのをポールは見た。甲羅と甲羅の間は皮薄く、血管が無数に走っている。ポールはマスターソードの切っ先を、その部分に走らせた。切っ先は、たわいもなく食い込み、モルドアームは悲鳴を上げた。

しかし、モルドアームはさらに力をこめてポールの腕にくらいつく。モルドアームの強靱なあごはそのとき、肉を絶つて骨にまでとどいていたかもしれない。血は流れだし、沼の濁り水を赤く染めた。

ポールはがむしゃらにマスターソードを繰り返した。狙うべきところは一箇所である。皮を絶ち、肉へ食い込み、切っ先はモルドアームの血管をずたずたに切り裂いた。そして最後の一振り、モルドアームの頭部は、胴体から鈍い音をたてて切断されたのである。

あごはそれ以上、ポールの腕に食い込むのをやめた。ポールは、しかし、慎重に自分の腕を、モルドアームの口から離さねばならなかった。モルドアームの針のような歯が、数本、腕の中に残った。ポールは痛みをこらえ、それを一本一本、丁寧に抜いた。

ふたたび同じ怪物が襲って来る可能性に、ポールは背筋が寒くなった。水の中には危険である。漂流する大木でもいい。何かないかと見回した。ポールの眼に、岡のようなものが見えた。ポールは傷ついた腕をかばって泳ぎ、その岡のような場所に上陸した。

それは岡ではなかった。何者かが建設した中の島であった。巨石を積み上げて造ったものだ。このひどい沼地に足場をかためるために、どれくらいの量の石を必要としただろう。それを考えると、激しい雨に浮かび上がった神殿への入口を見つけたポールは、ここが単なる中の島ではないことを発見し、さらに気が遠くなった。

ポールは、この神殿の中でふたたび味わうだろう戦いの苦しさを予感した。しかし、今は、ただひたすらに眠りたかったのである。モルドアームが襲って来る心配は、今はない。ポールは傷ついた腕をおさえ、静かに眼を閉じた。

そしてポールは、そこでふたたび、あの泉の夢。妖精の夢を見たのである。ポールの傷は治癒された。

\*

闇の世界への入口と化した城は、粘液状の透明な物質にすっぽりと覆われて、サハスラーラの軍隊の前にある。異空間同士がここで出会っている。闇の世界と光の世界がぶつかり合い、二つの世



界のエネルギーが交換され、変換され、あつれきから生まれた稲妻が、糸くずのように、城にまわりつく。空間は歪み、光が屈曲して、万化の色彩の変化を見せた。まるで巨大な万華鏡を覗いてでもいるかのようだ。

闇の世界の入口からこぼれた、異界の魔獣たちは、サハスラーラの軍隊の壁をしつこく削る。豚の顔を持つスピア使いの闇兵士・モリブリンと、モリブリンに指令を与える将校級のタロスなどから構成される魔獣軍で、軍力としてはさほど強力なものではなかったが、ゲリラ的に、サハスラーラの軍隊を執拗に攻めた。外濠の剣士たちをひとりずつ倒し、中央へと少しずつ侵食していくのである。

サハスラーラの軍隊が最も手を焼いたのは、魔獣軍がときになったガブラという小魔獣であった。鋭い歯を無数につけた、いわば口そのものに足のはえたような魔獣であり、それは、身体が小さいだけにどこにでも侵入してくることができ、軍隊を大いに苦しめた。出会うもの見境なく噛みくだこうとするガブラの攻撃は、致命傷には至らないが、戦意を消失させるに十分な深い傷を剣士に与えた。

しかし、とあるきつかけから、ガブラは恐るに足らなくなった。カカリコの村では毎秋の収穫の際に、腹をすかせた鼠に悩んできたが、その鼠から穀物を守るために発明された金網製の罠が、ガブラを駆逐するのに意外な効果のあることがわかったからである。

異界の魔獣たちは、一匹倒されるならば、すぐにまた一匹、闇の世界から補充されてくる。気の遠くなるような自転車操業そとうじやうだったが、サハスラーラの軍隊はねばり強く戦った。闇の世界への入口を開く、という知らせは一夜にしてアウトドメインを駆け巡った。サハスラーラの軍隊は魔獣の攻撃をうけて確実にその数を減らしていったが、その分、アウトドメインから応援の剣士たちが駆けつけもした。ガノン復活は、すでにハイラル城下だけの問題ではないことをみな、感じたのだ。中にはあらぬ野望を抱いて城へかけつける野盗やとうどももないではなかったが、しかし、眼の前に広がる闇の世界への入口の、すさまじく凶暴きようぼうな様子を眼にして怖気おびけづき、ただちに引き返していった。

闇の世界の入口から次々に吐き出されてきた五人の娘たちは、ただちに保護され、東の神殿を見おろす山の中腹、剣士の翼の隠れ要塞ようさいである、洞窟どうくつへとかくまわれた。娘たちは、何の変哲へんてつもない、ごく普通の娘たちであった。粉挽こなひき屋の娘であったり、宿屋やどやに働くみなし子であったりした。この娘たちが、七人の賢者たちの血をひく者であるかどうかしてわかったのか、剣士の翼の知識陣ちしきじんは首をひねった。アグニムの、予想もつかない知力の深さが伺うかがえたのである。

「その宮殿の主は、巨大なサソリの魔獣でした。鉄仮面てつかめんを被かぶり、眼だけが北極星のように冷たく光っていました」

ある娘はこう言った。

「ジロックです」

知識陣のひとり、聖衣を着た青年が口をはさむ。

「東の神殿のリバース、闇の神殿に巣くう魔獣王です」

青年は、ハイリアの古文書こもんじょに描かれたジローロックの異形いぎようを、サハスラーラと神父に差し示した。娘は顔をそむけた。

洞窟の書室では、闇の世界がんせかいの分析が進められていた。サハスラーラと神父を中心に、生還せいがんした娘たちの記憶をもとに、闇の世界の状況を正確に把握はあくしようとしていた。そして、歴史を克明こくめいに記録して後世こうせいに伝えるのは、その時代の知識を司つかさどる聖職せいしやくしや者たちの使命しめいでもあったのである。

「魔獣は、わたしを姫と呼びました。わたしはその声を聞いて、背筋が寒くなり、また、深い悲しみに落ちたのです」

娘はまだ恐怖からは完全にはなれてはならず、それは、膝ひざの上に握った白いハンカチが激しくふるえているのを見れば、瞭然りょうぜんであった。

「聞いたことのある声でした。聞いたことがあるどころか、それは毎晩夢の中で必ず聞く声だったのです。優しく美しい青年でした。今いまは貧しいが、あなたはきつと姫となるべき人である。姫。そのときは、私が迎えにきます。私の髪をなでながら、青年はそう言いました。ああ、あの声。なんとということでしょう」

娘は泣き崩くずれた。娘の一句一句のすべてを書き留めていた、書記役しきやくの青年の手がとまった。なん

と残酷な策略だろ。青年は怒りに、筆を折り砕いた。

娘たちは、喜々としてアグニムのもとに集まったに違いない。姫として迎え入れられる。そして、夢の中の、おそらくは娘たちが恋に落ちた美しい青年に会える。娘たちは知らせをうけ、自分からアグニムのもとへいくことを望んだのだ。誘拐されたのではない。娘たちの中には家族のいる者もいたが、その家族から訴えのひとつもなかったのは、そのためであろう。

そして、事実、娘たちは姫として迎え入れられた。しかしそれは、ムカデやサソリ、毒グモや毒トカゲのはびこる、暗闇の世界の姫であり、夢の中で美しかった青年は、娘たちの心を裏切って、いとも簡単に化け物に姿を変えたのだ。

「魔王ガノンに会ったか」

サハスラーが尋ねる。質問はつまるところ、そこへと向かった。

「いいえ。会うことなく、ポール様に助け出されました。感謝しています。あれ以上に恐ろしい魔物の顔など、わたしは見ただけで死んでしまったでしょう」

ポールの闇の世界での侵攻は、いまのところうまくいっているように思えた。間一髪のところでは危機をすりぬけた、それだけのことにすぎないかもしれないが、とにかく魔王ガノンのもとへつれていかれた娘はまだなかった。

「宮殿の化け物がわたしに、銀の髪飾りをはずすように言いました。なぜ、と問い返すと、これか

らガノン様のところへ連れていく、と言いました。そしてそのあとすぐだったのです。化け物は宙をにらんで倒れ、そこにはポール様が剣を手に立っておられたのです」

「銀？ なぜ銀の髪飾りをはさず必要があるのだ」

サハスラーが尋ねる。

「ガノン様は銀がお嫌いだ、と化け物は言い、無理やりわたしの髪からむしりとったのです。銀の髪飾りはくだけ、宮殿の床に粉になって散らばりました」

「銀……」

神父がつぶやいた。

「そうか。銀か！」

神父が叫んだ。神父はふりかえり、後ろに控えていた聖衣の青年に伝えた。

「城の軍隊に、何でもいい。銀のものを身につけるよう伝えろ。焼石に水かもしれんが、闇の溶け出す速度を少しでも抑えることができるかもしれん」

神父はいきいきと動いた。書室のかたすみの作業台で古文書を調べるにあたっていた青年たちに続けてこう言った。

「封印戦争の記録をあたれ。兵器目録だ。ハイリアの騎士団がガノンの侵攻を食い止めるために、どんな武器を使ったのか調べるんだ。細かくやれ。甲鎧ひとつひとつの素材まで、調べられるだ

け、調べろ」

神父は、胸の前に両手を組んだ。天に向かって聖なる言葉をひとつ、口にした。

「サハスラーラ殿。打つ手が見つかるとも、万一ポールが倒れ、魔王ガノンがああの世界の入口から顔を出したとしても、我々の手でもついちど、封印することが出来るかもしれん」

「ありました」

古文書こもんじよにあたっていた青年のひとりが叫んだ。

「読め。銀のものはあるか」

「あります。目録の筆頭ひつとうに、銀の矢・百つがえ。ガノンの動きを止めるのに唯一ゆいいつ有効ゆうこうなり、と但しただし書きががあります」

「よし。すぐに準備するんだ。食器たぐいの類、教会のろうそく台、すべてを溶かして銀の矢を打ち出せ」

神父の声をうけて、書室から数人の足音が飛び出していく。洞窟どうくつはにわかわかに活気かつきづいた。

「ポールは気づいているだろうか」

サハスラーラが言った。

「おそらく。マスターソードは、それを手にする勇者に知恵をも与える剣。ポールは先刻承知せんこくしやうちの  
はずです」

「ならば、いいが……」

サハスラーラの胸に、しかし不安は晴れなかった。重苦しく胸につかえるものがある。

そしてサハスラーラの不安は、本物であった。魔王ガノンをしとめるために、銀の矢が必要であること。ポールはそれを確かに知ってはいた。しかし、ポールに、ガノン打倒の決めてとなる銀の矢を手にすることは不可能だったのである。

闇の世界に、銀を組成する物質は存在しなかった。銀は、娘たちが持ち込んだ、ほんのわずかな量以外、ひとかけらも存在しなかったのである。髪飾りくらいの量では、銀の矢を作成することはできなかった。

闇の世界はガノンがトライフォースの力を借りて、みずからつくりだした世界である。なぜガノンが銀を嫌うのか、それはわからない。銀が発信する波動が神経を狂わせるのかもしれない。世には水を嫌い、水にふれただけで死にいたる者もいる。きわめて珍しい生命の質だが、ガノンにとって、銀がそれであったのかもしれない。とにかくガノンは銀をきらい、すべての希望をかなえるトライフォースに、銀なき世界を望んだのである。古代ハイリア人は、神のお告げからそれを知り、銀の矢を用意したにすぎなかった。

「またひとり、生還しました！」

書室の扉がけたたましい音をたてて開き、ひとりの剣士が飛び込んできた。後につづいた二人の

剣士に、一人の娘が抱きかかえられている。

粘液質の物質に、頭の中からつま先までよごれ濡れている。金色の髪が肌にはりつき、体温を奪われていくその気味悪さに、娘は全身をふるわせていた。

そして、その娘はゼルダ姫ではなかった。

\*

ポールは、六つめのクリスタルを手にいれた。沼の神殿に巣くっていた魔獣王は、ポールとマスターソードの前に、敵ではなかった。むしろ、たやすい相手だったと言っている。

沼の神殿の最も奥。魔獣王の潜むべき間の扉を開け放ったとき、確かにポールはめんくらった。巨大な無数の目玉が、ポールをにらんでいたからである。ゲルドーガと呼ばれるその魔獣王は、奥の間の天井にまでいたる不気味な泡のかたまりの中、ぬめぬめと動き、瞳をぎらつかせていた。

ひとつの目玉がふいに飛び出し、ポールの眼前にしまった。しかし、それはポールの顔ぎりぎりで急カーブを描き、もとの泡の海へと戻って行くのである。攻撃する風も見せない。ポールは、敵のふところに入って犯す危険を考え、じっとその場に立ってゲルドーガの出方を見た。ふたたび、目玉がせまったときに、ポールはマスターソードで、それを両断した。目玉は、あっけなく床に落ち、その体液を飛び散らした。



残った目玉の攻撃も単調で、ポールはほとんどその場を動かずに、ゲルドーガの本体であった、直径がポールの背丈ほどもある眼球を斬って捨てることができたのである。クリスタルは泡の海中に落ちていた。闇の世界の緒を断つてやると、捕らえられていた娘は、今までとまったく同じように瞬間微笑み、天空へと消えていった。

闇のハイラルの、最北端の辺境。アウトドメインとの最も険しい境界である山脈、デス・マウンテンの頂上に、ポールは今、立っている。空にさらに近いデス・マウンテンは、暗雲が舞い飛ぶ、雷鳴の嵐のまっただ中である。頭上に黒雲があり、頭上に稲妻が走るのではない。時に眼下に黒雲は走り、時にわき腹をきりさく剣のように、身体のすぐ横を稲妻が飛び過ぎるのだ。

ゼルダ姫は、ポールをついにここへ導いた。いままで救出した娘たちの中にはゼルダ姫はいなかった。この、デス・マウンテンに、ゼルダ姫は捕らえられているのである。

ポールの眼の前に、激しい雨のしぶきの中、稲妻の閃光に、巨大な岩山が浮かび上がった。デス・マウンテンの頂上にあつて、さらにその海拔を高くしている。

その岩山は、玄武と呼ばれる幻獣そのままの形をしていた。たてがみと牙をもつ、亀の猛々しい異形である。龍のそれであるような、鞭のような尾が波うって稲妻を導いていた。もたげた首に、二本の牙が地をさして伸び、滝のような雨の流れを落としていた。

ポールは岩山によじ登り、甲羅が最も隆起している部分に立った。雲海というには、あまりに

も重苦しすぎる風景が眼下に広がった。密度の高い風が四方から飛び込み、その摩擦で、電氣の花が、蓮の花のように咲いては閉じる。

……シエイクの呪文を！……

ゼルダ姫の声である。シエイクは、ハイリアの一系に伝わる、地震系の魔法であった。ゼルダ姫は、その血の中に眠るハイリア人としての知恵のありたけを掘り起こし、ポールに伝送しているのである。

ポールは、頭の中に届くゼルダ姫の言葉の逐一を追った。

——ハイリア人の魂よ。くずれるべき大地をくずせ！——

そして、ポールはそう叫び、マスターソードを玄武の、甲羅の最も高い部分に突き刺したのである。

大地は揺れ、従ってデス・マウンテンは揺れた。玄武の形をした岩山は、まるで生命を得たかのように激しく身をふるわせた。たてがみを持ち、牙さえはやしたその首は、苦しみにもがき、二、三度、いやいやをするように揺れ、そしてついにその首は根元からくずれ落ちた。

みずからが呼び起こした地震はおさまり、足元確かに立ち上がった。ポールは、玄武の首のあった場所をしかと見た。深く暗い縦穴が、ポールを飲み込むのを待って、大きな口を開けていたのである。

「ゼルダ姫。あなたは確かにここに居るのか」

時になえそうになる心はどうにか奮ふるいたたせ、ポールは進んだ。呼吸せきさえおぼつかない、狭せまく暗い地下洞窟どうくつへ身を投じた。

……感じます。ポール。あなたが近づいているのを！……

地下洞窟を進むたび、ゼルダ姫の聲が、ポールの頭の中で、大きくなっていく。それはポールに、このうえない勇気を与えた。

「ゼルダ姫は僕を待っている！」

いまこの時に、自分を必要としている人がいる。その喜びは何にも増して大きく、全身の疲労ひろうを癒いやした。地下洞窟どうくつに巣すくう小魔獣など、ポールの眼には入らなかった。頭にはゼルダ姫の声だけが鳴り響き、眼の前に次々に現れる小魔獣に対しては、自然に腕が動いた。マスターソードはひたすらに化け物どもを斬きり続け、異界いかいの獣たちの色とりどりの血で濡ぬれた。

……来てはいけない！……

その声は突然だった。助けて。私はここです。ポール、あなたが近づくのを感かじています。早く！ 頭の中にあふれかえっているゼルダ姫のその声をまるで断たち切るかのような、鋭い声だった。確かにそれはゼルダ姫の聲に違いなかったが、ポールをここまで導いたその声とはずいぶん調子が違っていたのだ。

……来てはいけない！……

「なぜです！」

ポールは地下洞窟の暗闇くらやみに向かって叫んだ。しかし、鋭く訴えるその声は、ただ繰り返し、来てはいけない、と叫ぶだけであった。

……あなたを近くに感じる……

……来てはいけない！……

……早く。助けて、ポール……

ポールの頭は混乱した。混乱した頭のまま、ポールは地下洞窟を進み続けた。来てはいけない。それがどういう意味であったとしても、ポールにはもはや進むしかすべはなかったのである。地下洞窟の天井はポールの背後に、次々とくずれ落ち、退路たいろを塞いでいったのだ。

そして、ついにひとつの扉がポールの前に姿を見せたのである。左右に魔人像を置く、石の扉であった。魔人像は、それぞれの手にかがり火を持ち、扉に彫ほられた異界の化け物の顔の細工を浮かび上がらせた。

……わたしは、ここです……

……来てはいけない！……

……扉は開いている。はやく来て、ポール……

……扉を開けてはいけない！……

……来てはいけない！……

最後にポールの頭を占めたのは、ならぬ、と叫ぶ方のゼルダ姫の声であった。しかし、その声に従うには遅すぎた。ポールの前で、扉は自然に開いたのである。暗闇になれたポールの眼を、おびただしい量の光が襲った。

「ようこそ」

誰の声だろう。眼がくらんだポールには、その声の主がにわかにはわからなかった。しかし、その声は、忘れようにも忘れられぬ響きを持っていたのである。

「アグニム！」

ポールは叫んだ。光になればはじめたポールの眼に、暗黒のローブを身にまとったアグニムの姿が映った。青あざに隅どられた眼は、さらにつり上がり、目は野望の激しさに切れて血が流れていた。そして、おびただしく光のあふれるこの広間の奥に、もうひとつ、忘れられぬ声を聞いたのである。

「ポール！」

長きにわたって、焦がれ続けた声だった。頭の中からではなく、いま、ポールはその耳で愛しい声を聞いた。ゼルダ姫は、アグニムの後ろ、一段上がった祭壇に、闇の世界の緒にからめとられて

いた。

「わたしの声は届かなかった。あなたに、ついに届かなかった。ポール、どうして来てしまったのです！」

ポールはすべてを了解した。間際まぎわにきて、来てはいけなないと叫んだあの声こそ、正真正銘しょうしんしょうめい、ゼルダ姫の声だったのである。しかし、たといポールがそれに気づいたとしても、もはや遅かったのだ。ポールはそのとき、すでに地下洞窟の一方通行にいたのである。

それでは、ここへ導いたあの声は何だったのか。ゼルダ姫でなかったとすれば、誰の声だったのか。その声の主に思いあたるとき、ポールは徹底的な屈辱くつじよくかん感かんを覚え、唇くちびるをおもわず嚙かんだのであった。

「ご苦労だった。クリスタルを渡してもらおうか」

アグニムが言った。その手には、ゼルダ姫の魂たましいの波動はどうを結晶けつしょうさせた、最後のクリスタル、七つめのクリスタルが輝いていた。

「愚おろかよの。ゼルダ姫にこだわって、きさまは本道ほんどうを忘れ去った。勇者などとは言っても、所詮しよせんはそんなものだ。俺の野望のために、ここへ六つのクリスタルを抱かかえて入った、きさまは単なる運び屋にすぎぬ！」

「おのれ！」

度を越えた侮辱ぶじよくであつた。ポールは我を忘れ、アグニムに斬りかかつていた。マスターソードは鋭く輝き、肩口かたぐちからけさがけにアグニムを斬り捨てた、と思つた瞬間、ポールの眼の前から、黒いローブのその姿が消えていた。

必要以上に装飾の多い、儀式のためのローブに身をつつんだアグニムは、そのふくれあがつて動きにくそうな様からは考えられぬ素早すばやさで飛び上がったのだ。ポールがふたたびマスターソードを構えたとき、アグニムは広間の、ポールから最も遠い場所に着地ちやくちした。まるで巨大なふくろうが、枝を渡つたようであつた。

——ハッ！——

長いローブをたぐつて両腕をまくりあげ、アグニムは気合いととも、両の手のひらを突き出した。その瞬間、ポールの全身に、電撃でんげきが走つた。背骨を鋭い痛みが貫つらぬき、ポールはたまらずその場に倒れた。

「犬のように死ね！」

アグニムは、すかさず次のスペルを唱える。まるでその手に透明な弓をかまえ矢をつがえたような仕草しぐさをとり、ふたたび気合いをかけた。

——ハッ！——

ポールは冷たく硬い敷石しきいしを転ころがり、からくも、よける。アグニムの左手から、光の散弾さんだんがほとば

しり、ポールが倒れていた場所に、ばらばらと降る。灼熱の散弾だ。石には、散弾が降った通りに穴があき、赤く燃えて溶けた。

ポールは立ち上がり、壁に身をよせた。ポールの全身から、少しずつ電撃が抜け落ちる。手足の先にしびれが残ったが、致命的ではない。幾度かふりほぐすうちに、そのしびれも落ちた。

アグニムは次々にスペルを放った。スペルの種類と、そして、アグニムが両腕でかたちづくる印の組合せで、幾種類かの攻撃魔法が生まれる。いかづちの電撃。光の散弾の灼熱波。白い光の大きな玉は、おそらく神経への衝撃弾だ。

ポールは間髪でアグニムのスペルをかわし、広間を移動していく。矢をつがえる隙はないだろう。どうあっても、マスターソードの切っ先の届くまで、アグニムに接近しなければならなかった。

「もっと来い。近づいて、私の身体を斬り刻め！」

アグニムは声高く笑った。ポールがとった作戦は危険を大きくはらんでいたのである。アグニムに近づくことは、アグニムのスペルにとつて、的を大きくし、攻撃効率を勢い高める結果となるからだ。事実、ポールは間断なく放たれるアグニムのスペルを盾でかわさねばならない事態に陥っていた。盾は、スペルの効力を幾分、弱めるに役だっただけであり、完璧な防壁にはならない。ポールは、スペルによる打撃が全身に、眼に見えて蓄積されていくのを感じていた。



そして、もう一步の歩みもできぬほどにポールの身体が衰弱すいじやくしたとき、マスターソードはポールに、重大な知恵を授けたのである。アグニムはポールを壁ぎわに追い込み、そして、衝撃弾のスペルを放った。白い大きな光の玉が宙を飛び、それはまっすぐにポールの身体めがけて走った。ポールは最期を覚悟し、盾たてを捨て、マスターソードを胸の前に掲かかげた。このスペルの一撃で自分が倒れることがなければ、この一撃にかけよう、とポールは思ったのだ。スペルの攻撃に真正まじょうめん面から突っ込み、アグニムと差さし違ちがえる決心をしたのである。

衝撃弾が襲うその瞬間、ポールは眼をつぶった。しかし、予想した痛みはついにやってこなかった。マスターソードが一瞬輝き、衝撃弾の光の玉をはじき返したのである。はじき返された光の玉は、その手から放たれた時の勢いを失わず、アグニムに向かってまっすぐに飛んだ。アグニムは素早く横に飛んでよけたが、その一瞬の動揺どうようを、ポールは見逃さなかつたのである。

……武器にとらわれた防衛を見せたならば、いましめの傷をひとつつけるつもりであつた……  
ポールはそのとき、師匠ししょう・アトラスの言葉を思いだしたのだ。勝てる。ポールは直感ちよつかんした。

ポールはそれ以上アグニムに近づくことなく、一定の距離を保ちながら、広間を横へ横へ移動した。移動しながら、ポールは全身に気をため込んだ。上半身に力がみなぎるのがわかつた。その力はポールの両腕をつたい、マスターソードにとどき、その切っ先から、ひとしずくの光となつてしただり落ちた。

アグニムが裸の両腕を頭上に掲げた。最強のスペルを放つつもりだ、とポールは思った。

……放つがいい。何者もあらがうことのできない最強のスペルをいまこそ、放て！……

ポールは心の中で叫んだ。

——ハッ！——

アグニムがひときわ強い気合いをこめ、両腕を前に突き出した。アグニムの手は光に溶け、そこから、ポールめがけてまっすぐに光の洪水が打ち出された。

「そして、おのれの最強のスペルで、きさまは死ぬのだ！」

ポールは叫び、マスターソードを握る手に力をこめ、全身を回転させた。マスターソードの切っ先に光が宿り、正確に円を描いた。太陽のそのように光は厚く、マスターソードが描く円は空気を裂いて炎さえあげ、そして最強のスペルを、正確に、アグニムめがけてはじき返したのである。

——ブン……——

まるで馬が鼻から息を抜くような、そんな単純な音であった。全身の回転をとめたポールは、見た。スペルはまっすぐにアグニムをおそった。スペルの破壊力はその暗黒のローブの胸の部分に、大きな穴をぽかりと開けた。穴の向こうには、壁の細工さえ見てとることができた。

アグニムの顔が苦しみに歪んだ。しかし、その歪みは少しずつ、不気味な笑い顔の歪みに変わったのである。

——クッククック……——

アグニムはおかしくてたまらぬ、という風に喉をならした。

——フツ。……ハッハッハッハ——

アグニムはついに大きな声で笑い出した。どうしたのだ。とどめはさしたはずである。しかしポールは、そのアグニムの様子に確信がもてず、ふたたびマスターソードを上段に構えた。

「ポールよ。私を倒したところでもはや意味のないことに気がついているのか。私は死ぬ。そして、私にとってさえ、もはや私の死に意味はない。私の悲願は達成されたのだ」

アグニムは、一度、胸に開いた巨大な穴を見つめてにやりと笑うと、ふたたび顔を上げた。アグニムは、倒れはしなかった。その場に立ち続け、七つめのクリスタルを手にし、それを頭上に掲げた。

「蘇れ、魔王ガノン！ 魔王ガノンの前にあるのは、すべての生命、すべての希望、すべての愛、すべての夢の死だ！」

アグニムの手の中で、クリスタルが光に満ちた。それに呼応するように、ポールの兵囊の中におさめられている六つのクリスタルもまた輝いたのである。

ポールの足元がぐらりと揺れた。一瞬おさまり、そして、ふたたび大きく揺れ始めたのは、まるでシケの海原のようであった。

「ポール！」

ゼルダ姫が叫んだ。ポールは走った。ゼルダ姫をからめとっている闇の世界の緒を断たねばならぬ。

ポールは天井の石組みがばらばらとくずれ落ちる中、マスターソードを降り下ろし続けた。闇の世界の緒の根を断つ。ついに、緒はゼルダ姫の足元にはらばらになって散らばり、ゼルダ姫はその身を自由にし、光の世界へ通じている次元のほころびへ吸い込まれていくように見えた。

しかし、そのとき、ゼルダ姫を吸い上げる光の帯の途中を、巨大な影が遮ったのである。それはひとつの手であった。鱗に覆われていると見えて、光を複雑に照り返していた。毛は馬にあたる飼葉のようにずるりと伸び、剣士の盾ほどもある爪が、五本の指に、鋭くとがって生えていた。手は、いとも簡単にゼルダ姫をつかみ、そして、天井をつきやぶって飛びさったのである。

まだ揺れのおさまらぬ中、天井に開けられた大きな穴をポールは放心して見つめた。暗雲はいよいよ激しく、デス・マウンテンを包み込んでいるようであった。闇の世界に満ちた毒気は、デス・マウンテンめがけて立ち上っていた。天井の穴から吹き込む、毒々しい紫色の雨がその証しであった。

ポールは膝をがくりと落とし、紫色の毒雨を全身に浴びていた。おそらくは魔王ガノンのもの、巨大な手がゼルダ姫を連れさった天井の穴を見上げ、左手を伸ばした。



「ついにゼルダ姫に届かぬのか!」

毒雨は、アグニムとの戦闘で負った全身の傷へ容赦なく染み込んでいった。次の瞬間にポールが頭からその場に倒れ込んだのは、その雨の毒のためと、そして、深い絶望からであった。

\*

サハラは傷はなかなか癒えなかった。アグニムが放った眠りの魔法は、サハラの右足に、致命的なマヒを残したのである。

……銀の矢をポールに……

神父に処方された薬草による浅い眠りの中で、サハラは声を聞いた。眠りの中で、その声は口元から像を結び、ひとりの少女の顔を結んだ。

「ゼルダ姫!」

サハラは、はね起きた。夢であった。しかし、その中で聞いた声は確かにゼルダ姫の声であった。一瞬見た顔は、サハラがいままで眼にしたこともない、姫の苦しい顔であった。

サハラは額に流れる汗を拭った。銀の矢をポールに。姫はそう言われた。サハラは、枕元に整然とおかれた革の甲鎧をとり、寝着の上に巻いた。そして、壁にかけられた盾を腕にとめ、細身の剣を腰にはき、サハラは動かぬ右足をひきずって治療室を出たのである。

洞窟の指令室では、あわただしく人が動いていた。書室<sup>しよじつ</sup>ですべきことはもはやなく、サハスラーも神父もここについて、軍に指令を与えていた。

カカリコの村にあるだけの銀器の類<sup>たぐい</sup>は、すべて洞窟に運ばれた。それらは、鍛冶室<sup>かじしつ</sup>で溶かされ、伸ばされ、古文書の記録にある通りの寸法の矢に鍛え<sup>きた</sup>られた。指令室には、次々に出来上がる銀の矢が、山のように積まれ、弓に覚えのある剣士たちの手に、渡されていった。

ハイラルの城はいま、銀の矢をつがえた弓をもつ剣士たちに、ぐるりを取り囲まれていた。闇の世界への入口となった城から、ついに、毒気のたつまきが噴き出される事態<sup>おちい</sup>に陥<sup>おちい</sup>っていたのである。緑の森は葉のことごとくを落とし、水には人を殺す成分が混じった。

六人めの娘が生還<sup>せいかん</sup>してから、ずいぶんの間が空いた。ゼルダ姫はいつ戻るのか。その不安は、いっしあきらめに変わった。魔王ガノンは今もつぐここハイラルに姿を現す。誰もがそれを確信し、恐怖に打ちふるえていた。剣士の翼の洞窟から支給される銀の矢にわずかな望みをかけ、かうじて理性<sup>りせい</sup>と秩序<sup>ちつじよ</sup>は保たれていたのである。

「サハラ……」

指令室のあわただしい人ごみの中に、サハスラーは孫の姿を見つけたのであった。右足をひきずり、ゆっくりと近づいて来るその姿はかぼそく悲しく見えた。サハラの右足は治<sup>なお</sup>ることはあるま

い。神経がすべて切れている。サハスラーは神父から、そう聞かされていたのである。

まわりの激しい人の動きの中で、サハラは夢遊病者むゆうびょうしゃのように見えた。放心ほうしんしたよつなその表情は、昏睡草こんすいそうのせいかもしれないなかった。サハスラーはたまらず孫のもとにかけより、その身を抱いた。

「サハラ。治療室に戻るのだ」

サハスラーは言った。サハラは、抱きかかえられたその肩かたすみごしに、洞窟の指令室の片隅かたすみに積み上げられた銀色の山を見た。

「銀の矢……」

サハラがつぶやく。その声は、こおろぎの羽づくろいのように小さかった。

「そうだ。銀の矢だ。我らの最後の頼りだ」

そう言ったサハスラーの胸からのがれ、サハラはゆっくりと、指令室を歩いた。

「銀の矢だ！」

そう叫んだサハラは、銀色の山に群がる人波をかきわけ、その矢のひとたばをつかみとった。サハラは、いまはつきりと眼が覚めたのである。そして、ゼルダ姫が夢の中で言った言葉を正しく了解したのだ。

サハスラーはサハラの気が狂った、と思った。あわてて孫のもとに駆け寄り、肩に手をかけ



る。ふりむいたその顔は、しかし、これ以上はりつめることはないであろうと思われるくらいの気の光をその眼に蓄たくわえていた。

「ゼルダ姫の声を聞いた。銀の矢を求めている」

サハラが言う。

「サハスラーラ。俺を闇の世界へ送ってくれ」

「何を言うのだ」

サハラは、つかんだ銀の矢のひとたばを、背にしっかりとくくりつけた。

「神父様に聞いた。闇の世界へ行く方法があるはずだ」

「そんな方法はない。我々は、闇の世界へは決して行けない」

「嘘うそだ！」

サハラは語ご気を荒あげた。

「頼みます。サハスラーラ。ゼルダ姫とポールが待っているのだ」

「たとい闇の世界へ飛べたとしても、我々は戦うことはできぬ。つまらぬ考えを起こすな」

サハスラーラは、サハラの腕うでを握にぎりしめた。たったひとりの孫を失う悲しみを、サハスラーラは予感よかんしたのだ。

「見殺みじろしになさるおつもりか！」

「違っ!」

「頼まぬ!」

サハラはサハスラーラの手をふりはらい、指令室しれいしつを出る。サハスラーラは人ごみの中に消えていく。サハラの後ろ姿を見送った。サハスラーラは、そのとき孫の死を覚悟したのである。

走る剣士たちの肩にぶつかり、時にサハラは通路に倒れた。剣を杖つえに起き上がり、城へ向かうために洞窟へ出て行く剣士たちの波に逆らって進む。

「神父様はどこだ」

サハラはゆく人ごみに尋ねる。

「ふたたび書室しよしつに」

声が返る。サハラは角を曲がり、書室へと向かった。

神父はたったひとり、書室に戻っていた。知識陣ちしきじんの誰にも見せることのなかった、気になる最後さいごの預言書よげんしょが一卷、残っていたからである。頁ページに鍵をかけ、その鍵を神父は、湯浴ゆあみするときでさえその身から離すことはなかった。

書庫しよこの最も奥に眠っていた古文書こもんじよ一卷のほとんどを解読し終えた神父のその顔は青ざめていた。

古文書によれば、城からたちのぼっている毒気の竜巻は、一日を待たずして、ハイラルのすべてを飲み込む。だとすれば、いま準備している銀の矢などは何の意味もたぬことになる。魔王ガノンがハイラルに現れるそのときには、すでに我々はこの世にいないのだ。サハスラーに告げるべきだろうか。みなに伝え、最後の時を、尊厳そげんに満ちて迎えるよう説教すべきだろうか。神父は頭をかかえた。

いや。沈黙すべきだ。神父がそう決心し、ふたたび顔を上げると、そこに、剣が鈍く輝いてあった。サハラであった。

「闇の世界へ行く」

サハラは言った。

「本気か」

「本気だ」

サハラは、剣を神父の首筋にぴたりとあてた。血を流させても、闇の世界へ飛ぶその方法を聞き出す決心であった。

「脅迫きようはくの必要はない」

神父はそう言い、サハラの剣を手で軽くおさえ、首筋が傷つくのもいとわず、椅子から立ち上がった。サハラは、神父の意外な振舞ふるまいに、剣を引くことさえ忘れた。

神父は、棚の鍵を開け、一枚の鏡を取り出し、サハラのもとへ戻ったのである。

「太陽の光をこの鏡に集め、闇の世界への入口に照射するのだ」

神父はその古びた鏡の一枚を、今はもう迷うことなくサハラに差し出したのであった。

「神父様。感謝します」

サハラは鏡をふところに仕舞い、神父を深く抱いた。神父もまた、サハラを抱き返し、互いに涙で濡れた頬を合わせ、別れの流儀をかわした。

サハラは神父に背を向け、書室を出ていく。歩きながら、おそらくこれが最後であろう洞窟の風景を見回した。

回廊にサハスラーが立っていた。一言も言葉をかわず、二人は抱き合った。サハラは、あのときの妖精の言葉を思いだしたのである。勇気の紋章を手にした東の神殿で出会った夢の妖精の言葉である。あなたの命を必要とする者が現れる。命を移す術を授けよう。そのときに、私を再び呼べ。妖精は確かにそう言ったのだった。

「サハラは、真に最後の綱であるかもしれぬ」

神父は書室の灯を落とし、その暗がりの中に立っていた。

そして、神父のその予感はあるかなことであつた。いまだすべての解説が終わらぬ預言書の、神父

も知らぬ最後の一行にはこうあったのだ。『まことハイラルを救う者は、片足の剣士である』

＊

ガノンは想像を絶した異形いぎようであった。もとは魔盜賊首領ガノンドロフ。悪に染そまったとはいえず、血も心もある、一介いっかいの野盜やとうだつたはずである。しかし、デス・マウンテンに隆りゆうき起した魔王の巢、ガノンタワーに鎮座ちんざしたそれは、まず、生物を超えていた。巨大であることがその理由ではない。意志のあるさえわからない、底知れぬ残酷ざんしやくさがゆえだつた。それは一個の宇宙である、と言うのが最も正しい印象であつた。

ガノンタワーは建物というより、竜巻たつまきのその内部のようであつた。柱の一本もない、天にも届く高さの吹抜けふきぬの下、魔王ガノンは、ただそこにいて、ただ吠わえていた。首は牙きばを持つ猪いのししに似ていたが、それ以上のものであつた。山、森、沼、川、そういったものが集まってできた形が猪の顔のように見えている。そんな有様ありさまだつた。

胴おを覆おうのは鎧よろいであつたかもしれない。しかし、それは、地層れきせんを歴然れきぜんと現した、山脈さんみゃくの断崖絶壁だんがいぜつぺきのようにも見えたのだ。確かに足らしきものはあり、それは二本に数えられたが、嵐に立ち上がった津波のようであつた。

そして、その足らしきものところに、ゼルダ姫がいた。透明な膜まくに覆われ、宙に浮かんでい

た。そして、そのゼルダ姫の閉じ込められた風船から、無数の繊維が伸び、その先は、ガノンタワーの地下の最下層へと通じていた。

魔王ガノンの封印を解く最も強い鍵、ゼルダ姫の魂の力が、その繊維の一本一本を伝わり、ガノンの足を捕らえ、この場から動くのを止めている最後の封印をじわじわと溶かしていたのである。魔王ガノンが幾世紀を経て自由を得、光の世界へ侵入する一瞬は刻一刻と迫っていたのだ。

魔王ガノンを前にして、ポールはけし粒のようであった。ゼルダ姫を追って、やっとここまでたどり着いた、と言うのが正しかったのである。紫色の毒雨は徹底的にポールを痛めつけた。折れる膝をなんとかもちこたえながら、ポールはよろめき歩き、マスターソードを振り回した。しかし、魔王ガノンには梨のつぶてであった。

魔王ガノンは、ポールがそこにいることさえ、そして、マスターソードが眼の前にきらめいていることさえ、意に解してはいなかったのである。ガノンは、復活をめざして、ただ突き進んでいたのだ。眼の前のたかが勇者、たかが退魔の剣などに、関心はなかった。魔王ガノンは、自分が果てしなく巨大な存在であることを知っていたのだ。ガノンは、これから侵入すべき光の世界へ向けて、毒気の嵐を吐き続けた。

まったく歯のたたない、反撃さえして来ない、そして、自分がここにいることさえまったく無視している、とてつもなく大きな存在を前にして、ポールは徹底的な虚無感を覚えていた。これは敵

でさえないのではないか、と思った。ただひれふし、絶対の忠誠を誓うべき神の姿なのではないか、とポールは思った。アグニムが自分の命さえ軽んじてその復活を望んだ理由を、たったいま知ったような気がしたのだ。

それは、いよいよ神経に毒気のまわったその証しであるかもしれないなかった。全身が弱り、ポールはふたたび、がくりと膝を落とした。マスターソードにすぎり、立ち上がろうとしても、身体は言うことをきかなかつた。

その時、ポールの頭上をこえて背後から、銀色の光が一閃、魔王ガノンに向けて伸びたのだ。

それは一本の銀の矢であった。魔王ガノンが、はじめて反応した。深いうつろな闇であるばかりの眼をこちらへ向けたのである。

ふたたび銀の矢が宙を走った。魔王ガノンの首に突き刺さり、ガノンははじめて声を上げた。地の底から轟くマグマの激流のような深い叫びであった。ガノンは、その鱗でおおわれた手で首に刺さった矢をぬき、こちらに投げ返した。矢はポールの眼前に突き刺さった。

銀の矢は次々に発射された。魔王ガノンの眉間に刺さり、頬に刺さり、腕に刺さり、腹に刺さった。ガノンは再び、マグマの叫び声を上げた。それは苦しみの声であった。しかし、ガノンは矢を払い落とし、払い落とせばただちに苦しみは消えて、ふたたび毒気の嵐を吐き続けるのだ。銀の矢は一瞬の苦しみを与えることはできても、とどめをさすことはできないのである。

くずれ落ちたポールの身体を抱きかかえる者があった。それは、銀の矢を放った人物であった。

「サハラ……」

ポールはなつかしい顔を見た。そしてそれは、いまのポールにとって、最も会いたかった人物の顔であった。

「ポール。ガノンの様子を見たか。銀の矢が突き刺さるそのとき、ガノンの全身は色を変えた。そこを狙い、マスターソードでとどめをさせる」

サハラは言った。しかし、あるまいことかポールは力なくただ笑ったのである。

「サハラ。あれは神だ。僕はもう駄目だよ」

そしてポールは、サハラの腕の中で、がくりと首を落とすのだ。

「ポール！」

サハラは叫んだ。しかし、ポールは答えることなく、腕からすべり落ちた。

サハラは天を仰いだ。なんとということだ。サハラは、ポールの首を抱き、大きく揺すった。ポールの首は手ごたえを失い、ただ空しくサハラの手の中を行き来した。サハラは叫び続けた。

「ポール。卑怯だぞ。逃げるといふのか。きさまはこのままあつげなく死のうといふのか。正々堂堂とやろうと言ったのはきさまだ。ゼルダ姫を前にして、さっさと背中を向けるのか！」

サハラは体温を失いはじめた。ポールの頬をなでた。涙が落ち、サハラの手が濡れた。





「……きさまに俺の気持ちがかかるのか。高い耳を持たない俺に、マスターソードは応えてはくれぬ。ゼルダ姫のために戦えぬ、ついに勇者ではなかった俺の気持ちがかかるのか。きさまに今生の命はくれてやる。俺の命をもって戦え！」

サハラは立ち上がった。そして天に向かってひとときわ高く叫んだのである。

「妖精よ。俺の命をポールに！」

\*

ポールは眼を覚ました。瞬間、すべてを忘れ、そして、その次の瞬間にすべてを思いだした。魔王ガノンの吐き出す毒気の嵐のすさまじい音が耳をつんざいた。

サハラが倒れていた。ポールはすべてを了解した。ポールはサハラの腰の革筒から、銀の矢を抜き、おのれの腰に納めた。

ポールは背をのびし、荒れ狂っている魔王ガノンを鋭い眼でにらみつけた。弓に銀の矢をつがえ、ひきしぼった。照準を眉間においた。ためらうことなく、矢を放った。

矢は宙に、直線の銀色をひき、深くガノンの眉間に刺さった。魔王ガノンは毒気の嵐を吐くのをやめ、苦痛の叫びを上げた。

ポールはさらにもう一本、銀の矢をつがえ、まっすぐにガノンに向かって歩いた。歩きつつ、矢

をひきしほり、そして放った。一打めの矢を払い落とす隙をあたえず、矢はガノンの左目を射た。

ポールはさらに矢をつがえ、歩き続けた。ポールが放った銀の矢はガノンの右目を射た。

ポールはふたたび歩き続け、ガノンを大きく見上げる位置に立った。ポールはマスターソードを腰から抜き、そして、魔王ガノンの巨体を上りはじめたのである。

口にマスターソードをくわえ、ポールは津波が二本たちあがったようなガノンの足を上った。口を投げ、断崖絶壁のような、ガノンの胸を上った。肩に駆け上がり、ふたたびポールはマスターソードを手に握りしめた。苦しみに身をよじり、大きく揺れるガノンの肩の上に、ポールは足元確かに立ち上がったのである。

「魔王ガノンよ。きさまの悪はその醜さにあるのではない」

マスターソードの切っ先に、光のしずくがしたたり落ちた。

「むさぼることしか知らぬ暗黒よ、血反吐を吐け。与え続ける光の前に、きさまらは、必ず潰えることを今こそ知るがいい！」

ポールは叫んだ。マスターソードが大きく円を描いた。光が描く正確な円が、魔王ガノンの首の奥深くをえぐった。

猪の異形の首がぐらりと揺れた。斧で断たれた大木がおのれの重みで倒れるように、魔王ガノンの首もまた、おのれの重みにちぎれた。

地に落ちるときガノンの首は、おのれの創つくった闇の世界が急激に集束しゅうそくして縮ちぢんでいく、その空しい音を確かに聞いたのだった。

ポールは、ガノンの首の切口に、巨大な闇のうつろを見た。そして、その闇のうつろの奥深くから、金色きんいろのトライフォースは姿を現したのである。

黄金の聖三角体は、宙に一瞬浮かんでゆっくりと回転した。輝きを強めてポールの傷を癒いし、安住あんじゆうの聖地を求めてふたたび姿を消した。

ポールは地におりた。ゼルダ姫が待っていた。ゼルダ姫を捕とらえていた風船の膜まくは、はじけるように消えていた。

ポールはゼルダ姫の手をとり、最も愛すべき人の眠る場所へと歩いた。

サハラの顔は穏おだやかであった。ポールは、サハラの身体を抱いた。

「僕の親友です。ともに戦いました」

ポールは言った。ゼルダ姫は、ポールの、その腕の中のサハラの頬ほおに手をあて、しばらく眼を閉じた。

そしてそのときポールは、ゼルダ姫の金色の豊かな髪が、翼のように広がるのを見たのである。一陣いちじんの風になびいたにすぎなかったが、それはすべてが終わった証あかしであった。涼しく、気持ち

のよい風が、いまこそハイラルに戻ったのだ。

宿命しゆくめいというのは、自分でその宿命をその通りだと思ったその時から宿命になるものだ、と僕は思っている。

偶然ぐうぜんに偶然が重なって、自然のなりゆきでどうやらこの道をゆかねばならないようだ、というよ  
うな時でも、僕らはきつとどこかで、重要じゅうような選択せんたくを行っているものなのだ。

いくら、誰かに背中を押されているようであっても、自分はその道を確かに選んでいるのである。そして恐らく、僕らは、その選択に、少なからず意地をはって歩いていかなければならないのだ。みんなそうして、生きていようと思う。

しかし、その、選んだ道が長ければ長いほど、また、太ければ太いほど、その道をゆける者とゆけない者のいることもまた確かだ。自分の力ではどうにもならない何かというのは、残念なことだが、あるような気がする。

また、だからこそ、自分の力ではどうにもならない何かによって自分が大きくなることだってあるのだ。運命うめいの天秤てんびんというものがあるとすれば、だから結局すべてはつりあっている、ということ

もできるだろう。

ポールは、道をゆける者だった。サハラはゆけない者だった。ポールはゼルダ姫のために思う存分戦うことが出来る宿命にあったが、サハラにはそれがなかった。

しかし、サハラはポールと同じ道をゆこうとしたのである。

サハラは命を落とした。ポールと同じ道をゆかんがために、サハラはポールに自分の命をゆずらなければならなかった。

ポールはゼルダ姫を救った。けれども、このふたりに、決定的な差はあっただろうか。命を落とすことと、ゼルダ姫を救いお世話することの間に、そこに何か優劣のつくような、そんな差があっただろうか。ゼルダ姫を救うことが最大の目的だったとすれば、その目的を達成したのは果してポールだったのだろうか。

より美しく生きたのはポールなのだろうか、サハラなのだろうか。英雄の振子は、どちらに大きく振れていたのだろうか。

原作であるスーパー・ファミコン用ゲーム「神々のトライフォース」のクリアは当然、ゲーマーである自分のコントローラーさばき如何によるものだけれど、その中で見事ガノンを倒し、ゼルダ姫を救出し、エンディングを迎えた美しいTV画面の中の主人公に何か嫉妬めいたものを感じるの  
は、僕だけではないように思う。

すべての手柄てがらをなんだか、いまハッピーエンドを迎えている画面の中の主人公にひとりじめされたような気が、僕などはするのだ。今まで自分の分身ぶんしんであったはずの主人公が、いきなり自分の手元から離はなれて幸せをひとりじめにしているような感じ。

ロールプレイング・ゲームのその意味は、役割を演じるゲームということ、とある宿命に向かつてひた走る主人公に生命を与え、その宿命を成じょうじゆ就させるのが僕らの役目である。画面上を冒険する主人公は、その時はすなわちそのまま僕らなのだが、ひとたび宿命が成就しゆんかんした瞬間、つまりエンディングを迎えた瞬間、主人公は自分からすり抜けて、画面の中でひとりだけさつさと英雄になり、僕らはTVの前に取り残されてしまうような、不思議な感じ。

そして、実は、サハラはそんな心持ちから生まれた脇役わきやくである。

最後になりましたが、ロールプレイング・アクション・アドベンチャーゲームの名作として名高いこのゼルダ姫をめぐるゲーム・シリーズをモチーフに書かせていただいたことに、ここであらためて関係者の皆様にお礼を申し上げます。

尾崎克之



Copyright ©1991 Nintendo

©Katsuyuki Ozaki

©1992 Futabasha

---

小説 **ゼルダの伝説 2**

神々のトライフォース

双葉社ファンタジーノベルシリーズ

---

著者 ……………尾崎克之

発行者 ……………井上功夫

発行所 ……………株式会社双葉社

〒162 東京都新宿区東五軒町3番28号

TEL 東京(5261)4818(営業)

東京(5261)4837(編集)

振替 東京8-117299

印刷 ……………慶昌堂印刷株式会社

製本所 ……………株式会社若林製本工場

落丁・乱丁は本社にてお取り替えいたします

定価・発行日はカバーに表示してあります

ISBN4-575-23125-8 C0093

---

[小説]

# ゼルダの伝説

【黒き影の伯爵】

樋口明雄・著

イラストレーション・藤原カムイ/伊藤伸平

ファミコン初期RPGの不朽の名作「ゼルダの伝説」公式ノベル。少年リンクの冒険と成長の物語。捕われのゼルダ姫を救え！

---

[小説]

# ドルアーガの塔

【YOU ZAP TO…】

井上尚美・著

イラストレーション・松下徳昌/篠崎雄一郎

60層からなる悪魔の塔に挑む冒険者たち！ アクションRPGの始祖「ドルアーガの塔」を完全小説化。リプレイ小説の決定版。

---

[小説] エフゼロ

# F-ZERO

【…そしてスピードの神へ】

尾崎克之・著

イラストレーション・鏡泰裕

レースゲームの最高峰「F-ZERO」が小説になって登場！超高速デッドヒートの彼方で、スピードの神が微笑む……。

---

[小説]

# ワルキューレの冒険

【紡がれし時の彼方に】

尾崎克之・著

イラストレーション・富士 宏

人々の胸の奥に棲む悪の心を糧として生き続ける、悪の化身ゾウナは、絶海の孤島に城を築き、満月の儀式を始める。マーベルランドにはるか昔から伝わる時の鍵の伝説……天の使いワルキューレはマーベルに元の時の流れをとり戻すことができるのだろうか？そして彼女をとりまく精霊たちの宿命とは……？

ナムコの人気RPG「ワルキューレの冒険」を完全小説化。魅力的なキャラクターの織りなす傑作ファンタジー！

---

[小説]

# ドラゴン・スピリット

【蒼き竜と赤輪の勇者】

不破悠介・著

イラストレーション・藤井昌浩

王国ミッドガルドに突如として訪れた、暗黒竜を仰ぐ蛮国ゴズアルの脅威。次々と龍い来る邪霊獣の群れ。唯一の希望は太陽神の巫女・アリーシャの信託であった。そこに示された碧き翼とは……。伝説の龍族の末裔・アムルをめぐる、愛と闘いの運命。その行手に待ち受けるのは聖龍への道か、暗黒神の餌食か……？

ナムコの人気シューティングゲーム「ドラゴン・スピリット」を完全小説化！

---

[小説]

# ウィザードリィ①

【狂王の試練場】

大出光貴・著

イラストレーション・吉井 宏

城塞都市リルガミン——上帝トレポーによって支配された魔道の王国。そこには〈狂王の試練場〉と呼ばれる迷宮があった。希代の天才魔術師ワードナがトレポーに反旗を翻し、自ら作り上げた魔の地下迷宮である。そこでは醜悪な怪物と謎のトラップを相手に、今日も冒険者たちの死闘が続いていた……。

世界中のプレイヤーを熱狂させたRPGの決定版、ついに完全小説化。悪夢の迷宮で、剣がきらめき、魔法が炸裂する！

---

[小説]

# ウィザードリィ②

【アラビクとマルグダの物語】

安藤君平・著

イラストレーション・浅田 隆

〈狂王の試練場〉を遡ること60年。リルガミンの人々は「ニルダの杖」に守られ平和に暮らしていた。ある時、邪悪な魔術師ダバルプスが闇の力を行使し、王位篡奪に成功する。王宮には召喚された魔物が徘徊し、街では不吉な噂が流れ始める。ダバルプスを倒すためには「ダイヤモンドの騎士」の力が必要だというのが……。

ウィザードリィ「ダイヤモンドの騎士」の序章ともいべき物語、公式ノベルとなって登場！ リルガミンの歴史がここにある。

---

---

[小説]

# ウィザードリィ③

【ダイヤモンドの騎士】

後藤信二・著

イラストレーション・吉井 宏

〈狂王の試練場〉より10年。一見平和に見えるリルガミンであったが、その水面下ではおそろべき厄災が進行していた。リルガミンの秩序を保つ魔法のアイテムは失われ、近隣諸国は不穏な動きを始める……。伝説の騎士の復活をめくり、あの最強パーティが再びリルガミンに帰ってきた！

ウィザードリィ公式ノベル第3弾は「ダイヤモンドの騎士」を完全小説化。冒険者は英雄になり、そして伝説となる……。

---

[小説]

# ウィザードリィ④

【リルガミンの遺産】

井上尚美・著

イラストレーション・浅田 隆

〈狂王の試練場〉から200年の時が流れた。その年、リルガミンに原因不明の突発的な災害があいつぎ、王国は疲弊した。神秘の力を秘める「ニルダの杖」を祀るニルダの寺院までもが崩壊し、終末が叫ばれた。「イアリシンの宝珠」を祀れば、奇跡が起こるといふ噂が広まり、冒険者たちは伝説の古代迷宮へと導かれる……。

ウィザードリィ「リルガミンの遺産」を、斬新な解釈で完全小説化。魔の迷宮で冒険者の様々な思惑が絡み合う人間ドラマ！

---

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

[小説]

# ウィザードリィ⑤

[ハート オブ メールストローム]

Wizardry®

[HEART OF THE MAELSTROM]



大出光貴・著

イラストレーション・吉井 宏

〈狂王の試練場〉から40年余。城塞都市リルガミンは廃墟に近い状態と化していた。恐ろしい混沌の力がリルガミンの街を侵食していたのだ。さらにその力は世界へも及ぼうとしているという。全てはブラザーフッド寺院の地下迷宮に潜んだ魔女ソーンの狂気が原因なのである。異次元の住人が闊歩し、時間の流れさえも呑みこむ混沌の大迷宮〈メールストローム〉で死闘が始まる!!  
話題のウィザードリィⅤを実力派大出光貴が完全活字化!!

新書判上製・定価1,000円



FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

# LEGEND OF ZELDA

The priest Agunin invaded Hyrule and evilness spreaded around the sacred land.  
To make the devil Gannon rise from the dead, he performed necromatic  
celemony and offered the princes Zelda in sacrifice.

Then Paul, a descendan of Hyrea, arrived with Sahara.

He was the only braver who could overthrow Gannon by the  
Master Sword and save the Princess. People expected their triumph....

小説「ゼルダの伝説」②「神々のトライフォース」

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

尾崎克之

双葉社

【双葉社】



## STORY

ハイラルは聖域である。そこは“トライフォース”と呼ばれる神の力にまつわる伝説を根に培われた世界。

“天下る何処かに黄金の力あり。触れそめし者の望み神に届かん。”

しかし、善悪を判断し得ないその力は、邪悪におしぼまれていたのである。

ボールの夢に毎晩現れる少女は、司祭アグニムにいけにえとして捕われたゼルダ姫であった。彼は剣士の長サハスラーの孫サハラと共に闇の世界へと挑む。

2人に待ち受ける非情な宿命……。

真の勇者になることとは……。

それは伝説に生きる者のみか知ることである。

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

【小説】 The priest Agunin invaded Hyrule and evilness spreaded around the sacred land. To make the devil Gannon rise from the dead, he performed necromatic celemony and offered the princes Zelda in sacrifice.

# ゼルダの伝説②

【神々のトライフォース】

Then Paul, a descandan of Hyrea, arrived with Sahara. He was the only braver who could overthrow Gannon by the Master Sword and save the Princess. People expected their triumph...

AUTHOR: KATSUYUKI OZAKI

尾崎克之



【小説】

# ゼルダの伝説

②

【神々のトライフォース】

尾崎克之

【双葉社】

ISBN4-575-23125-8 C0093 P1000E

©1991 Nintendo  
ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です

【双葉社】定価1,000円(本体971円)

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

# LEGEND OF ZELDA

【THE HYRULE FANTASY】

The priest Agunin invaded Hyrule and evilness spreaded around the sacred land. To make the devil Gannon rise from the dead, he performed necromatic celemony and offered the princes Zelda in sacrifice.

Then Paul, a descandan of Hyrea, arrived with Sahara.

He was the only braver who could overthrow Gannon by the Master Sword and save the Princess. People expected their triumph....

【小説】

ゼルダの伝説②

【神々のトライフォース】

PROFILE



尾崎克之

KATSUYUKI OZAKI

コピーライターとしても活躍する期待の作家。代表作『ワルキューレの冒険』、『F-ZERO』(小社刊)をはじめとし、ゲームブック他著書多数。スピード感あふれる展開、臨場感に満ちたペンタッチ。彼の持ち味は本編でもいかに発揮されている。趣味はゴルフにクルマ、そしてコンピュータ・ゲーム。

【小説】

# ゼルダの伝説②

【神々のトライフォース】

定価1,000円(本体971円)

1992年9月10日第1刷発行

著者 尾崎克之

発行者 井上功夫

発行所 株式会社双葉社

〒162 東京都新宿区東五軒町3番28号

カバー・イラスト▶藤原カムイ

カバー・デザイン▶広井一夫[NEXT]